

けものフレンズ2を見た 万事屋 + α

黒龍

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある時、お妙に新八の様子がおかしいと相談された銀時。それはどうやらあるアニメが原因のようで……。

※この作品はけものフレンズとけものフレンズ2の感想を交えた小説になっていますので、けもフレ2や特にけもフレ2の9話〜12話を見ていない人には不向きな作品になっています。

※個人の見解や解釈を多分に含んでいます。そこをご理解して読んでください。

※この作品はpixivにも投稿しています。

<https://www.pixiv.net/novel/show.php?i>

d || 1 0 8 9 2 3 2 1

4 / 1 6

タイトルを『けもフレ2を見た万事屋+ α 』から『けものフレンズ2を見た万事屋+ α 』に変更しました。

4 / 2 1

報告が遅くなってしまうかもしれませんが、感想欄が荒れていたのでログインユーザーからのみ受け付けるに変更しました。

目次

アニメ編

第1話：動物を好きな奴に悪い奴はい	ない	1
第2話：1話〜9話 我慢できない怒りもある	——	27
第3話：10話 一回凄い怒ると急に冷静になる	——	54
第4話：11話 世の中には理解できないモノがたくさんある	——	67
第5話：12話 何度も怒るのは体に悪いけど自分ではどうにもならない		

第6話：作品は常に人の心を動かす

112

最終回：怒りの先 前編

——

136

最終回：怒りの先 中編

——

152

最終回：怒りの先 後編

——

179

延焼編

延焼編：物事簡単に決着が付いたら苦

労はない

——

217

アニメ編

第1話：動物を好きな奴に悪い奴はいない

「……はッ？ 新八が最近ネット中毒で鬱病になつてる？」

志村新八の実家である志村邸の居間では、銀髪天然パーマの死んだ魚の目をした男である坂田銀時が木造りのテーブルを間に挟んで、志村妙から相談を受けていた。

銀時の横では赤髪の少女——神楽が用意されたお菓子をもりもり食べている。

銀時が怪訝そうな表情を浮かべると志村新八の姉である妙は「はい、そうなんです」と不安そうな表情を浮かべながら頷く。

銀時は妙の話を聞いて机に頬杖を付く。

「あいつ最近心ここにあらずだけど、んな事になつてんのかよ……」

万事屋の掃除といった雑用をさせていたのだが最近は上の空でまるで仕事に身が入っていないかった。

とにかく落ち込んだ表情が目に見えるようになったのは覚えている。

「結構前は楽しそうに掃除してんだけどなあ……あいつ」

銀時が言うようにだが、一時期は普段とは違うくらい雑用を進んでやるくらい機嫌が良

かったのだ。

なぜか時々だが「すつごーい」とか「うれしー」とか謎の言葉を呟いていた時にはかなり不気味に感じたものではあるが。アレは鬱病の前兆と言う事なのだろうか。

銀時の言葉を受けて妙は頷き、不可解と不安が交じり合った表情で言葉を続ける。

「ちよつと前までとにかく落ち込んでいただけなんですけど、ここ最近になってすつごい不機嫌になって今じゃ暇な時は、それこそ日がな一日部屋に籠ってパソコンに噛みついてるんですよ」

「……あー、なんか確かに聞くだけだと鬱病っぽいな」

銀時が腕を組んで自身の予想を告げるとさつきまでお菓子をもりもり食べていた神楽が反応を示す。

「私はどうせネトゲの萌えキャラに倣って情緒不安定になったってオチを押しすネ」

「まあ、そう言う前科あるしなあ……」

銀時は腕を組みながら天井を見て思い出すのは新八がギャルゲにドハマリして我を失ったエピソードである。

「確かに前は女の子がいつぱい出てくるアニメを見ていたと思うんですけど……今はなにか別のモノに熱が集中しているんですよね」

妙が頬に手を当てながら告げた言葉に銀時は目を細める。

「ん？ そうなのか？」

「ちよつと前に心配になつて後ろからこつそり新ちゃんが何をしているのか画面を覗いたことがあるんですけど、なんだかネットの掲示板に色々書き込んでいたんです」

「ネットの掲示板？」

妙の言葉を聞いて銀時は眉間に皺を寄せる。

妙は悲し気な表情でポツリポツリと言葉を漏らす。

「新ちゃんはきつと……家族に相談できないほどの悩みを抱えて……ネットの掲示板に入り浸るようになってしまつたんじやないかしら……」

「まあ、分からなくはねえな。だって、悩みの種がゴリラに育てられた暗黒物質産機——」

ズドンツ!! という凄まじい轟音が志村邸に響く。

「きつと私は仕事の不満、つまりは万事屋への不満が溜まつているんじゃないかと思うんです」

とお妙は真剣な表情で告げる。

「ネットの掲示板に不満を呟いて解消しようとしてもしきれない。そんな負のサイクルが新ちゃんの躁鬱の原因じやないかと私は見えています」

というお妙の話を聞きながらどでかいタンコブを頭に生やした銀時は机に頬を付け

ながら精気のない小声を漏らす。

「むしろ俺がお前への不満を呟きてエよ……」

「とにかく銀さん！ 原因はなんにせよ、新ちゃんは鬱病一歩手前かもしれない！！
そうなる前になんとかしないと！！」

必死に頼み込むお妙に便乗するように頬袋にお菓子をため込んだ神楽も。

「そうアルよ銀ちゃん。ぱつつあんが鬱病にでもなったら、まず原因は仕事場の上司たる銀ちゃんになるネ。そしてゆくゆくは姉御にたんまり慰謝料払わないといけないアル」

とんでも理論提唱する神楽の言葉は無視するとして、今の新八の状態を放っておくのもまずいと思う銀時。

銀時はゆっくり体を起こしながら頭をボリボリと搔く。

「まあ、マジで鬱病なんぞになられても困るしな……。病院連れてくとか大きな問題になる前に、やるだけやってみつか……」

*

新八の私室。

そこでは電気も付かない暗い部屋では座布団に胡坐をかき、視線を前のめりにしてカタカタと音を鳴らしながらキーボードを弄る新八の姿があった。

一心不乱に画面を注視し、とにかくカタカタカタとキーボードを打つ新八。
その時、

「なあゝにやっつてんだお前？」

横からぬくつと新八の顔に自身の顔を並び立つように死んだ魚をした目の男が現れる。

新八は突如顔の横に現れた銀髪天然パーマを二度見してから、

「ぎゃああああああああああああああああああああああああああ!!」

悲鳴を上げて銀時に離れるように後ろに飛び退く。

「ちよッちよッちよッ!? えッ!? ちよッ!? いきなりなにッ!? ビックリさせないで

くださいよ!! 心臓に悪い!!」

狼狽える新八に対して銀時は机に置かれた液晶画面を覗き込む四つん這いのポーズのから立ち上がり、尻もちを付く新八へと体を向ける。

「画面に嘔り付いてるおめえが俺に気付かなっただけだろ」

銀時の言葉を聞いて新八は「あッ」と声を漏らす。

「もしかして……銀さんが呼んでるのに僕、気付きませんでしたか？」

「ああ、呼んだよ。心の中で」

「いや口で呼べや!! 口で!!」

とツツコミ入れる新八に構わず銀時は腰に手を置いて新八を見下ろしながら口を開く。

「まあ、そんな些細なことはこの際置いてだ」

「いや置いとくなよ!! 僕は心臓飛び出るくらいビツクリしたんですが!!」

「おい、新八」

「えッ? は、はい」

「お前、ラジオ体操やってみねエか?」

「……………はッ?」

「朝早く起きて体動かすのは心と体の健康にいいはずだぜ」

「……………へッ?」

なに言ってるのこの人と云わんばかりに目を点にする新八。だが眼鏡の青年の様子などにまったく構わず銀時は次々と言葉を告げる。

「早起きがメンドーならランニングはどうだ? 汗と一緒にイライラを流してみエか?」

「いや……………えッ?」

空いた口が塞がらない新八に対して銀時は腰を曲げ、ポンと肩に手を置く。

「体を動かすのが嫌ならせめて銭湯はどうだ? 風呂に入れば、もやもやした気持ちも

少しは洗われるはずだぜ」

「ちよちよちよちよちよちよ!! こわいこわいこわいこわい!! あんたさつきからどうしたの!! なんでそんなに優しい感じなの!? 全然銀さんらしくありませんよ!!」

顔を青ざめさせて動揺する新八に銀時に真剣な表情で告げる。

「おめエの姉上から全部話は聞いたぜ。お前最近、掲示板に鬱憤を吐き出してそうじゃねエか」

「えッ!? 姉上、知っていたんですか!?!」

「むしろ気付かねエ方がおかしいくらい最近のお前がおかしかったんだよ。さすがにネットに入り浸り過ぎだつてな」

「そッ……そうだったんですか……」

と言ってから新八は申し訳なそうな顔で告げる。

「すみません……。心配かけてしまって……」

「まあ、謝らなつて。別にお前が悪いってワケじゃねエし」

「あの……なんでそんなに……優しい気なんですか? ちよつと気持ち悪いとか通り越して怖いんですけど……」

「どうも姉上が言うには、おめエは鬱病になりかけてんだとよ」

「ぼ、僕が鬱病才!? なんで!? どうして!? 僕精神病患者みたいな感じに見られてたんですか!?! ちょっと心外なんですけど!?!」

「それだけお前の様子が変わったってことだろ。まあ、心の病気つてのは体の病気みてえに本人ですら中々気づけねエもんらしいからな」

「は、はあ……」

なんか納得がいけないと言うか腑に落ちない表情を見せる新八に対して銀時はポンポンと肩を叩く。

「おめエがなんの不満は溜め込んでいるかは分からねエが、少しは周りの人間に鬱憤をまき散らすのも悪かねエンじゃねエか? どの誰とも知らねエ奴よりかは、よつぽど相談に乗れると思うぜ」

「いやあ……そもそも……僕が鬱病扱いされているのが問題だと思っんですけど……」

「まあ、お前が病気云々はこの際置いてくとしてだ。まずはお前の悩みを教えて欲しいんだよ。でねエと、おめエの姉ちゃんが心配という心労のあまり精神病になっちゃまうらしいぞ」

「鋼より頑丈な精神を持った姉上が病むワケないでしょ……」

「まあ、いいですけど……」と言って新八は立ち上がり、眼鏡をクイツと上げて真剣な表情を向ける。

銀時もまた新八へと合わせるように立ち上がり、彼へとまっすぐ対面する。

「僕が何に悩んでいるかは、もう分かっているんですか？」

と言う新八の問いに銀時は頷く。

「まあ、おおよそはな」

「そうですか……。なら、この際だからぶちまけちゃいますよ？」

「おう。どんとこい」

とにかく相談をするという場面にまで持ってこれた銀時は内心よしと頷き、これから悩みを吐き出すであろう新八の言葉を待つことにする。これで一応お妙へに自分は何もできなかったという情けない報告はしなくて済みそうだ。

新八はすう〜と息を吸いながら不満をぶちまける準備をする。やはりよつぼどの悩みなのだろう。

その間に銀時は新八が一体何について悩んでいるのか予想する。

——どうせ神楽のことだろうな。

どういう自信があつて自分のことではなく、毒舌娘の神楽が原因であると決めつけるかと言う疑問はさておき。

新八は息を深く吸ってから吐きを何度か繰り返した後、目をクワツと見開き、

「けものフレンズ2のことなんです!!」

不満を吐き出す。

銀時は新八がちやんと悩みを言ってくれた事にしつかり頷き返す。

「うん、そうか。けも……………うん?」

だがすぐにあれ? 変な単語でてきたぞ? と思考が停止する。

銀時の様子など露知らず、新八は不満を爆発させるように捲し立てる。

「けものフレンズ2はマジでおかしいんですよ!! もうホントにどうしてこうなったっか言うレベルで——!!」

「ちよつと待て」

「1期ファンだからこそその怒りはあります!! だけど楽しんでる人もいる!! だからこそそういう不満や怒りをグツと抑え込んで好意的に見守っていかうとしたんですよ!!」

「だからちよつと待て」

「たとおかしくてもですよ!! けもフレっぽくないとしてもですよ!! ことごとく1期ファンの気持ち逆撫をするシーンが満載だとしてもですよ!! 僕は我慢したんですよ!! 我慢し続けたんですよ!! でも6話で視聴を途中で中断しちゃいました!!」

「ちよつと待てちよつと待てちよつと待てちよつと待てッ!!」

「でもなんとか持ち直して視聴を再開したんですよ!! なんか妙にネットで話題になってたから!! 7話をなんとか耐え抜き迎えたのが8話ですよ!! 8話だったんですよ!! ま

さかの——!!」

「ちよつと待つてつってんだろぅがアアアアアア!!」

こつちが我慢できなかつたので新八にアツパーカットぶち込む銀時。

「ゴハアツ!! 暴力のフレンズ!!」

なにかよく分からない単語を出しながら吹っ飛び畳の上に横たわる新八を眺めながら銀時は頬をピクピクさせる。

「えッ? お前なに? なんの話してんの? ふれんず? なにそれ? けもフレ? なにそれ? 魔法呪文かなにか?」

殴られた新八は顎を抑えながら慌てて喋り出す。

「ぎ、銀さん!? なんで怒ってんですか!? あなた僕の悩み分かってくれたんじゃないんですか!? なんで言葉じゃなくて鉄拳が飛んでくるの!?!」

「いや、知らねエよ!! けものなんちやらなんて!!」

「ええええええええ!! 僕がけものフレンズ2つてアニメについて悩んでるの知らなかつたんですか!? あんたこつちの事情まるで把握してないじゃん!!」

「こつちがええええええ!! だわ!! 把握できるワケねえだろ!! 予想外過ぎて口じゃなくて手が出ちまつたじゃねエか!!」

「いや僕が訂正する前に手は出てたじゃん!!」

「つうかアニメだア!? たかだかアニメの事についてあんなにマジで悩んでたのかおめエは!! てつきり万事屋の——主に神楽とかの不満について悩んでるばかりに思つてのに!! 心配して損したわ!!」

「いや悩みつてそつちかよ!! まあ妥当な悩みでしょうね!! つうかなんで神楽ちゃんオンリーなんだよ!! むしろ不満があるとしたらあんただわ!! この際だから言つとくけど今月も給料薄給つてレベルじゃなかったぞおい!! そもそもあんたに対する不満なんて普段からぶちまけてますから!! こうしてあらためて言う必要どこにもありませんからね!!」

とにもかくにも銀時も新八も口から不満をあるだけぶちまけた後、一旦口論を止めてハアハアと肩で息をする。

そして銀時は息を整えてから気持ちを落ち着け、やがて口を開く。

「まあ……なんだ。つまりは……アレか? おめエが見たつて言うその……なんだ……」

「けものフレンズ」

「そう。そのげてものフレンズを見てすんげー文句があつて今まで悩んでたワケだ」

「けものフレンズです。……まあ、ぶつちやけるとそんな感じですよ」

新八の悩みを聞いた銀時の感想は、

「バカじゃねえの?」

と実直なものだった。

「……予想はしてましたけど、バツサリ言いますね」

特に傷ついた様子もなく、新八はジト目を向ける。

「たかがアニメだからな。そんなものに一々精神乱される奴の気が知れねエよ」

「そりや、僕だつてアニメにここまで凹ませられるとは思ってみませんでしたよ……」

「じゃあ見るの止めればいいじゃねエか」

「いや、ホントそれが正解なのかもしれませんけど……1期のファンとしてはどこがおかしいのちゃんと検証したいというかなんというか、とにかく途中で脱落するのもいかんともしたがたく……残り話数も少ないからもうこうなったら行くとこまで行ってやろうって気持ちにすらなつてしまうワケで……」

「あく……わかった。とにかくおめエの悩みの種は分かった。まあとにかく、こつちが用意したもんは必要なさそうだな」

「用意したもん?」

不可解そうな表情を浮かべる新八を尻目に銀時は新八の部屋の扉の前まで来て襖の引き手に手を掛けて横へとスライドさせる。

「つうわけで、問題なさそうなんで帰ってもらっていいですか?」

「オヤ？ イイノデスカ？」

タンクトップを着こんだ筋肉ムキムキ色黒マツチヨマンと、

「安くしときますよ、シャチヨサーン」

バスタオル一枚に小脇にたらいを抱えた女性が新八の部屋の前で待機していた。

「いや誰だよその人ら!! あんた僕をどうするつもりだったの!？」

と新八がツッコミ入れると銀時は気の抜けた顔で色黒まっちょよに手で指しながら答える。

「こっちはマツサージのマサさん」

「ハーイヨロシクネ」

「もろ外国人じゃねエーか!! どこがマサさん!? つうかなんでマツサージ!？」

と新八がツッコミ入れると銀時が真顔で告げる。

「身体の凝りと一緒に心の凝りをほぐそうと思つてな」

「ちよつとうまいこと言つてんじゃねエよ!! 腹立つな!!」

新八はすぐさまバスタオルの女性を指さす。

「じゃあこの人はなに!？」

「こっちはベティだ。一応マツサージ師だな」と銀時は答える。「……下の」

「おい加減しろよマジで!! 青少年にどんな癒しを提供しようとしてんだあんたは!!」

「とりあえず、おめエの鬱憤を下から出そうと——」

「それ別のもんが飛び出すだけだろうがアアア!!」

帰れエエエ!! と言つて新八はダブルマツサージ師を追い出すのだった。

*

「まあ……なんだ」

とりあえず、話を本筋に戻そうとする銀時。

「おめエの悩みは分かった」

「ならもういいでしょ?」

と新八は気のない声で答える。

「たかだかアニメに対する不満。銀さんとか姉上に相談しても意味ないんですって」

「俺らに相談してもまともな受け答えになんねエから、掲示板に不満ぶちまけてんだろ?」

「いやまあ……僕と同じ意見の人いっぱいいますし……どこが悪いかあらためて考えられますからね」

「なんでかは分かんねエが、おめエがそのけものフレーバーが気に入つてことは理解した」

「けものフレンズです。興味ないのは分かりますけど、せめて名前くらいは憶えて下さ

い。まあ、そうですね。好きだったんですよ。1期は。でも……2期が酷くて……」

「不満と怒りが込み上げてきたんだろ」

「まあ、つまりそういうことです」

「つうか、よくよく考えたらおめエ親衛隊やらの規則に抵触にしねえの？ アニメファンになるの？」

親衛隊とは、新八が寺門通というアイドルを応援する為に結成された親衛隊。要はアイドルファンクラブである。

「いや、さすがにそれは横暴なんでやってません。他のアイドル応援するとかアニメに現を抜かしてお通ちゃん応援をおろそかにするなら制裁ですけど。応援活動に支障が出ない限りは口出ししないって決まりになってます」

新八の問いに対して銀時は心底どうでも良さそうな顔で。

「あッ、そ。まあ、どうでもいいけど」

「いや、あんたが聞いたんでしょ」

「まあ、わかった。なら、最初の問題に戻るが、おめえはその精神に異常をきたすアニメをこのまま見続けるつもりなんだな？」

「いや、精神異常をきたす言い過ぎですからね？ とにかく不満と怒りを覚えずにいら

れないってだけですからね?」

「それでも十分だと思っけどな。とにかく、見るんだろ?」

「まあ……はい。これからどうなるかって気にはなるんですよ。良い意味では決してないですけど」

「怖い物見たさってヤツか。まあ、そう言うワケなら分かんなくてもないな」

銀時はため息を吐いた後、うんうんと頷きながら「わかった」と言葉を漏らす。

「なら、俺もそのアニメ見てみるか」

「えッ!?!」

予想しなかった答えだったのだろう。新八は心底驚いたと言う表情をし、銀時は説明を始める。

「まあ、なんでそんなにお前が怒り抱えてんだか純粹に興味あるしな。言っちゃまえば俺も怖いもんみたさってやつだ。それに俺も見とけば、ちったあおめえの愚痴の吐き出し相手に俺もなれんだろ」

「じゃ、じゃあ……銀さんもけものレンズ見るってことですか? 大丈夫ですか?」

話しを通じる相手がこれからできる事が嬉しいのか、新八は表情を綻ばせるが同時に不安そうな表情を浮かべている。

「なに? そのアニメ、グロイホラーアニメなのか?」

「いえ。銀さんの苦手なホラー要素は皆無です」

「いや、苦手じゃないからね？　グロだったら嫌な気分になるかもなーってだけだからね？　ホラーならどんと来いだからね？　まあ、とりあえずグロもホラーもない題名通りのガキ向けアニメなんだな？」

「まあ、子供向けって言えば子供向けですねかね？　一期はですけど」

時折暗い表情で妙な言い回しをする新八に眉間に皺を寄せる銀時だが、とくに質問はせず話を聞く。

「とりあえずざっくり説明すると、動物擬人化アニメですね」

新八の言葉を聞いて銀時は目を細める。

「それ……登場人物全員女とかじゃないよな？」

「……………」

いくばくかの沈黙の後、新八は無言で頷く。

「テラキモ」

天パ男の言葉に新八は顔面に青筋浮かべ頬を引き攣らせるのだった

*

「なにやってるアルか？」

志村邸の居間。

そこでは神楽が怪訝そうな表情でリモコンを操作する新八と頼杖を付く銀時を見る。

銀時は気だるげな表情で木造りの机に頼杖を付きながら神楽の問いに答える。

「ぱつつあんが撮り溜めしてるげるものフレンズってアニメをこれから一気見すんの」

まったく視線を神楽へと移さない銀時の答えを聞いて、赤毛の少女は「おお！」と声を漏らす。

「それ私見たネ!! めっちゃ面白かったアル!!」

「えッ!?!」

と銀時は驚きの声を漏らしながら神楽へと顔を向ける。

「なに? お前視聴済みなの? マジで?」

「前にパピーが『情操教育に良いって評判のアニメらしいので、折角だから神楽ちゃんも見て、優しい心を養って下さい』って手紙と一緒にDVD全巻を送ってもらったアル」

「へー……。んで? 面白かったと?」

「マジ面白かったネ!」

「へく……。なるほど。ガキ向けらしいが、出来は良さそうだな」

と銀時がけものフレンズと言うアニメに期待を持ち始めていると、

「ハア……。まさか新ちゃんがアニメで悩んでいるなんて思ってもみなかったわ」

四人分の湯飲みと和菓子が詰められた木皿が乗せられたお盆を持ってきた妙が呆れ

た声を漏らす。

湯呑を神楽、銀時、新八の前に順に置きながら妙も正座で座布団へと座る。

「まあ、いいんじゃない？　そこまで深い悩みつてワケでもなかったんだしよ。あいつのお気に入りのアニメがどんな惨状になってんだか確認した後から、テキトーに愚痴聞いてやりな」

「まさかこの歳になって弟と一緒にアニメを見る事になるとは思わなかったわ……」

「新八いわく、家族と一緒に見ても恥ずかしくはならないアニメらしいぜ」

「それはいいんですけど、私は銀さんをシバキ倒すだけで済むと思ってたから、残念で仕方ないわ……」

「うっし新八！　さっさと見よう！　見て愚痴を存分にまき散らそう！」

「あッ、はい。じゃあ、再生しますね」

新八が再生のボタンを押し、アニメが始まる。

すると木々が生い茂る広大な大地の映像が映し出される。

神楽はアニメを見ながら和菓子をもっさもっさ食いながら口を開く。

「銀ちゃん銀ちゃん。そもそも、なんでぱっつあんの部屋で見ないアルか？」

「DVDデッキが居間にある一台しかねえんだとよ」

銀時も和菓子をもっさもっさ食べながら答える。

ちなみに二人共、一応画面から目を離していない。

映像に木の上で寝ている獣の耳が生えた少女の姿が映し出される。

「なあ、新八」

と銀時が声を掛ける。

「なんですか?」

「なにこれ? 粘土かなにか? アニメの質感おかしくない?」

「最近よく見かけるCGですよ。あんた仮にもジャンプ読者でしょ? CGアニメくら

いは知って下さいよ」

「ああ。それってあれだろ。ネズミの——」

「それ以上は言っちゃあかん!!」

新八が危ない発言を遮る中映像は切り替わり、ケモミミの少女が誰かを追いかけて始めている。

『うわあ〜! ウヒヒヒ!! ウヒヒヒ!! アハハハ!! ウヒヒヒヒ!! アーハー!!』

パチン!

突如として映像は切れ、真っ黒な画面となる。ようはつまりテレビの電源が切れたのだ。

新八、神楽、妙の視線がある人物——リモコンボタンを持った銀時に向けられる。

「つまらん。耐えられん」

と銀時は冷めた声で告げ、

「いや、早いですって」と新八。「気持ちには分からんでもないですけど。とりあえず、続き見ましよう?」

「いや、確信したね。コレはクソだわ。お前らがキ共と俺の感性が間違いなく合っていない。だって面白くねえもん。ドラゴンボールやワンピースやナルトを思い出せ。あの最初のワクワク感がこれには決定的に欠けているじゃねえか」

「まだ始まって1分ですよ? ドラゴンボールの引き延ばしより耐えるの楽でしょ」

「もういい。もうめんどくせー。これの為に貴重な俺の時間を割いてられねエ」

「年中暇人のあんたに貴重な時間なんてないでしょ?」

銀時は深いため息き、妙も微妙な顔で告げる。

「新ちゃん。私も新ちゃんには悪いけど、このアニメが面白って思えないわ」

「そりや開始一分で脱落したら面白さもヘツタクレも分からんでしょ普通」

「こらえ性のない年上たちと思ったのか新八は深いため息を吐き、銀時は頭をボリボリと掻きむしってから告げる。

「おい、新八。2期って1期を見なくても普通に話とか理解できんのか?」

「えッ!? ……ま、まあ……一応は大丈夫だと思えますけど……。2期見て話が分から

「ないなんてことないでしょうし」

「もうまどろっこしいから問題の2期見せろ」

「ええええええッ!? いや、それはまずいですよ!!」

「えッ!」と神楽は驚く。「マジアルか!?」 けもフレには2期があつたアルか!! 見たいネ!!」

興奮する神楽をよそに銀時は気だるげな声で言う。

「別にいいだろ。おめエは1期が面白いから文句とかねエんだろ?」

「そ、そうですけど……」

「それで問題は続編の2期なんだろ?」

「は、はい」

「なら、おめエの言う2期見た方が余計いいじゃねエか」

「いやいやいや!! 1期と2期って普通に繋がりがああるんですよ!! ほんでもって1期見ないと2期のどこが悪いか判断できないでしょ!!」

「ばっかお前。俺はなあ、おめエの愚痴聞く相手になつてやると言ったが、Yesマンになるんざ言つてねエぞ」

「いやいやいやいや!! Yesマンとかそういう問題じゃないんです!! 1期ファンの僕が怒つてる理由を理解する為にも2期の前に1期でしようが!!」

「いいか？俺はなあ、アニメにしろマンガにしろ周りの情報に踊らされずにちゃんと見てから吟味して感想を持つ男なんだよ。ならよ、1期を知らない真つ白な状態で見た方が公平な感想が出来るいいじゃねエか」

「え、えエ……そ、そうなんですか……？」

「そうだよー。お前が1期をどれだけ過大評価しているかわからねエけどよ、もしかしたらただのファンと言う心理によって視野が狭まり目が曇っているだけかもしれねえ。もしかしたら2期は1期よりも面白い物かもしれないねエ。なら尚の事、真つ白な状態の俺こそが2期を公平かつ厳正に審査できるだろ？」

「は、はあ……。わかったような……わからないような……」

ちなみだが、銀時はただ単にけものフレンズ1期12話を一気見するのがめんどくさいので、2期9話を見てテキストに新八の愚痴を聞く腹づもりなだけである。

戸惑う新八を追撃するように神楽がグイツと手を上げる。

「私も銀ちゃんに賛成ネ!! 2期見たーい!!」

「か、神楽ちゃん……あの……その……2期はね……えつと……」

なんだか凄く言い辛そうにする新八に更なる追い打ちをかけるように。

「ねえ新ちゃん。もうこの際だからアニメの説明はしないでちょうだい」

という妙の言葉を聞いて新八は慌てます。

「あ、姉上!! いやだって2期はですわ——!!」

「ねえ、新ちゃん。私も1から順に見るのは大切だと思うけど、ファンである新ちゃんから受け取る情報は公平性も欠けていると思うわ。それに、銀さんの意見もあながち的外れじゃないと思わない? だってファンじゃない人間が見た感想を聞く方が新ちゃんとしてもあらたな見解を得られるはずよ」

「う、うう………わ、わかりました……。そこまで言うなら……」

折れた新八はDVDデッキを操作し始めながらけものフレンズ2を再生する準備を始める。

だがやがて新八は手を止めて、

「じゃあ、もう何も言いませんけど………そこまで豪語するならもう視聴を途中で止めたと言おうのなですよ?」

訝し気な視線を向けながら確認してくるが銀時は構わず軽い口調で返事をする。

「わかった。侍に二言はねエから安心しろ」

「同じく」

と妙も頷く。

「じゃあ、はい」

と言って新八が再生ボタンを押す。

そして始まるけものフレンズ2。

シーンは進んでいき、主人公(?)とサーバルの会話。

そしてお腹が空いたというシーンで、

『た、食べないでー!』

プツン!

また画面が暗くなった。

そして新八、神楽、妙の視線は前と同じ方向に向き、リモコンをテレビに向ける銀髪は一言。

「すまん。俺、今日から侍止めるわ」

第2話：1話～9話 我慢できない怒りもある

「はあ〜……やつと終わった……」

けものフレンズ1期12話を見終わって一息つく銀時。両手を畳の上に置いて体を支えながら天井を見上げる。

居間から見える外の景色はすっかり暗くなり、時間の経過を如実に示している。

「お疲れ様です」

お妙はニコリとした笑顔でアニメ12話を一気見した銀時を労ってお茶を差し出す。

とにかく面白くなって見たくない。新八の愚痴とかどうでもいい。とにかく駄々をこねる銀時ではあったものの1期は途中から面白くなるから我慢してください、という新八の助言を信じてけものフレンズと言うアニメを走破した。

「まあ、悪くなかったんじゃないかねえの」

と銀時が初めてけものフレンズの感想を口にする。

途中でアニメ視聴を中断しない程度には銀時もこのアニメを評価できたので、概ね最初の評価を良い方に裏切った作品と思っている。

「やっぱ面白い奴は2回目でも面白かったネ!!」

と神楽は大絶賛している。

銀時的には大絶賛するほどでもなかったが、まあ文句を言う部分は特になかったくらいである。

そして銀時は最大の問題を思い出す。

「んじゃま、次は問題の2期だっけか？」

「……とりあえず、時間も遅いので明日にしましょう」

「そうだな。さすがにここから連続はきちいな」

と言う新八の提案に乗っ取り、2期視聴は明日になった。

*

そして時間は経ち、翌日。

再び志村邸にてアニメ視聴の為に居間へと集まる、銀時、新八、神楽、お妙、近藤。

「ガーハツハツハツハ!! それではみんなで仲良くけものフレンズ2期を見ようではないかア!! フレンズだけに!!」

と豪快に笑うゴリラ似の男。

上座に座る近藤はひとしきり大笑いしてから妙へと顔を向ける。

「しかしお妙さん!! こうやって一緒にアニメを見るとは、まさに我々はフレンズと言うよりファミ——」

「なあにさも当たり前のように参加したんじゃないがアーツ!!」

「妙は怒りの鉄拳を近藤の腹へとお見舞いする。」

「オボワアツ!!」

と悲鳴と共に胃液と血液を口から吐き出すゴリラ似の男性は江戸の治安を守る真選組と言う武装警察組織の局長である近藤勲その人である。ちなみに妙のストーカーである。

銀時はとしていつものように妙にストーカーしてしばかれています近藤など慣れた光景なので机に頬杖を付きながら新八に指示を飛ばす。

「おい、新八。そこにいるゴリラの成り損ないは放っておいてとつとつとけもフレ2を見るぞ」

「キョツホオーイ!! ついに2期見れるネエーツ!!」

神楽は待ちに待った続編が見れると言う事で大喜びである。

銀時も、かばんとサーバルがあれから一体どんな旅をするのか少し期待している部分がある。

「じゃあ、再生しますね……」

新八は光が宿らない瞳のままリモコンの操作を始める。

「よ、よろずやく……!!」

そんな時だった。妙にしばかれるだけしばかれた近藤がボロボロのメタメタになりながら畳を這いずって銀時の隣にやって来る。

「なんだゴリラモドキ。俺は今からけものモドキじゃなくけものフレンズを見るのに忙しいから話しかけんな。邪魔したら殺すぞ」

「フツ……初々しいな……。そうやってけもフレ2を視聴する前の俺を見ているようだ……」

「なんだ。お前も見てたのか。まあ、お前の世界は優しさの欠けらもねえからな。さぞ優しい世界に心癒されたんだろ」

「優しい世界……か……」

近藤は畳に這いずつたまま遠い視線を明後日の方向へと向ける。

チラリと近藤の様子を見てから銀時は新八が2期に怒りを燃やしていたことを思い出す。

「2期の出来が悪いって言ってもよ、どうせ1期に比べてつてことなんだろう？ 熱が入った奴に取っっちゃ少し質が落ちただけでも結構看過できないなんてことはよくある話だ。ぱつつあんとかは一度熱が入ると燃え上がるタイプだからな」

「確かにな……作品を見る上で視野と心の広さが狭まるのはよくないことだな……」

「でもま、銀さんはちよつと質が落ちようが騒ぎ立てるほどのめり込んでねえから、ちやうんと客観的に評価するけどな」

銀時の言葉を聞いて近藤はフツと笑みを零し。

そして耳に小さくではあるが、覚悟した方がいいぞ、と言う言葉が聞こえた気がした。そして始まるけものフレンズ2――。

*

※ここから先は感想の簡略化の為に台本形式にします。

*1話視聴中。

銀時「……………おい。かばん……………どこ行つた？ 旅の続きは？」

妙「きつと何かあつたのよ。新主人公のキュルルちゃんど記憶を失つたサーバルちゃんとカラカルちゃんがある謎を紐解いていくに違いないわ」

銀時「なるほどな。後から謎を明かしていく感じが。まあ、よくある手法だな。そんなかばんを見つけてから旅再開か」

神楽「私的にはカバンとサーバルの旅をまた見たかつただけどナー……………」

*1話終了。

銀時「最初はやつぱなんか物足りねえな。やつぱ通過儀礼みてえなもんか？ まあ、

カラカルって今までにいねえキャラ出て来たし期待してもよさそうだな。こつから面

白くなっていくってことか」

妙「なんだかサーバルちゃん性格……変ね？ 気のせいかしら？」

と妙は既に1話で違和感を覚え始める。

神楽「面白かったネ！ デカイセルリアン現れた時はめっちゃわくわくしたアル！」
神楽はかばんちゃんのこととは仕方ないと諦め物語を楽しむことにシフトする。

*2話

銀時「このレッサーパンダだったか？ 妙に勘に触るな。俺が短気なだけか？」

と銀時は若干イライラし始め、

妙「なにかしら？ なんだかこう……フレンズに言葉では説明できない違和感を覚えるわ」

銀時「つうか話も変じゃね？ なにがとは言わねえが、なんか妙な違和感感じるんだ

よな……。なんでだ？」

と妙どころか銀時も更に違和感を覚え始める。

神楽「うほほい！ パンダ中々やるアルな！」

*3話

銀時「まあ……いいんじゃない？」

妙「イルカちゃん可愛いわね」

神楽「んく……ちよつと物足りない感じがしたネ」

*4話

銀時「可もなく不可もなくだな……。そろそろ、面白くなつていくはず……。だよな？」

妙「あら？ この子1期に出てきた子と同個体かしら？」

神楽「ん……んく……？」

*第5話

銀時「これ……1期の話の焼き回しじゃね？」

神楽「なんかぎすぎすしてばっかで優しさ感じないネ」

妙「ゴリラさんはお腹が弱いのね。どこかのゴリラモドキさんと違ってもう少し頑丈にならないと皆を引っ張っていけないわよ」

*第5話ラスト

銀時「ちよつと待てちよつと待てちよつと待てエエエエエ!? マジか!? マジなのか!? エッ!? 成長してんの!? なんで!? 旅の続きは!? つうかサーバルつてこれアレだよな!? ただぶつ切りにして切っただけだよな!? “ちゃん” はちゃんと入るよな!」

妙「あらあら、かばんちゃんじゃなくてかばんさんねえ〜」

神楽「う、うっほほい!! か、かかかかばんが出て来て……ど、どどどドキドキ展開ネエエエエ!!」

*第6話視聴中

銀時「っちゃん” って言ってねエエエエ!! どうなってるんだこれどうなってるんだこれ!? なにがあつた!? っていうかこれ何年経ってるんだ!? 1期から2期に期待した話の続きが全部吹き飛んだぞ!!」

神楽「うぎやああああああああ!! かばんちゃん返せエエエエエ!!」

妙「あらあら〜。かばんさんすっかり偉くなっちゃってま〜」

*第6話視聴終了

銀時「うっそだろおいッ!! このままお別れすんのッ!? 謎は!? 謎はなにか解き明かしてくんねエの!! そしてなんだボスのあの扱い!! 1期で生まれた絆はどこいったんだよ!! かばんさんは本当にかばんちゃんなのかよ!? なんの謎も明らかに成ってねえぞ!! 思わせぶりなセリフ聞かされただけでお別れしちゃってんじゃねエか!!」

近藤「海の謎のセルリアンには触れんのか?」

銀時「知るかッ!! あんな唐突謎ドリームなんざッ!!」

近藤「面白さは?」

銀時「わっかんねエよ!! これ面白い面白くない以前の問題なんじゃねエの!？」

神楽「……………」

妙「あらあら。これで新しい旅のお供できたわね」

*第7話視聴中

銀時「まあ……………いいんじゃないね。もう謎が解き明かされるのは最終話付近まで待つわ」

神楽「……………」

妙「あらあら。ゴマすりちゃんは今中々愛嬌があるじゃない」

*第7話視聴終了

銀時「いやそこはゴマすり鳥も入れろやアツ!! のけもの作ってんじゃないやねエよツ!!
確かにフレンズっぽくない鳥かもしれないけど、そこは入れるだろ普通ウ!! 優しい
世界はどこだよ!? これ本当にけものフレンズなの!? のけものフレンズじゃねエの
!？」

近藤「面白さはどうだった？」

銀時「面白くねエぞツ!! どうなってんだ!! もう7話だぞ!! 7話も俺はずっとこ
んな無味無臭を味合わせられてんのか!？」

妙「あらあら」

神楽「……………」

*第8話

銀時「誰か教えてくれッ!! 俺は一体なに見させられてんだ!? なんて優しい世界でギスギス空間見せられなきゃならねえんだよ!! フレンズがフレンズに暴力振るってんぞ!! ファン自称してんなら暴力振るうんじゃねえよ!! 新八見習えコノヤローッ!! なんでこんな整合性も何も取れない物語が出来上がってんだ!? これプロが作ってんだよ!? プロが作ってるんだよな!」

妙「ライブのシーンは良くできてるわね〜」

神楽「うっぷ……」

*第9話ED開始

ズガアンッ!! と銀時はテレビのリモコンを画面に叩きつけ、テレビの画面は粉々に碎ける。

神楽「オボロロロロロロロロロロ!!」

神楽はあまりのストレスに嘔吐をする。

*

兎にも角にも終盤は阿鼻叫喚の嵐ではあったもののけものフレンズ2を9話まで見終わった銀時たちは、

「……………」

ぐったりしていた。

それはもう歴戦の戦士が闘い疲れ切ったかのようなぐったり具合である。

やがてそんな銀時はグツタリとしながらも立ち上がり、幽鬼のようにふらりとしながらも言葉を絞り出す。

「胸糞悪イイイイイイイイイイイイイイイイ!!」

天に向かつて銀時の口から吐き出されたのはまさに実直な感想であった。そしてそのやり場のない感情はダムのようにとめどなく噴き出す。

「チクシヨーチクシヨーチクシヨーチクシヨーチクシヨーチクシヨオオオオオオオオオオオオオ!! なんて優しさとか友達で構成された世界でこんな胸糞わツツツツるいもん見せられなきゃならねェんだよ!! なんだこれなんだこれなんだこれなんだこれなんだこれ!!」

一方の神楽は、

「うぎやああああああああああああああああ!! 私の心にどす黒いなにかがアアアアアアアアアアア!! コレ取ってエエエエエエエエエエエエエ!! この黒い感情取ってエエエエエエエエエエエエエエエエ!!」

苦しみのあまり転げまわる。

後ついでに、

「うオオオオオオオオオオオ!! イエイヌチャアアアアアアアアアアア!!
なんでこんな結末にイイイイイイイイイイ!! 虚しいとかそんなレ
ベルじゃねえんよコレ!!」

近藤も涙を流して感情を吐き出す。

そんな阿鼻叫喚の惨状を見て新八は光のない眼差しのまま告げる。

「僕の気持ち……分かりましたか？」

「分かりましたか? じゃねえよ!! てつめよくもこんな精神汚染物質見せてくれたな
!! こんなもん可視化された邪悪そのものじゃねえか!!」

「いや、それは言い過ぎでしょ。ただ単にそれは感性の違いですって。それにそもそも
こんな風に不遇な扱われ方をする創作のキャラなんてたくさんいるでしょ。だからイ
エイヌちゃんがこういう風に扱われたって文句言うことはないんですよ」

「ああ、そうだな!! まどマギとかリリカルとか銀魂とか不遇で悲惨な境遇な奴はいっ
ぱいいるよな!! でもな!! それはそう言う常識がまったく違う世界観だって前提が
あるとか、不遇な扱われ方したらおかしいって普通の感性持った主人公とか周りのキャ
ラとかいるし、ギャグならギャグでツツコミ入れるキャラがいねえと成り立たない設定
なんだよ!! だけど誰もツツコミ入れねえんだよ!! なんてサーバルもカラカルも
誰も何も言わないねえんだよ!! ツツコミが放置されてただただ狂ってんだよコレは

!! 警察が公に犯罪推奨しているってレベルで俺たちとの常識が合わねえんだよ!!」

新八の考えを怒声を浴びせながら真っ向から否定する銀時。

一方の神楽は、

「お茶がアアアアア!! 飲まれないお茶アアアア!! 笑顔でうちにお帰りイイイイイ!!」

半狂乱になって転げまわっていた。

銀時の意見を聞いて新八は少し視線を逸らしてから真顔で告げる。

「ならイエイヌちゃんの自業自得ってことじゃないでしょうか? ほら、イエイヌちゃんはキュルルを拉致した挙句、勝手に守って勝手に傷ついただけでしょ?」

「ああそうだな!! 確かに人を護る使命だもん!! 傷つくのも優しくされないのも自業自得——ってなるワケねえだろ!! キュルル拉致したの暴力のフレンジ共じゃねえか!! そしてイエイヌにそれを指示したような様子一切見られなかったぞ!! つうかただの依頼人でアルマジロコンピの独断って考える方が自然だわ!!」

「でもキュルルにはイエイヌちゃんは拉致の首謀者に見えるはずですよ。そんな人に優しくできるはずありません」

「確かに首謀者のイエイヌをキュルルが警戒するのは無理ねえよ!! じゃあなんでキュルルはイエイヌと笑顔で遊んでるんだよ!! イエイヌの事情もとつくに聞かされ

フレンズだぞ!! 飯の確保もうんこ処理も全部自分でできんだよ!! むしろ世話されてたのはキュルルの方じゃねエか!! 業を表現してエならイエイヌもサーバルもカールも使い古しのボロ雑巾の如く酷使して使い潰すくれエの業を見せろや!! いや見たかねエけど!!」

「じゃあ銀さんは何が良いと思うんですか?」

「ねエよそんなもん!! 強いてあげればイエイヌが健気で気遣いができてキャラに一貫性があるってとこかな!! でもそのせいで余計にラストが腹立たしいんだよこれ!!」

「なんで命がけで守ってもらってんのお礼も労いの言葉も治療も何もしねエんだよ主人公様は!! そんなでサーバルを褒めまくってんだぞ!! 人の心がねエのかあいつは!!」

「そしてなにより『おうちにおかえり』からやれやれ感だぞ!! イエイヌのことなんてマジでどうでもいいんじゃないやねエか!! 主人公組に心がねエのにもほどがあんぞ!! つうかキュルルは人なのか?! あいつがけもフレ2期の人代表って嘘だろおい!!」

「つまりこれは人間の悪い部分を表現して——」

「だからそこおかしいんだって言ってんだろうがアアアアアアアア!!」

「なぜだか分からないがさつきからしつこく妙な理論を提唱してくる新八に対して銀時は張り裂けんばかりに怒声を浴びせる。

「つまり人間のお子様——引いては人間はみんなこんなんですって制作側が伝えてるっ

てことなんぞコレ!!」

「いやそれは曲解過ぎでしょ! これは悪い人間を表現して——!」

「そのキュルルにまつたく『悪』がねエのが問題なんだろうがアツ!!」

「……………」

銀時の怒声に押し黙る新八。

銀時は自身の意見を捲し立てる。

「今までにキュルルに外道要素だつたり悪党要素が一つでもあつたか!? サーバルやカラカルや他のフレレンズがそんな要素に気付いたり指摘したりするシーンが今まで一つでもあつたか!? ねえよな!? 生意気要素はあつてもクソガキ要素は見受けられなかったぞ!! そんでこいつは今まで人間様の叡智でフレレンズ助ける善意のヒトつてことになってんだぞ!! それがどうしてああなんだ!?!」

「僕にも分かりません」

「つまり製作はこう伝えたいんだな!! 人間様の善意はイエイヌを助けられない不道德の塊だつてことだなチクシヨオオオオオオ!! じゃあ悪意つてなんだコノヤロオオオオオオ!!」

もう自分でも何言つてんだか分かんないくらい頭を沸騰させる銀時に握り拳を作りながら天井に猛る思いぶつけ、ピシッと新八へと指を突き付ける。

「新八イイイ!! 俺たちはいったい今まで何を見てたんだ!? 何を見させられてんだッ!?」

「けものフレンズ2です!! 間違いありません!!」

「新八イイイイイ!! これは自主製作の二次創作アニメだったか!?」

「違います!! たくさんの人が関わった公式アニメです!!」

「まじかよチクシヨオオオオ!!」

と新八はビシツとした返答を聞いて同時に銀時は頭を抱える。

「間違いであつて欲しかった!! けものフレンズつて優しい世界じゃなかったのかよ!! ケモノたちと友達になつていく物語じゃなかったのかよ!! 1期抜きにするにしても酷過ぎんだろ!! タイトル詐欺じゃねエか!! 9話で誰とお友達になつたんだよ!! それとも製作は友達^{ダチ}は都合の良い奴隷か盾か消耗品とでも伝えたかったのか!? 2はまるでテーマが違うなあおい!! 1期が好きになつた俺にはこんなモン思いつかねエよ!! 肯定もできねエよ!!」

「きつと脚本はそこまで考えてません。製作の過酷な環境が原因でコレが出来上がってしまったんでしょう」

「言っちゃったよ!! 今まで触れようとしなかった部分に!!」

ついに擁護理論すら止めてしまう新八に対して銀時はもうそれが尤もであろうとは

どこか思っていた。

「ああ、そうだよ!! ドラゴンボールの原作にないくれエの引き延ばしを考えれば、制作の環境や都合でアニメの作りが雑になるなんて事や良くある話だ!!」

銀時にとつてはそこだけは結構同意できる部分ではあるのだが。

「でもな!! これは作画云々の問題じゃなくてストーリーが問題なんだぞ!! 動きがない! 絵が雑な〃だけ〃なら俺も全然気にしないんだよ!! でも表現が足りないどころかセリフも動きも足りないんだぞ!! それでああなったんだぞ!! これはしようがないで済むレベルの話なのか!? そもそもなんで何十人関わってる作品で素人でも分かる悪いところくらい修正できなかったんだよ!! おかしいだろ!!」

「それくらいアニメ製作現場が過酷なんてよくある話です!!」

「現場が過酷で作画じゃなくて話が酷くなるなんて事あったんだな!! 勉強になったわ!!」

「じゃあせめて!」

と新八はなおも食い下がる。

「せめてイエイヌちゃんの気持ちだけでも汲んであげましょう!! イエイヌちゃんがキュルルを思う気持ちを!!」

「それとキュルルのあの塩対応をまったく責めないのは別問題だろうが!! 論点ズラ

してんじゃねエよ!!」

ついには新八は完全に押し黙ってしまふ。

銀時はグイツと体を振り向かせ、

「おいお妙!! お前はどんなんだ!?! いくら腹黒のおめエでも言いたい事の二つや二つあんだろ!!」

下座で正座しているはずであろう妙へと声を張り上げる。

「……………」

そもそも今まで静観していたのが不思議なくらいだったが、

「お…………お妙…………」

ようやく理由が分かった。

妙は正座したまま微動だにしていなない。安らかな笑顔で口から血の一滴を滴らせながら真っ白に燃え尽きている。

「あッ…………姉上エエエエエエエエエエエエ!!」

まさかの姿に新八が慌ててお妙を介抱しに駆け出す。

するとポンと銀時の肩に手が置かれる。

銀時が振り向いて手を置いた主の顔を見れば、涙を流す近藤の姿が。

「お妙さんは…………その広い心でなんとかけもフレ2を受け入れようとしたが…………9話で

力尽きてしまったようだ……。1期を視聴済みなせいで……。そのダメージは計り知れなかったことだろう……」

「……………」

銀時は顔をゆつくり戻し、

「姉上エエエエエエ!! しつかりしてください姉上エエエエエエエエ!! フィクシヨン!! これフィクシヨンですから!! 実在の人物がこれ作ったのはホラーですけど、これフィクシヨンですからアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

妙を仰向けにして横たわらせてなんとか意識を戻そうとフォローする新八と、

「ぬオオオオオオオオオオ!! 消えろけもフレ2ウウウウウウウウウウ!! 私
の心から消えろオオオオオオオオオオ!!」

ガンガンガンガン!! とDVDデッキに頭を打ち付ける神楽の姿が銀時の身に映り込む。

その惨状を見て頭が少し冷えてきた銀時は大きくため息を吐き、妙を介抱する新八へと顔を向ける。

「新八……お前よ。なんでさつきからけもフレ2つて言うか、9話のフォローしてたんだ?」

ピクリと新八の動きが止まり、首を振り向いて銀時へと顔を向ける。

「そ、それは……」

言いよどむ新八に銀時は机へと腰を下ろしながら落ち着いた声で告げる。

「万事屋でも一番の常識人枠であるテメエが一番9話を認められねエはずだ。そもそも、けものフレンズって題名の作品でアレをやるのはまじでNGだ。それくらいおめエだつてとつくに分かつてんだろ？」

新八はゆつくりと立ち上がり、俯きながら暗い声で告げる。

「銀さん……本当に批判する時は否定だけじゃない。肯定もしなきゃいけないと僕は思うんです……」

「……………」

新八の言葉を聞いて口を閉ざし、ただじつと顔を見つめ話を聞き続ける。

「僕は思うんですよ。ファンだからって批判するにしてもちゃんとそのシーンを精査して納得いくかいかないか吟味し、その上で感想を言おうって。いくらつまらなかりと整合性なかりと矛盾だらけだろうキャラに一貫性がなかりと安易に否定しないって。そこはおかしいけど好意的に肯定している人もいるんだから、よほどの事がない限りおかしいと思うだけにして心の中にしまい込もうって」

「でもッ!!」と新八は語気を強めて声を張り上げ、

「けもフレ2の9話はダメだったッ!! 8話で原子崩壊したものが9話でビックバン起

こして画面外の僕に飛び火したんですよ!! つまらないだけとか1期ファンを煽って逆撫するだけの内容だったなら僕だってまだ許せた!! ガツカリするだけで済んだ!! でも9話のラストは許せなかった!! マジで怒りと共に心を抉られるような感覚を覚えますよあんなの!! 現実には当てはめたくねエよあんな恩知らず!! むしろいたらマジでむかつ腹立ちますよ!! 僕の知ってる良識と常識があそこにだけはどこにもないんですよ!!」

捲し立て、膝から崩れ落ちる。やがて頭を抱え込み。

「悩んで悩んで悩んだ末にフォローする理由も探してみたんですけど……そもそも無理イイ!! あんなのフォローできるワケない!! 逆転裁判だって逆転できないくらい詰んでるんですよアレ!!」

新八はガバつと顔を上げて思いのたけをぶつける。

「けものフレンズって言う前提がある時点で9話のラストは擁護不可能な領域なんですよもう!! なんてだけでもフレって作品を作ってる前提でアレが生まれたのか僕には皆目理解できません!!」

吐き出し終わったのか肩で息をする新八はゆっくりと立ち上がる。彼の心に溜まった鬱憤を聞いて銀時は「なるほどな」と言い、夕方となった外の景色を眺める。

「そもそもの話だが、アニメどころか創作全般に言える事かもしれないねエけどよ……創作

の世界は基本ありえない世界だ。だから、そんなありえない世界にどうこう言う方が間違ってるのかもしれないねえな。キュルルの言動がありえないってのもそのうちの一つだ。そして俺にしろお前にしろ、そんなありえない世界にマジにブチ切れた一人だ。だが、結局それはありえないものに何ムキになってんの？って話にもなる。そしてそんな俺たちはありえないものに踊らされたただの道化ってことだ」

「……………はい。……………そうです……………ね……………」

気のない返事ではあるもの、銀時の言いたい事を理解しているのか新八は顔を俯かせながらも反応を示している。

銀時は遠くを見つめながら言葉が続ける。

「でもよ……………それでもよ……………人間つう生き物は普通に見聞きしたもんに心は動かされるし、考えさせられだつてする。例え、頭カラツポにして考察せずにアニメやジャンプ見てたつて何かしら感じるんだよ。考えるんだよ。それはクソつまんねえ校長の長話だつてそうだ」

「……………はい。僕だつて、それはわかります」

「つまんねえだけなら、居眠りなり欠伸なりして終わりだ。でもな！あの『ワケわかんねえモノ』に俺は怒りを覚えちまった！気付いちまったんだよおかしなところ！理解できねえとかつまんねえだけだつたらどれだけ良かったことか！」

思い出してきてまた我慢できなくなった銀時はすぐに声を荒げるが、すぐに声音が冷静な物へと変わる。

「ありえないもんにもありえないもんなりのルールつつうのがある。世界観がある。お前や神楽だつて、俺がクズ行為したら怒ってくれたよな？」

「はい。もちろん」

「国民的ガキ向けアニメの奴らにしたつてそうだ。ジャイアンは人から物奪う皆の嫌われ者のガキ大将だ。スネ夫だつて自慢話したら周りの奴らが不快感を覚える。いじめられっ子の主人公のび太だつて秘密道具を使って調子に乗り出したらドラえもんが怒りだす。しんのすけだつてクソガキ行為したら親に叱られるんだ」

「ええ。むしろ子供向けアニメでジャイアンが人の物奪つて賞賛されたりしたらそれもう恐怖ですよな」

「でもな、そんなクソガキ連中だつてアニメ本編でも映画でも誰かを助けたりしたら褒められたりお礼を振舞われたりしてんだよ。そしてそんなクソガキ共も良い事をされたお礼を言うんだよ。あのしんのすけですらだぞ？ でもキュルルはそれが出来てねえんだぞ？ 別にクソガキですらねえのに。そんなもん見せられたら虚無じゃなくて不快感と同時に怒りしか湧かねえんだよこっちは。もう文句を持つつてレベルがファン以前の問題なんだよ、アレは」

「……………」

新八はもう何も言えなかった。銀時は更に言葉を続ける。

「特にコレは今まで触れなかったが……イエイヌが犬だと仮定した話でもコレはひでえんだよ。——つまりは犬つつう動物が命を懸けた誠意にあいつはまったく応えなかったんだぞ？ 人の代表たるあいつが。俺たち人間てそんなに人でなしばつかったのか？」

「キュルルはセルリアンなんじゃないですか？」

「じゃあ、あいつがセルリアンだって想像できるだけの伏線張れって言いたいが……もう何も言えん。期待するだけ損だ」

「そう……ですね……」

銀時は大きなため息を吐いた後、腰を上げる。

「あーだこーだ色々言ったが、もう後の祭りだ。9話が放映されちまった以上、お蔵入りでもしねエ限りは取り消しなんてできねエだろ。それにこんな内容だ。ネットでも大炎上なんだろう？」

「はい……まあ……」

と新八は気のない返事をする。

銀時は腕を組んで告げる。

「なら、大半の奴がおかしいって感じてるって事で納得する他ねエだろ。それ以上、俺たちができることなんざねエしな」

「そ、そうですね……」

「1期は間違いなく面白かったし、それでいい。けもフレつつうコンテンツは死ぬかもしれないねエが、良かったと思った作品はちゃんと記憶にあるんだしよ」

「はい。もう1期と2期は別物くらいの感覚で見た方がいいですね。まあ、そう考えても9話だけは許せませんけど」

「まあ、アレはマジで人間の価値観が変わらねエ限りは許されないだろうしな。とは言え、言いたい事言い尽くしちまったし、これ以上あーだこーだ言っても時間を消費していただくだけだしな」

「ですね」

新八は身近な誰かに言いたい事を言うだけ言って途切れたのか、スッキリした表情が見受けられる。

これからもちよくちよくネットだけでもフレ2の情報を手に入れるだろうが、愚痴を零せる相手が身近にいるのだ。あそこまで負の感情をため込む事も早々はないだろう。

そろそろキリもよさそうなので、銀時は一つの言葉を新八に贈る事にする。

「でだ。最後に俺から言いたい事が一つだけあるんだが、言わせてもらっていいか？」

「ええ。どうぞ」

銀時は息を吐き出し、真面目な顔で。

「けものフレンズ2ってき——」

「はい」

「——けものフレンズじゃないよね？」

新八はただ、無言で頷く他なかった。

第3話：10話 一回凄い怒ると急に冷静になる

万事屋+αがけもフレ2の9話ショックにより精神的大ダメージを受けてから早二週間近くが経過した。

その間、イエイヌショックのダメージから回復し普段通りの生活に戻った銀時は現在……。

『狩りごっこだね！ 負けないんだから！』

テレビの前でけものフレンズ（1期）の1話の冒頭をその色のない眼差しで眺めていた。

銀時のその死んだ魚のような瞳はガツツリと画面に釘付けである。

そうやって銀時が録画されたアニメを見ていると、

「あんた人の家で何してんですか」

後ろから新八の呆れた声が。

振り返れば呆れた視線を向ける新八の姿があり、銀時はアンニユイな眼差しを向けながら口を開く。

「けものフレンズ見てんだよ」

「いやなんで人のうちのテレビ使って見てんですか。録画がなくても自分家のパソコンとか使って下さいよ」

「お前、万事屋にんな文明の利器が存在すると思ってるの？」

「なに偉そうに貧乏宣言してんですか。このIT時代にパソコン一つないところで働いてる僕は聞いてて悲しくなりますよ」

新八は「そもそも」と言って言葉を続ける。

「なんででもフレの1話見てんですか？ しかもあんた最初見た時、1話が苦痛だとかつままないだとかのたまわってませんでした？」

「いやな……」と言って銀時は視線を逸らしながら。「もしかしたら2期が来るかもしれないからおさらいしとこうと思ってる……」

「銀さん……」

と新八は悟ったような顔で。

「否定したって2期はもう放映されていますよ？」

「チクシヨオオオオオ!!」　なんでアレが2期なんだアアアアア!!」

銀時は張り裂けんばかりに声を荒げながらドン!! と両の拳で畳を叩く。

嘆く銀時を悲しさと優しさが混ざったような表情で新八が語り掛ける。

「現実を受け入れましょう」

「受け入れたくねエよ!! 俺のみたアレが続編だつて!! 優しいと思ったり癒されたりして何か言葉では説明できない何かを受け取った作品の続きがあんなワケわかんねエモンだったなんて!! 実はただ名前が少し似ているだけの別物だつて思いたくなくなつてくんだよ!!」

「つうかあんた冒頭の地の文で『普通の生活に戻つた』つて説明されてんのに思いつきり2の事引きずつてんじゃないですか。けもフレに未練たらたらじゃないですか」

「俺もな、さすがに数日経てばイエイヌの件は許しはしなくても……まあ、仕方ないで済まそうとしてたんだぜ? 忘れようと思つたんだぜ? だけどよ、あのげてものブレンドつてそろそろ最終回間近つて事を最近ふと思ひ出してな」

「ええ、まあ……」

新八が首を縦に振りながら返事をする。銀時はゆっくりと立ち上がる。

「そこでつい思つたんだよ。『あれ? けもフレを面白いと思つたのは俺の勘違いで、実はけもフレもそんな面白くなってあのゲテモノと同じくらい虚無な作品じゃねえのか?』つてな」

「それで検証する為にわざわざわざわざうちでけもフレを見返してみた?」

「ああ。それで最初から数話を見て思つたんだが……」

そこまで言つてから銀時はテレビの画面に流れるけものフレンズ1期の1話をビ

シツと指さす。

「普通に面白いじゃねエか!! 癒されるじゃねエか!! 優しいじゃねエか!! 挙句の果てにはあの物足りねえと思った1話ですら完成度が高いって認識になっちまったぞ俺!!」

銀時は天パの髪をわしゃわしゃとこねくり回しながら天に向かって叫び声を上げる。

「苦痛だと思つてた1話冒頭のあの『狩りごっこ』すらもう癒しなんだよ!! 1期の最終回迎えても尚、あそこは普通にけもフレ屈指の退屈ポイントだと思つてたのによ!!」

「そりゃ、1と2であそこまで雲泥の差が出たらそうなりますよ。銀さんの感覚が色々麻痺しちやつたんだと思います」

「ホントなんなんだよあの激物(けもフレ2)は!! 表面から芯まで毒性が高いせいで変な耐性付いちまったじゃねエか!! アレ見ちまったら大抵の作品の不出来許せちまうわ俺!! もっと辛口評論家とだと自負してたのによ!!」

新八はもう特に言う事がないのかそれとも何も言う気すら起きないのか、銀時の悲痛な言葉をただ黙って聞いている。

あらかた吐き出した銀時は落ち着きを取り戻し、腕をぶらりと垂らしながら疲れたよくな視線を新八へと向ける。

「そんでお前は意外と大丈夫そうだけどよ、もうあののけもの見るの止めたのか? そ

れともまだ見続けてんのか？」

「まあ、一応は視聴継続してます……。銀さんがさっき言った通り最終回間近ですし、ちやんと行く末を見守ろうと思つて。あと、悪い意味でどれくらい全体がひつどい出来になるのか気になるって気持ちありますし」

「俺はさすがに9話でもう嫌になつたから先の話は見てねエけどよ、一応どうなつたか聞いてもいいか？」

「11話まで放映されてますけど、僕は心が落ち着いてから10話を見ましたよ。さすがに連続してダメージ喰らうはキツイので。ちなみに今までに比べたらマシなデキでした」

「マジで？　今まで1話から9話まで斜め下を突つ切つてたのに10話でマシになつたのか？　それはちよつと予想外だな……」

「まあ、けもフレ2の中で相対的に見たらですけど」

新八の言葉を聞いて銀時は顎に指を当てて思索する。

——もしかしたら……。

『最終話は辺りはマシなデキになつているんじゃないか？』と思つてるのではないか、万事屋」

自分の気持ち代弁する言葉が後ろから聞こえて来たので銀時が振り返れば、ゴリラ顔

の偉丈夫が腕を組んで立っていた。

「……………」

いきなり現れたゴリラ顔の男——近藤勲を見た銀時は数瞬思考を停止してから、

「……………なんでいんの？ ……お前」

ジト目を向けてとりあえず質問する。なんかよく見たら顔がアザだらけなのが気になるが、どうせお妙にボコボコにされたのだろうと簡単に予想できるので敢えて聞かない。

新八も続くようにジト目を向けながら近藤に問いかける。

「つうか近藤さんここに家に入り浸り過ぎじゃありません？ 普段の倍くらいの頻

度で家に侵入してますよ」

「フツ……………けもフレ2で荒らんだ俺の心をお妙さんに癒させて貰いにきたのさ」

近藤は腕を組み、したり顔で答える。

銀時は呆れた表情で。

「いや、お前癒されるどころかド突かれてボコボコじゃねエか。心も体も瀕死のレッド

ゾーンだろ」

「フツ……………けもフレ2に比べたらお妙さんの拳など屁の河童よ」

などと余裕の表情で告げる近藤に新八は呆れ声で。

「いやそれなんの強がりなんですか？ 癒し求めに来た人がなんで耐久自慢し始めてんですか？ あんたホントに癒し求めに姉上に会いに来たの？」

二人のツツコミを華麗にスルーして近藤は銀時へと話しかけてくる。

「ところで万事屋よ。お前もやはりけもフレ2を最後まで見るのか？」

「アレをけもフレ呼ばわりしたくねエけどよ、まあ9話以下のクソが連発されず少しは向上してんなら3話くらいは耐えられるかもな」

「俺も迷っている口ではあるが、お妙さんに癒しをもらった以上、最後まで見ようと思っている。例え、9話以降が斜め下だったとしてもな」

「あんたが姉上にもらったのは癒しじゃなくて拳でしょ？」

と新八がサラッとツツコミ入れた後、銀時はため息を吐き、呟きながら話し出す。

「まあ……確かに後3話だしな……。後、3話なんだよな……。120話とかだったら絶対切ってただろうが、まあ3話なら行く末を見守って完走するくらいの気力はあるな。つうかあそこで切るのもなんだしな」

「僕もそんな感じですよ」と新八は頷く。「1年2年と続く長期アニメじゃないだけ、最後まで見ようって気力はあるんですよ。最後が近いからどうなるか確かめたいって思いますし」

「そんじゃま、最後まで見るか。とりあえず」

銀時の言葉を受け、新八と近藤は頷くのだった。

つと言う事で三人はけものフレンズ2を最後まで見ると心に決めるのだった。

「ところで新八。神楽は？」と銀時。

「実は前に神楽ちゃんに、『最終回まで見続ける？』って前に聞いたら、『けものフレンズ2って？ なにそれ？ おいしいの？』って返事が返ってきました……」

「そうか……あいつはダメだったか……」

*

そんなこんなで録画したけものフレンズ2の10話と11話の視聴を始める銀時、新八、近藤。

「なあ、新八」

と銀時は10話が始まる前に新八に問いかける。

「お前はとつくに視聴済みだから聞くけどよ、10話はさすがに9話みたいに天然で出た胸糞じゃないよな？」

「まあ……はい。個人の感じ方はあるかもしれませんが……胸糞は……ないんじゃないかな……？」

「もうすつげー不安なんだけど……。まあいいや……。もう見ると決めた以上俺は突き進むぞぞ」

*今回は2話同様に台本形式を使いますが、一部分となります。

*10話視聴中

銀時「いやもろ胸糞要素入ってんじやねエかアア!! キュルルは冒頭から単独行動してイエイヌの献身に死体蹴りするしよオオ!! しかも狙い撃つかの如くおうちで一人ぼつちのイエイヌまで見せやがってエエ!! 相も変わらずじやねエか!! 視聴者の心をどこまで逆撫ですれば気が済むんだこのアニメはアア!!」

近藤「くツ!! IQが上下するサーバルに開幕ギスギスでどんどんこのアニメに対する期待値が減少していくツ!!」

銀時「おい新八イイ!! これのどこが胸糞ないだ!! 嘘こきやがって!!」

新八「すみません!! イエイヌちゃんのシーンは人それぞれだと思っただと申さずして!! 僕だってもうどこが胸糞でどこが胸糞じやないんだか判断できないんですもん!!」

銀時「そうだったのか!! ごめんね!! お前も頑張っただと申さずして!! 俺もどこが良いのか悪いのか分かんなくなってきたけど頑張るわ!!」

*10話視聴終了

10話を見終わり、銀時と新八と近藤は顔を見合わせる。

「……なあ、どう思う?」

と聞く銀時の言葉に近藤は腕を組みながら答える。

「二応話が進んだ感じがして、相対的には良くなったように見えるな。新型セルリアン登場でフレンズたちとの全面対決フラグ、キュルルちゃんのおうちに対する考えの變化。そして最後の海への落下。中々に展開が進んできたと言えるんじゃない……か?」

「正直、もう悪い意味でツツコミどころ満載ですけど僕もそんな感じですよ」と新八は頷く。「ただ二度目だと最初見た時より粗が大分目に付き始めて正視するのも辛かったですけれど……」

二人の感想を聞いて銀時は腕を組みながら眉間に皺を寄せる。

「お前から9話までの話を観たせいで感覚が麻痺してるだけじゃね? これ話が進んで良くなったって言うけど、0が1になっただけだぞ? だって考えてみる。今まで家見つけると言っという『絵の場所が見つかったけどおうちじゃない。はい次』を繰り返してきただけだぞ? 折角出てきたカバンの話だつて新設定が出てきてまったくなにも解き明かされないままだったんだぞ。あれだけ色々やってスタートラインから一步も動いてねえんだぞ、このアニメ。変化しているように変化がまったくねえんだよ」

銀時の言葉を聞いて近藤も腕を組みながら顎に指を当てる。

「よくよく考えたら、キュルルちゃんのおうちに対する問答も本筋には関係しているが

今更感があるな。前からやっても問題ない気がするのだが……」

近藤に続くように新八も語りだす。

「その上、あるようなないような伏線張つといてフレンズ型セルリアンという新設定を唐突に出す割には物語で示された謎は一切解明されてないですよ。もう……」10話”なのに。これ、ホントに12話構成ですか？」

銀時は頬杖を付きながらダルそうに語りだす。

「そしてちよつとどころかかなり酷いシーンも満載なんだよな……。キュルルの単独行動しかりイエイヌのシーンしかり。更には『いつの間にか』好意で貰ったであろうキュルルの絵を平然と切り裂いて実験材料にした挙句に無能をさらけ出すワカメ……。ホントに1期をバカにしてるとしか思えねえんだけど……」

「まあ、実験シーンは理由があるんで分からなくはないんですけど……うくん……あのうっかりシーンはなんとも……」

新八は腕を組んでもややもやを感じながらもなんとか折り合いを付けようと頑張っているようだ。

苦心する新八の様子を眺めながら銀時は言葉を続ける。

「そんで一番ひでエのが励まそうとするサーバルにヒステリー起こす主人公様だぜ？海に落ちてでもまったくなんの感情も湧かなかったんだけど……」

すると近藤は少し暗い表情で。

「俺としては9話があったから10話の最後もなんかもう予定調和感があって、特に酷いとかそんな感情は湧かなかったな……」

「1期の最終話辺りでカバンがピンチになった時はすんげー感情移入できたのにな……」
「それはそれとして、俺が気になったのはアライさんだ」

近藤は不可解と言わんばかりに肩眉を吊り上げる。

「アライさん声が変わるのはまあ、色んな事情があるから仕方ないと割り切れるが……なんかセリフ回しに違和感を感じるのは気のせいかな？」

「そうそれ！　そこ俺も気になった！」

とここぞとばかりに銀時は顔を上げて指を指す。

「アライさんの声がなんか変だし、喋り方も違和感あるしで、とにかくアライさんが変過ぎてビックリしたんだよ俺！　結構好きなキャラだっただけに気になった！　えッ？

中の人変わった？　って思った！」

「酷いとかの前になんか変でしたよね、アライさん」

と新八は指を顎に当てながら思案顔になる。

近藤は顎髭を指で撫でながら語る。

「俺はアライさんの中の人が花粉症、もしくは喉の風邪を引いていると思ったな」

「アレなんだったんでしょね？」と新八。

「兎にも角にも結局良くなつたつて言つても0点が赤点になつただけだったな」と銀時は言う。「まあ、相対的に見たら確かにそこそこ良いのかもしれないエが」

「まあとにかく、結局感想は出尽くしましたし、11話に移りますか？」

新八の提案を聞いて銀時と近藤は軽く返事をして頷く。

そんなこんなで、さほどのダメージはなく三人はけものフレンズ2の11話を見始めるのだった。

第4話：11話 世の中には理解できないモノがたくさんある

「なんやかんや10話はさほど荒れる事無く視聴を終了させた三人。つと言う事で11話の視聴に移るのだった。

*11話視聴終了

「なるほど……つまりこの作品はちゃんと人間の業を表現していたんだな。意外としっかりしたテーマを持つてるじゃねえか」

と銀時は笑顔で語り、次いで新八や近藤も笑顔で。

「はい。それに……フレンズたちが集まってニセフレンズを倒すのも良かったですね」

「まったくだなく。いやセルリアンを見事撃退したがまだまだ危機は去ってないから次回が楽しみでしょうがないな」

三者三様に笑顔で感想を語り合い、

「いや〜次回が楽しみだな〜!! アハハハハハハハハ!!」

そして高らかに笑い合い、机に脚を乗せて、

「「じゃねエだろオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」」

怒りを爆発させる。

「ぬオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

銀時は感情に任せてテレビに抱き着きそのままバックドロップをお見舞いする。

ドガシャン!! と畳に叩きつけられ上下反対になり画面にヒビが入ったテレビを肩

で息をしながら見下げる。

しばしの沈黙の後、

「胸糞じゃねエけどなんだこりやアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

銀時は天井に向かってありったけに叫び、とにかく思った事をぶちまけ始める。

「俺は一体何を見せられたんだおいッ!! 全員集合は様式美的なモンだからいいけど、

それに至る過程が酷過ぎんだろ!! 虚無過ぎて逆に怒りと言うか何かが湧いた!! マ

ジでよくわからん感情が爆発した!!」

「もうなんなのあのドナドナシーン!!」と言って新八は頭抱える。「ワクワクできねエよ

あんなもん見せられたら!! しかも無駄なシーンのおまけつきだし!!」

「ぬおおおおおお!!」

と近藤は混乱したように新八同様に頭を抱えている。

「なんで1期と同じワクワク展開なのにこんな虚無感に襲われなきゃいけないのオ!?

少し期待してたのにッ!! フレンズ対ニセフレンズたちの合戦をちよつと期待してたのにイツ!!」

「そして相も変わらず整合性取れてねェんだよなこのアニメェ!!」と銀時は両の拳を握りしめながら天を仰ぐ。「ニセフレンズ倒すのには同等の力が必要とかなんとか言っていて結局ワンパンなんだぞ!! アレのどこが強敵なんだよ!? 棒立ち囲いするだけじゃねエか!! ショッカーの戦闘員もうちよつと仕事するぞ!!」

怒る銀時の語りを聞いて新八も「そうですね!!」と同意しながら納得できないと言わんばかりに語る。

「1期すら無視するとかそんなレベルの酷さじゃ断じてありませんよコレ!! 1話内ですら整合性も取れないんですよ!! なんで浸水してるのにキュルルの走ってる場所に水がないのとか! BGMもSEも変じゃね!? みたいな描写と演出が雑なことは許すとしても、せめて1話内くらい整合性を守って欲しかった!! だって博士たちやイルカちゃんに手強いつてはつきり明言させといてワンパンで倒すってどういうことなの!? 強敵感まるでないし!! これなら強いフレンズだけでいいのに戦いが不得意なフレンズを連れていく意味がまったくない!! いやけものフレンズでそれどうなのって話ですけど!! コレホントにプロが作った話ですか!?!」

近藤は「くッ!!」と苦しそうな声を漏らし、右手で頭を抱える。

「バカな俺ですらこのアニメを頭カラッポにしてみる事ができない!! かと云って俺たち視聴者が考えて理解を示そうとする度にことごとく足蹴にされてしまう!!」

「そうだな!! ある意味このアニメは頭カラッポにして笑えるよな!!」

と銀時は怒鳴りながら豪語する。

「ドナドナのシーンと意味深フレンズ共のシーンは笑えたよな!! 強引に脳が思考停止させられたせいだ!!」

9話同様に阿鼻叫喚の感想の嵐の中、吐き出すだけ吐き出して若干冷静になってきた銀時は右手で顔を覆いながら語りだす。

「そもそも……あの……カラスみてエなフレンズ共の意味深シーンなに? アレは俺たちに何を伝えたかったの?」

「人間の業……だったんじゃないですか? よくわかりませんが」

「いやだってよ、『人と関わったら迷惑する動物もいる。そこが人間の短所だ』的なこと言われて場面が移り変わってよ……いきなり火山噴火だぜ? アレでなにを察しろと? ……ホントにワケわかんなくてよオ……狂ったように笑っちゃったんだよ……俺ア……」

言葉の最後にはなんだか悲しくなって涙声になる銀時。

そんな銀時に見ていられなくなったのか近藤がすぐさま人差し指を立ててフオー

に入る。

「ま、まあアレはつまり……そう！ イエイヌちゃんのこと言っていたんだ!! きつとスタッフもキュルルちゃんが問題ある主人公だと分かっていたんだ!! だからこそその問いかけだったんだ!!」

「じゃあ……『イエイヌさんごめん』くらいの反省シーンがないとおかしくね……? そもそもなんで火山噴火のシーンになんの……?」

「……………」

フオローできなくてか口を閉ざす近藤だったが、すぐさま新しいフオローを言い出す。

「そ、そう!! きつとニセフレンズの事を示唆していたんだ!! だから関わると迷惑すると——!!」

「いや、キュルルはあの時点でニセフレンズの事まったく知らなかったけど? つうかアレは夢なの? 夢じゃねエなら黒鳥共の言い分も分かんなくねエけど、それだと黒鳥共が海中にいる説明がまったくできねエよな。いや、そもそもニセフレンズがキュルルのせいであるそれが人間の業って理論もどうなんだ? 書いた絵がバケモンになるって、ようは誰かにあげた花束が知らないうちに毒草に変わったみたいなものだぞ? それのどこが業なの? 見た感じ意図して罪として描けてるシーンなんてなくね?」

「……………なんなんだ……………あのシーン……………」

意味がまったく見つかからないフウチョウコンビのシーンの必要性に近藤も真顔となつて困惑してしまつたようだ。

すると新八も「僕も理解できず笑つた一人ですよ」と言いながら両手で顔を覆う。

「フウチョウコンビのシーンもそうですけど……………ドナドナシーンでも笑つちやいましたよね……………面白くなかつたのに……………。なんでー話という最後の盛り上がりが入る話であんな無駄シーン入れたのか分かんない過ぎてワケわかんない笑いが漏れ出ましたよ……………。別に面白いわけでないのに……………」

新八も悲しみにくれ始めたので、またしても近藤が慌ててフォローし出す。

「だ、大丈夫だ新八くん！ あのドナドナはギャグシーンだ!! だから笑つたってなんの問題もないじゃないか!!」

優しく肩に手を置く近藤に新八は冷めた声で。

「近藤さんは……………フルルちゃんが落ちたシーンもギャグシーンだから笑えるって言えますか?」

「……………ごめん……………無理……………」

「そもそもなんであんな無駄なギャグシーンを『ー話』にわざわざ入れたかわかりますか? 今までの謎も伏線もまったく回収されてないのに」

「……………」

新八の問いを聞いて近藤は真顔になった後、

「……………なんで入れたんだ……………あのシーン……………」

顔を斜め下に向けて暗い影を作るのだった。

「そもそも11話が半分くらい無駄だったんだぞ」

と銀時が語る。

「いやそれどころか10話のラストもマジで無駄だったよなアレ……………。キュルルが海に落ちて『主人公がピンチかどうかどうしょー。でもなんの問題もなく助かったー。サーバルとカラカルとも合流できたー。よかったー』って、ふざけんなツ!! どこまで視聴者バカにすれば気が済むだおい!! マジでただただ無駄じゃねエか!! なにがしたかったんだアレは!! ついでにイルカとアシカもキャラ崩壊してるおまけ付なのが尚のこと救えねエ!!」

「ホント無駄なシーンをきっちり描く割に謎解明と伏線回収はまツツツたくされないんですよね……………」

と新八は机の上に腰を下ろしながら疲れたような口調で語る。

「コレ、そもそも12話構成のアニメとして作ってないの丸分かりですよ。やってる事が長期アニメとか長期連載作品とかなんなら無限に連載続けられるネット小説みたい

なもんなんですもん。いや、アニメ12話分かけてここまで話に進展ないのもどうかと思えますけど。それにしたって12話しか話数がないのに、あんだだけ伏線と謎を残して更にセルリアンとの最終決戦まで残ってそれ全部を残したまま最終回迎えるんですよ？ コレどう考えても全ての要素を消化して1話に丸々収めるって無理でしょ……」

新八が疲れたようにテーブルの上に腰を掛けながらけものフレンズ2の現状を語り、「伏線や謎の解き明かしやフレンズたちの合戦に少しは期待を込めていたんだが……それも打ち砕かれるとは……」

近藤もテーブルの上に腰を掛けながら嘆くようにけものフレンズ2に落胆し、「……………とりあえず、最終回は期待できないってことしか分からなかったな……」

最後に銀時もテーブルに腰を掛けながら頭を垂れる。

三者はとにかく疲れたと言わんばかりにため息を吐くのだった。

その時、

「フハハハッ!! ようやく気付いたようだな!!」

などと高らかな笑い声が居間の縁側から聞こえてくる。

そして銀時、新八、近藤が縁側の方へと目を向けると襖を空け、縁側に勝手に入っている長髪の男の姿が目映る。

そして見覚えのあるその風体を見ていの一歩に声を上げたのは新八。

「か、桂さん!？」

桂小太郎。江戸を騒がすテロリスト集団——攘夷志士（穩健派）の長である。

桂は縁側から居間に入って来るので銀時はあからさまに嫌そうな顔をする。

「おいヅラ。お前なに脈絡もなく登場してんだよ。つうかなにしに来たんだよ」

「ヅラじゃない桂だ。……いやなに。近くを通りかかったら、新八君の家から凄まじい怒声が聞こえてくるのではないか。気になって様子を見に来たのだぞ」

「まあ、確かに僕ら近所の迷惑とか考えずにめちやくちや吠えてましたもんね……」

新八の言う通り、銀時も感情の爆発に任せぎゃんぎゃん騒いでいた自覚は確かにある。

銀時たちと対面する形で立つ桂は腕を組む。

「だがまさか、銀時や新八くん。果ては真選組局長までけもフレ2に怒りを爆発させているとはな。この品評の集い。一けもフレ好きとしては是非とも参加せねばと思つてな」「えッ? なに?」と銀時は片眉を上げる。「お前も見てたの? けもフレ。……まあ、動物好きのおめエなら見てもおかしくねエか」

ちよつと意外と思つたが桂は意外と肉球に命かけたりする男でもあるので特におかしいところはないと自己完結させる銀時。

桂は腕を組みながら表情を険しくさせる。

「俺もあのアニメには怒りを隠し切れなかったもんでな。一人のもふもふ&肉球好きとしては文句の一つも言つてやらんと気が済まん」

そして桂はクワツと表情を変化させ拳を握りしめる。

「さあ銀時!! 俺と共にけもフレ談義を朝までしようではないか!! そしてそのまま攘夷をしようではないか!!」

「帰れ」

しかし銀時は素っ気なく桂を追い返そうとする。

「もう俺は言いたい事ほとんどぶちまけて疲れてたんだよ。だからおめエはあの白いペンギンのフレンズにでもぶちまけろ」

「なんだと!? 俺はお前とけもフレ談義でフレンズとなり、一緒にえどちほーを滅ぼそうと誓っていたではないか!!」

「誓ってねーよ!! 勝手にねつ造すんな!! つうか滅ぼすならせめて2を滅ぼしてくれ。とにかく攘夷のフレンズはとっとおうちに帰つてくれない?」

「フツ……銀時よ。語るに落ちたな」

「あん?」

桂の意味深な発言に肩眉を上げる銀時。

テーブルの近くまでやって来た桂はしたり顔で腕を組みながら語りだす。

「貴様は今、俺にイエイヌと同じ発言をしたのだぞ？ おうちに帰れ、だと？ フツ……やはりな。貴様は優しい世界ではないだとかあーだーこーだと理由も連ねて言っておきながら、結局は貴様自身にも優しさなどないではないか」

桂はビシツと銀時に指を突き付ける。

「優しい心を持たぬ貴様にけものフレンズについて語る資格はないツ!! 貴様はフレンズではない!! ビーストだ!! 少しは作品を批判する前に自分を批判したらどうだ!!」
「じゃあ帰れ。語る資格ないから。つうか普段から人のことイライラさせるテロリストに対して優しさなんて持ち合わせていません。そしてまずはお前が自分を見直してくれない? いやマジで」

銀時が冷たく言い放つと新八も冷めた目線で桂に語り掛ける。

「そもそも2のせいで僕らの心はもれなくビーストですから……。こんな見せられたら優しさ消え去りますよ……」

「おいゴリラ」

と銀時はテーブルに座って項垂れる後ろの近藤に話しかける。

「なんだ?」

「いや、なんだ? じゃねえよ。ツライんだぞ、仕事しろ」

「ツラじゃない桂だ」

「とにかく、ゴリラ。げても品の評会はもう終わりだから、とっと仕事したらどうだ？」
銀時の言葉を受けて「そうだったな」とテンションがかなり低い近藤は気だるげに立ち上がる。

立ち上がり桂に体を向けた近藤はすうくと息を吸い込んで、

「桂アアアア!! 今捕まえて——!!」

走り出そうと歩を進めたが、すぐさま力が抜けたように体の態勢が崩れて両手両足を畳へと付けて四つん這いとなってしまう。

「こ、近藤さん!! 一体どうしたんですか!?!」

いきなり両手両足を床に付ける近藤を心配してか新八が立ち上がり声を掛ける。一方の近藤は畳の床を見つめながら汗を流して動揺を見せている。

「な、なんだコレはア……!?! まるで体の自由が効かん!」

「分かったか近藤……」

と言いながら桂は近藤に近づき、片膝を付いて優し気に彼の肩に手を置く。
「2の視聴により、心どころか貴様の体も悲鳴を上げているんだ」

「なんでだよ!?!」と新八はツツコム。「アニメ見て身体に影響及ぼすなんて聞いたことねエよ!!」

「全身に響くこの倦怠感と鈍い痛みは……けもフレ2のせいなのか!?!」と近藤。

「いや、それただ単に姉上にボコボコにされて体が悲鳴を上げていただけでしょうが!!
自分の落ち度をアニメのせいにするな!!」

「かく言う俺もそうだ……」

新八のツツコミを無視して桂は語りだす。

「けもの擬人化アニメとして最高だったけものフレンズを見て、まさに気分はたのしー
! だった俺も続編には大いに期待していた。あの優しい世界にもう一度会えると。
もふもふの樂園をもう一度楽しめると。なんか制作側に「ごたごたがあつたらしいがそ
んな事は俺の知った事ではない!! 俺が興味あるのはけものフレンズなのだから!!」

そこまで熱く語っていた桂は「だがしかし!!」途中から憎々しげに拳を強く握りしめ
る。

「俺が待っていたのは理想郷ジャパリパークではなく暗黒郷ガツカリパークだった!! 似ても似つかないナニカを目
の当たりにしてしまったのだ!!」

そして桂は涙を流し出す。

「エリザベスが居る俺にとつてあんな愛も優しさももふもふも肉球もない世界は耐えら
れなかった!!」

「肉球は元からなかったろ」と銀時。「まあ、2にも一応はもふもふ要素あつたし」

「俺が言ってるのは心のもふもふだ!! 断じてうすつぺらいガワだけ着せたもふもふで

はない!!」

桂はまるでやりきれない思いを吐き出すように両の拳を握りしめる。

「2と言う悪鬼羅刹を見た俺は血涙を流し、同じけものたるエリザベスは泡を吹いて気絶してしまった!! 今もあまりの精神的ショックで部屋に引きこもってしまったんだぞ!!」

「いや、エリザベスのどこにけもの要素あるんですか」と新八。

「むしろあるのはおぼけ要素だよな」と銀時。

冷静にツツコム新八たち。ちなみにエリザベスとはおぼQみたいな感じの風体の謎の存在である。

桂は声を絞り出すように語りだす。

「俺と同じようにけもフレを見て、銀河間けもフレ商いを成功したと自慢した商いを生業とする男——坂本が居た」

「あいつなにやってんの!?!」

と銀時が昔の戦友の行動にツツコミ入れる中、桂は語り続ける。

「けもフレバブルがノリに乗って2製作による商い拡大に大いに息渦巻いていた坂本だった。だが2を見た瞬間に……」

『こんなもん商品にすらならべラアアアアアア!!』

「血を吐き出し、拳句は笑顔とデカイ声が消え意気消沈してしまった……」

桂は拳を握りしめ、かつて旧友の惨状を語る。

「あいつから笑いもデカイ声も奪うって相当だな……」

冷静に冷めたツツコミをする銀時とは対照的に近藤は桂の言葉を聞いて顔を上げ、目を潤ませる。

「桂……。お前もまた……。傷ついた一人だったのか……」

「そうだ近藤。荒れた俺たちの心は今やビーストだ。心からは一切の優しさは消え去り、永遠に2と言う牢獄に囚われ、『ねつとちほー』で暴れるだけの存在へと成り果ててしまっだろう」

「いや、それ要は2の不満をネットの世界に罵詈雑言としてぶちまけるって言ってるだけですよ？」と新八はツツコミ入れる。「なに壮大にしようもないこと語ってるんですか」

新八のツツコミなどスルーして桂は「だがそれではダメだ」と言っって首を横に振る。

「ただ口汚く罵るだけでは何も生まれない。ネガティブな感情は心や体に悪影響を及ぼし、いずれは『ねつとちほー』のセルリアンになってしまっだろう」

『『えどちほー』のセルリアン（テロリスト）がなに言っってたんだよ。つうかねつとちほーのセルリアンのが大分マシだな』

と銀時は冷めた声で言う。

桂の言葉を聞いて近藤はまた項垂れる。

「なら俺はこの荒んだ心をどうすればいいのだ？ お妙さんの『へいげんちほー』にこの荒れた心を癒してもらうしかないのか!!」

「おめエは姉上にエロい事したいだけだろ!!」と新八は怒鳴る。「やめろよ!! マジでやめろよ!! やつたらねつとちほーにあんたのありつたけの罵詈雑言と今までの犯罪歴並べて立ててやるからな!!」

「だからこそ、近藤。今の不毛な視聴は止めて新しい道を模索する時なんだ」

と桂は言つては懐から何かを取り出す。それは何かのポスターだった。

「そ、それは……!!」

近藤は目を見開き、桂はフツと笑みを浮かべる。

「ケムリクサ……。それこそが俺たちが今行くべき優しい世界だ!」

クワツ! と豪語する桂に銀時と新八はジト目でお互いの顔を見合わせ、近藤は膝立ちとなつてポスターを桂から受け取り驚きの表情を浮かべる。

「こ、これは!! けものフレンズだ!! 俺が知っているけものフレンズにそっくり(作画)だ!! なんかすっごい赤いけど!!」

震える手でポスターを眺める近藤には桂はどや顔で説明する。

「フツ……当然だ。なにせそれはけものフレンズ（1期）の監督と制作が集まって出来た作品なのだからな。けもみもふもふだって標準装備だ」

「なにイーッ!? 2は1の人たちが作っているのではなかったのか!？」

「んなワケねエだろ!!」と新八はツツコム。「作画も内容もあんだだけ違って同じ制作が作つてると思えるワケないでしょ!!」

「近藤ッ!!」

と桂は声を張り上げ、近藤の肩にバン! と両手を置く。

「2には優しさも愛は無かったとしてもケムリには優しさも愛ついでにけもみもふもふもが詰まっているともっぱらの噂だ!!」

「いや見てねエのかよ」と銀時。

「当たり前だ!!」と桂は豪語する。「俺は『えどちほー』を火の海にすると言う大事な使命があるのだ!! アニメにうつつを抜かすのはその後でも遅くはない!!」

「おめエが一番愛と優しさを失ったピーストじゃねエか!! 見とけケムリなんちゃら!!」
そこで愛と優しさ取り戻してこい!!」

「だからこそもう心がピーストになるアニメの視聴は終わりにするべきなんだ!! 優しい心を取り戻せ!! このままでは俺のように怒りで我を失ってしまうぞ!!」

桂の熱き説得(?)を聞き、近藤はしばし迷ったように顔と視線を逸らすが、やがて。

「桂……………すまんが、その提案には乗れん」

近藤は乗せられた桂の手をどけてゆっくりと立ち上がる。

近藤は桂に背を向け、語りだす。

「確かに愛、友情、優しさが詰まった素晴らしい作品は世にたくさんある。お前の言うケムリクサもそうなのだろう。2を見て心が荒んでいるからこそ、別の作品に移り心を静めると言う意見も分からなくはない。だがしかし、けものフレンズという作品を好きになり、なんだかんだ2をここまで視聴してきたのだ。最終話目前になって今更視聴を中断などできるワケがない。最後の最後まで見守ろうという意思が俺にはあるのだ」

近藤の話聞き、銀時は「そうだな」と言つて座布団に腰を下ろす。

「もうなんだかんだ1話だ。ひでえひでえと言いなながらここまで来たんだ。このアニメが最後の最後にどうなるのか確認しとかねエとさすがに気持ち悪いしな。批判するかしないかは別だけど」

新八も「それもそうですね」と頷き、語る。

「今までめっちゃ批判してきましたけど、結局最終話目前にまで到達しちゃいましたからね。もう嫌なら別の作品を見ればいいって段階とつくに超えちゃってますよ。ソードマスターになろうが打ち切りエンドになろうが感想言つて終わり感覚ですから。後はどうなるか、それだけ気が掛かりですしね」

三人の意見を聞き、腕を組み納得したよな顔で。

「そうか……わかった。お前たちの決意のほどはしかと理解した。ならば、俺に言える事もない」

と言って背を向け、縁側を通り庭に向かおうと歩を進める。だがしかし、桂は途中で足を止めて声を出す。

「一つ言っておくが、俺も最終回までは見守る派だ。だが、これから始まる最終回が本当に『最終回』なのかどうか、分からんぞ」

「「えッ?」」

桂の意味深な言葉に新八、銀時、近藤は声を漏らし、桂は振り向かず長髪を見せたまま語りだす。

「未消化の伏線と謎を多数残したまま最終回突入。それが何を指し示すか、よく考えることだ」

そこまで言って桂は庭を抜け、志村邸を出ていくのだった。

桂の言葉を聞き、銀時、新八、近藤はお互いに顔を見合わず。

やがて銀時はため息を吐きながら、今までうちに秘めていたある予想を口にする。

「続編発表とか……ありそうだな……」

第5話：12話 何度も怒るのは体に悪いけど自分ではどうにもならない

「俺さー、今更ながらに思うんだけどよー……」

志村新八の家——つまり志村邸の居間でテーブルを囲む、銀時、近藤、新八。

心の準備を整えて、録画した最終回を視聴しようとして昼頃集まった三人。

すると、銀時がテーブルに頬杖を付きながら向かい側の新八と近藤に語り掛ける。

「制作陣がかばんが嫌いなのか？」

「えッ?」「ん?」

新八と近藤は怪訝な表情を浮かべ、

「銀時。それはいくらなんでも邪推が過ぎるぞ」

隣に座る桂小太郎が窘める。

「いやお前なんでいんの?」

銀時はチラリと自分の横隣りに座る長髪にツツコミ入れると、桂は腕を組みながら答える。

「さすがにどんな爆弾が飛び出すか分からん最終回を一人で見るのはな……誰かと一緒

に見た方がいくぶんか気持ちが悪くなるかもしれない」

「いや、お前には白いペンギンのフレンズだかゴーストだか分からん奴がいるだろ。そいつと一緒に見る」

「エリザベスにあんなアニメを見せられるか。しかも前に言っただろ。エリザベスはシヨックのあまり部屋に引きこもっているんだぞ」

「いいじゃないですか銀さん」

とここで新八が話に割り込む。

「桂さんだつてあのアニメに怒りを感じて物申したい一人なんですから、気持ちを分かち合いましよう。のけものにしないうで一緒に見ましょう？　ね？」

「むしろ俺はコイツと気持ちを分かち合いたくねえんだけどな……」

と銀時は言つて近藤にチラリと見る。

「おいゴリラ。お前は良いのか？　前回は体が言う事効かねエつてことで見逃したのかもしれないねエけどよ、今回はさすがに捕まえたらどうだ」

「見逃そう」と近藤はキツパリ言う。

「おい警察」

「俺としても桂を捕まえたいたいのには山々だが、今は一人の視聴者としてのけものフレンズ2と言う巨悪に立ち向かう同志であると同志で認識している」

「近藤……」

桂は嬉しそうに宿敵の組織の長の名を呼び、近藤はフツと笑みを浮かべながら握りこぶしを見せる。

「桂よ！ 今は真選組と攘夷志士と言う垣根を超え、のけもの最終回に立ち向かう時だ！！」

「おう！！」

近藤と桂は立ち上がりガッツポーズを絡めて固い絆を結び合う。

そんな二人を冷めた表情で見ていた新八は言う。

「銀さん。この人らしよっちゆう呉越同舟してるんで言うだけ無駄です」

新八の言葉を聞いて銀時はため息を吐く。

「まあわかった。もう好きにしろ」

「ところで新八くん？」

近藤は座り直し腕を組みながら新八に顔を向ける。

「今後の事を考えてお妙さんも一緒に視聴した方が良いんじゃないのか？ 後で気になつて一人で見るより誰かと一緒に見た方がダメージはいくらか緩和されると思うぞ

？」

「こや……」

と新八は言いにくそうに答える。

「姉上はまだダメージが残って……とにかく負のオーラが凄いで近づかない方がいいです。前に僕も一緒に見ようって、勇気を出して誘ったんですけど『心が落ち着いてから見たいの』って真っ黒い笑顔で言われました……」

「そ、そう……」

近藤は顔を真つ青にし、思い出したように銀時へと顔を向ける。

「は、話は戻るが、なぜ2の制作陣がカバンちゃんを嫌いだと思うのだ？」

「考えてみる。サーバルから記憶消すわ、ボスを完全に物扱いするわ、無能になるわ、人から貰った物を切り裂くわ、フルルが落ちても完全に無視するわ、今の今まで無慈悲な扱いとキャラ改悪をしてきたんだぞ。あれだけやられたら公式がかばん嫌いだからああしたんだと勘ぐられてもおかしくないだろ」

「ああ、確かに……」「否定できんな……」

新八と近藤が悲し気な表情でうんうんと納得していると桂が答える。

「いや違うな銀時。さきほども言ったがそれは邪推だ。ただ単に物凄く描写が雑になり、あまりにもお粗末な出来になっただけだろう」

「桂さんの言う通りですね」と新八も意見を変える。「よくよく考えたら雑な作りになったからかばんちゃんだけじゃなくて1期フレンズたちのキャラもおかしくなったワケ

ですし」

「確かにそうだな……」

と近藤は腕を組み目を摘むって天井を仰ぐ。

「俺の好きなトキちゃんのカヤラもちよい役だったのにおかしかった。だってオーディションでトキちゃんが歌を披露したいからじゃなくて流されたようにじゃぱり求めたのは今になって考えるとおかしいからな」

「特にひつでーのはサーバルだしな」と銀時。「IQが上下しまくって笑顔でセルリアンと戦う姿見せられたら1期の面影が完全に消え失せるレベルだぞ。まあ、多少は再現できてる部分もあるかもしれないねエけどよ」

「いやあのサーバルちゃん別個体じゃないですか?」

と新八は首を少し傾げなら言う。

「きつとかばんちゃんを見たことあるだけの別個体ですよ。あとカバンさんも実は別人説を僕は推します」

「いや、かばんさん別人説は俺は割と無理があるから、止めるわ。だけどサーバル別個体説は全力で推すぞ。最終回はきつと打ち切りエンドだ。かばんとサーバルの関係を一切言及することなく終わつたなら1期のサーバルはどこかに居る、もしくはちよつと別行動してて出番なかったって解釈で好意的にゲテモノを見終える事が出来る」

「なるほど。好意的か……」

近藤は腕を組みながらうんうんと頷く。

「つまりはどんな最終回なら心穏やかに受け入れるか迎えられるかを妄想するのか……。なるほど今の俺たちには大事な事だな。心の準備として必要なことだろう」

「良いですねそれ！」と新八は乗り気になる。「1期と2期を別物にできる妄想!! さすがに怒ってばっかじゃ体に悪いですもんね!!」

「そう言う事ならば、まずは俺が許せる最終回を言わせてもらおう……」

と近藤は腕を組んで得意げに語りだす。

「あれだけ伏線や謎を残しているのだ。そのどれだけが回収されるとしても、この調子では大型セルリアンとの決戦とキュルルちゃんとの正体とピーストとの和解とサーバルちゃんとかばんちゃんの言及が限度だろう。後の伏線はどうなるかは分からんな」

「俺はぶっちゃけ大型セルリアンとの決戦くらいだと思っうな」

銀時は頬杖を付きながら気だるそうに言う。

「11話で何にも謎の解明も伏線回収もしなかったアニメだぞ。なら大型セルリアンをワンパンでぶっ飛ばしてせいぜい俺たちの旅はこれからだエンドだろ。もうそれなら怒るくらいで許してやる。ただしサーバルとかばんが1期の二人でした展開ならマジで許さねエから」

「いや怒るくらいでつてそれ以上があるんですか?」

と新八が恐る恐る尋ねると銀時は声音を低くして。

「呪う」

「こわッ! でも分かります!!」と新八は頷く。「ソードマスター展開とかしてサーバルちゃんとかぼんちゃんの仕事には触れて欲しくありませんから。でも僕的にはサーバルちゃんがかぼんさんの事を思い出して三人の旅を再開しよう、なら許します。ちなみに三人に何があつたかは作られるか分からない次回作で、展開でも許します。これならばぶん怒る事もないと思います」

「あッ、それなら俺も許すかも。別人説が一番いいけど、せめてサーバルとかぼんとボスのトリオを元に戻すならマジで怒りとか湧かねエかも」

「俺も俺も! 俺もそれなら怒りを抑えられるぞ!」

と近藤がノリ気で賛同する。

最終回を始めずにそんな妄想を話し合っている三人を見ていた桂は、

「いい加減にせんか貴様らアッ!!」

クワツと表情を変化させて一喝する。

三人は言葉を止めてゆっくりと桂へ顔を向ける。

桂は立ち上がり、鋭い眼差しを銀時たちへと向ける。

「黙って聞いていれば都合の良い妄想をベラベラと語りおって!! そんなに最終回が怖いか!! それでも武士か貴様等!! 大の男が揃いも揃って情けない!! 現実を見んか現実を!! 俺には貴様らが最終回を恐れているようにしか見えんぞ!!」

「桂さん……」「桂……」

新八と近藤は桂の言葉に少し感銘を受けな表情となり、銀時も少なからず感心してしまふ。

「ツラ……お前……」

「ツラじゃない桂だ!! いいか! 今まであらゆる説が流れた!! かばんちゃんとかばんさん別人説!! サーバル別個体説!! パラレルワールド説! 所詮そんなものはただの妄想だ!! 俺たちが向き合うべきは最終^{げんじつ}回なのだぞ!!」

桂小太郎。普段はただのウザい電波長髪野郎で通っている男が此処まで真摯にけものフレンズ2と言う悪魔に向き合おうとしている事実にさすがの銀時も感心、

「なぜならアレはただの『二次創作』だからだ!!」
しなかつた。

一番現実を受け入れてないのは桂^{コイツ}だった。

「ツラ。現実逃避すんな」

と銀時が言うと桂は声を荒げる。

「ツラじゃない桂だッ！俺は逃避してない！！アレが金と人員が掛かった二次創作であると言う現実をしつかり受け入れたのだぞ！！」

「桂さん止めましょう。聞いてて悲しくなります」

と新八は憐みの眼差しを桂に向けるが狂った長髪はもう暴走機関車のように止まらない。

「そうだッ！！二次創作なんだッ！！アレが二次創作ではなくなんだと言うのだ！！それならば俺だつてあらゆる面を許せるぞ！！プロが作ったとは思えない杜撰ずさんな出来の数々！！一期のストーリーとキャラに対する冒涇の数々！！なにより俺が大好きだったサーバルとかぼんとボスに対するあの仕打ち！！だがアレは二次創作だ！！公式ではなく有志を募り資金を集めた、自主製作アニメなんだ！！」

桂は両手で頭を抱えてぶんぶん長髪を振り乱す。

「ああああああッ！！二次創作としては批判が多い出来ではあるが俺は許そう！！なぜなら二次創作は自由な世界！！IFの世界を作って楽しむ世界なんだ！！」

「か、桂！！落ち着け！！落ち着くんのだ！！お前の気持ちはわかった！！分かったから！！」

さすがに見ていられなくなったであろう近藤が必死に声を掛ける止めようとす。

だが正気を失ったように桂は瞳をグルグルさせて抱えた頭をブンブンと縦に横に振

りながら壊れたように話し続ける。

「あ、アハハハハハ!! お、お前らは気付かないのか!! あの二次創作はサーバルちゃんとかばんちゃんとかボスのバットエンドを描いた二次創作なんだ!! 6話でかばんさんの態度がそれを物語っているではないか!! 少し悪趣味かもしれないが俺は全然かまわないよ!! だってそうだから!! 二次創作の世界じゃ良くあることだ!! なにをそんなにムキになる!! 素人が作った作品の一つなんだぞ!! 気に入らないキャラの存在を無くしたり、扱いを悪くしたり、扱いきれないのかどうか知らんがキャラが改変されたり、とにかく素人が集まり自由に表現された世界なんだぞ!! 素人が思いついた自由なIFなんぞ!! 『まあ、こんなもんだな』、つて受け止めればいいじゃないか!! そもそもこんな二次創作を受け入れられんが所詮は二次創作だ!! だから俺は敢えて受け入れられる!! なぜなら色々なたのしー!! 二次創作はまだまだあるからな!! けものフレンズは不滅なんだ!!」

「ただだけねつとちほーにおめエは入り浸ってんだよ! つうか言ってる事無茶苦茶じゃねエか! 攘夷活動はどこ行った!」

と銀時がツツコミ入れ、桂は頭を抱えながら答える。

「だってねつとちほーはたのしー! もん!! 二次創作が俺のオアシスだもん!!」

「もん、じゃねエよ腹立つな!! どんだけ現実を受け入れたくねエんだおめエは!!」

戻って来い!!」

「いやだアアアア!! お前がアレを二次創作と認めるまで俺は最終回なんて見ないイイイイ!!」

桂が頭をブンブン横に振って必死に抵抗する。

もう良い大人がしている態度ではないが、仕方ない。よっぽど精神的に耐えられなかったのだ。だから別アニメとかに逃げたりしたいのだろう。

「そ、そうですよね!! に、二次創作って自由な世界ですよね!! わ、分かりますよ!!」
怒る銀時とは対照的に新八は必死に肯定しながら桂を鎮めようと努める。

「僕もねつとのちほーを巡ったから知ってますよ!! ハーレムラブコメの女の子キャラが主人公以外の他作品キャラをやオリキャラを好きになったり、主人公の存在がなくなったり、とにかく好きと言う思いが色々な表現方法になったのを僕も見てきました!! 全部を許容しろとは言いませんけど、表現方法によって住み分けすればいいですもんね!! バットエンドだって表現の一つですもんね! でもその反対にキュルルがいな作品やオリ主人公や他作品キャラによるイエイヌちゃん救済作品も出来たんですもんね!! 二次創作どんとこいです!! 大歓迎です!! いっぱい愛と好きと優しさに溢れた作品で心を癒せばいいですよ!!」

「そうそうそう!! そうなんだそうなんだそうなんだッ!!」

と桂はヘッドバンキングのように頭を縦にブンブン振って必死になって肯定する。

「だからこそ二次創作は素晴らしい!! そしてかばんちゃんとサーバルちゃんとボスの旅は終わってなんぞいないんだ!! 頼むから!! お願いだから!! 誰かアレを二次創作だと認めてくれ!! せめて実は並行世界でしたと数ある未来の一つであると——!!」

「ツラ……」

銀時が言葉を遮り桂の肩をポンと叩く。

さすがにかつての戦友の言葉だからなのか、桂は大人しくなりある言葉を紡ぐ。

「ツラじゃない……フレンドだ……」

「いやあんた攘夷志士でしょ」

新八がさり気にツツコミ入れ、銀時は真剣な表情で語り掛ける。

「おめエの気持ちは良く分かった。よつぽど好きだったんだなあ……けもフレが。だからこそ、そんなおめエに言わなきゃならねエ言葉がある」

そこまで言って銀時は一旦言葉を止め、やがて口を開く。

「アレ二次創作じゃなくて『公式』が生み出した正史だから。いくら否定しても住み分けなんてできねエぞ」

「ツツツ!!」

悲鳴すら上げずに桂はブシャー!! と吐血して机に突っ伏す。

その様子を見た新八と近藤は数瞬の間、呆然としていたがすぐさま。

「いや……あんなに死体蹴りしてんですか!!」と新八はツツコム。「桂さん可哀想過ぎるでしょ!! あんたはキュルルですか!! つうか今の発言はあまりにも聞き捨てなりません!!」

「誰がキュルルだツ!! そつちも聞き捨てならねエぞおい!! あんな外道と一緒にするんな!!」

と銀時が怒ると近藤が新八に賛同の意を示す。

「そうだそうだ!! 俺だってな、正直言つてアレをけものフレンズ公式つて認めたくないんだぞ!! 二次創作か別作品で解釈で今まで耐えていられたんだ!! そんなことはつきり言われたら心が締め付けられて悲しくなるぞ!!」

「落ち着けお前ら!」

二人の怒涛の文句を聞いた銀時は語尾を強くし言い放つ。

新八と近藤が黙るのを見計らつてすぐさま銀時は語りだす。

「俺もよ、アレをけものフレンズと認められねエし認めたくはねエ。けものフレンズ2なんて題名を口にするだけでもマジでむかつ腹が止まらねエ!!」

「ならなんで——!!」と新八。

「だからこそだ!! だからこそ俺たちはアレをけものフレンズと認識した上で評価しな

きやならねんだ！ でなきやなにも始まらねんだ!! だって1期の続編として評価しなきやならねエから!!」

銀時の熱い語りを聞き、新八と近藤は黙り込む。

「さすがに俺も最終回は何が来るのか分からず尻込みしていた！ だが！ 認めたくねエがツラの言葉で目が覚めた!! こうなったらとことん最後まで見てやろうじゃねエか!! “虚無” で固められた最悪な最終回を最後まで視聴してやろうじゃねエか!!」

「虚無……」

近藤と新八が呟き、銀時は「そうだ！」と熱い演説をかます。

「今までの話を見れば分かるはずだ!! 回収されず増えていく伏線と謎！ ことごとくぶち壊された1期の要素にけものフレンズでやっちゃならねENG集!! 素人でも分かるような雑な作りをやって来た連中が作る最終回なんて容易に想像できんだろうが!! どんな下回りになるかなんて簡単に予想できんだよこっちは!!」

「そ、それこそが……」

「最悪の虚無回……」

新八と近藤が言葉を発し、銀時が「そうだッ！」と熱く告げる。

「最悪の虚無回。つまりまったく伏線と謎が回収されない『俺たちの旅はこれからだエ

ンド』だ!! どうせ大型セルリアンとニセフレンズ倒してなんもかんも終わりだ!! かばんとサーバルについては触れもしないに決まってるぜ!!」

「そ、そんなバカな!!」

とここで近藤が待ったをかける。

「1期をあれほどプッシュアップしおきながらサーバルちゃんにかばんちゃんにも触れずに最終回を迎えるだど!? そんなことがあると言うのか!? そんなことをすれば俺たちの心をビーストだぞ!!」

「そうですね!!」と新八も続く。「それじゃあかばんちゃんもサーバルちゃんもボスも可哀想ですよ!! 三人にあれだけ惨たらしい事しといてなんの落としどころも設けないうってマジで神経疑うレベルですよ!! マジで怒りが収まりません!!」

「バカかおめエら!! その逆だ!! かばんさんの正体もサーバルの正体も分からないエンドでいいんだよ!! そうなればこっちの勝ちだ!!」

「えッ!?」

驚く新八と近藤に銀時は身振り手振り使って勝ち誇ったように告げる。

「まだあの二人が1期のかばんかサーバルか確証は得られない段階だ。6話だつてあんなふわふわな表現じゃまだ確定材料には早エしな。そしてそんな描写をもうこのアニメじゃする気がねエのはもう透けて見える」

「た、確かにそれは俺も思った事だ……」

と近藤が同意を示し、新八が眉間に皺を寄せる。

「でも、それでなんで僕たちの勝ちに？」

「バツカおめエ！ 考えてみる!! つまりアレはかばんちゃんじゃなくてかばんさんと言う別人つてことにできんだよ!! きつとちつさい頃もかばんさんと呼ばれてたに違いない!!」

「なにその強引な現実逃避イイイイ!!」

「そしてキュルルにくつついたサーバルも別個体です!! かばんさんとサーバルは昔お友達だけどサーバルだけ記憶失いました!! ただし!! 1期のかばんちゃんとサーバルとはまったくの無関係の別人です!! だからかばんさんもサーバルにちゃん付けしなかつたんです!! だからラツキーピーストも物扱い!! 無能な上に平気で人から貰った物を切り刻めるのです!!」

「すツ、すごい!! 今までのキャラ崩壊に辻褄を合わせる事ができる!!」

と近藤は銀時のとんでも説に納得しかけているが新八がすぐさま反論する。

「い、いや1期のフレンズ勢はどうすんですか!! 博士やアイさんもフェネックちゃんは!? 1期要素もりもりなんですよ!!」

「あいつら全員もれなく別個体です!! アイさんなんか声がおかしかったし!!」

「ずだ!! 信じる!! プロを信じる!! その手腕でなにも得られない物語を作ってくれ
るはずだ!!」

「うっしやアアアアア!! 勇気出てきたアアアアア!!」

もうヤケクソ気味に録画機器を動かし始める新八。

「銀時イイイイイイイ!!」

とここで今まで机に突っ伏していた桂がガバリと起きる。

「俺も覚悟を決めたぞオツ!! こうなつたら何も考えてないと言われ続けた脚本に掛け
るしかないッ!! 俺たちのなけなしの希望をかけるんだッ!! もう物語の出来など
知ったことかッ!! すべては虚無エンドに掛かっているぞ!!」

「そうだヅラアアアア!! その虚無エンドの時こそ、おめエの愛と優しさと好きが詰
まった二次創作で反撃する時だアアアア!!」

「見ていろ脚本よオオオオオ!! 二期フレンズたちみんな救済してくれる
わアアアアア!!」

録画機器を操作する新八はガバッと振り向き目を吊り上げながら吠える。

「皆さん祈りましょう!! せめて僕らだけでもフレンズたちに幸が残っていることを祈
るんです!!」

するとすぐさまテレビの前に集まった銀時も桂も近藤も祈りを始める。

「余計な事すんなよ脚本んんんん!!」

と銀時は両手を合わせて祈りを捧げ、

「俺たちにせめて1期と別物にするだけの力を残してくれエエエエ!!」

近藤はお祓い棒を左右に振って気合の念を送り、

「神よ俺に勇気をオオオオオオ!! 何も無い虚無エンドをオオオオオオ!! とにかくなんもなしエンドだ!! 大ボス倒してはい終わりにするんだ!! 終着点はなんでもいから!! とにかくサーバルちゃんとかばんちゃんを頼むから巻き込まないでくれエエエエ!! 後は俺がなんとかするからアアアアアア!!」

桂も天に向かって両手を上げて精一杯の念を神に送っている。

「視聴行くぞオラアアアアア!!」

新八が勢いよく再生ボタンを押し、ついに問題の最終回が始まる。

*例によって台本形式になります。

*最終回 視聴 開 死

銀時「くつそオオオオオオ!! 例によって糞雑描写が俺たちに襲い掛かるウウウウ

!!」

新八「キュルルは何でスイートルーム行かないの!!」

近藤「耐えろオオオオ!! 耐えるのだアアアアア!!」

桂「リヨコウバトがなんか遠回しに厄介者キャラにされてるように見えるが俺は耐えてるぞオオオオ!!」

四人共テレビの前に正座してとにかく祈りながら見ていた。

*ビーストセルリアンが登場し、簡単に倒される。

銀時「よしよしよし!! ちゃんと伏線回収したな!! 偉いぞ!!」

近藤「なんかすつごいあつさり倒されたけどこのアニメで初めて伏線回収を見た気がするぞ俺は!!」

新八「近藤さん!! このアニメ一応は伏線回収したりしてます!! なんの意味もなかったけど!!」

『セルリアンの強さは、人の思い入れの強さで変化するのです』

銀時「どっちだよ!! セルリアンの強さはコピーしたフレンズと同等じゃなかったのか!!」

新八「銀さん!! むしろこれは喜ぶべきことです!! これならサーバルちゃんの記憶蘇りと言う設定無視したハッピーエンドも夢じゃありません!!」

桂「よくやった脚本!! そのまま設定破壊しまくってサーバルの記憶を戻してくれ!!
そしてカバンちゃんとの旅を再開するのだッ!!」

近藤「サーバルの記憶戻れ!! サーバルの記憶戻れ!! サーバルの記憶戻れ!! サー

バルの記憶戻れ!! サーバルの記憶戻れ!! サーバルの記憶戻れ!!

*キュルルが亀裂を飛び越えるシーン。

近藤「オわアツ!! 見てられん!! カバンちゃんの木登りと重みが違い過ぎるウウウ!!」

新八「近藤さん耐えてエエエエ!!」

『パークの危機だからー』

*フエネックが軽めのチョップでセルリアンを倒す。

銀時「うっわッ! ショツカー戦闘員ってめっちゃ強かったんだな!!」

桂「銀時落ち着けエエエエ!! きつとフエネックのチョップ80万もなんだッ!!」

『大好きなんだアアアアアアアアアアアアアア!!』

銀時・桂

「ころす!!」

銀時と桂が立ち上がりテレビを破壊しようと動き出すが、新八と近藤が押さえつける。

新八「銀さん落ち着いてエエエエエエ!! テレビを壊してもキュルルは壊せません

!!

近藤「桂耐えろオオオオオオ!! アレは人間の皮を被ったロボットだと思っただアアアアアア!!」

*ビーストがセルリアンたちを次々に倒していく。

近藤「おオ!? アムールちゃんもついに救済され——つてねエエエエ!! ただの無差別兵器じゃんあれ!!」

*カラカルとサーバルが自分たちの偽物を倒すシーン。

『さっすが人の手下やー!』

銀時・新八・桂・近藤

「「「ああッ!」」」

*瓦礫に埋もれるビースト。

桂・近藤

「「グボロシヤアアアアアアアアアアアアアアアア!!」」

桂と近藤は口から血と吐しゃ物を吐き出し、

新八「くウウウウ!!」

新八は血涙流し、

銀時「斜め下……あつたよ……」

銀時は茫然自失だった。

*ビーストが埋もれているであろう瓦礫の上でライブすると言い出す。

銀時「フレレンズを異常者にすんじやねエエエエエエエエエエエ!!」

新八「狂つてる上に猟奇的過ぎるウウウウウウウウウウウウウウウウウ!!」

桂・近藤

「もう嫌だアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

なんやかんやで良かった良かった感を出しながらエンディングまで近づく。

「やったアアアアアアアアアアアア!! あと5分!! もうすぐエンディング

だアアアアアアアアアア!! かばんちゃんサーバルちゃんは大丈夫

だアアアア!!」

ついに終わる事に対して新八は涙してはしやぎ、

「耐えた耐えた耐えた耐えたぞオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

近藤もまた無事(?)にラストを迎えられる事に涙を流し、

「うっしやアアアアアアアアアアアア!! どうだ見たか!! なんの謎も伏線も回

収されたなかつたじゃねエか!! 罵詈雑言言つてやるぜ!!」

銀時は吠え、

「アムールよ……俺が必ず救い出してみせるぞ……」

桂は拳を握りしめながら思いを馳せる。

新八はもうエンディングが始まったと言わんばかりに語りだす。

「いや……けものフレンズ2つて1期とは似ても似つかぬ別物でしたけど、まあ別のパークのお話つて事だったんですかね……」

「おいおい」と銀時は笑みを見せながら答える。「別のパークは言い過ぎだろ。きっと1期と同じパークだけど登場人物たちは全員別人なんだよ。まあ、良いネタにはなったな」

桂はフツと笑みを浮かべながら腕を組む。

「ただのクソの結晶体だったが、光るキャラもいたかならな。これからの二次創作が楽しみだ」

「ならば、俺も付き合おう。最高の救済二次創作を仕上げてみせるぞ」

近藤も桂の肩に手を置いて笑みを浮かべる。

そんなこんでめでたしめでたし。

「アハハハハハハハハ!!」

喜びを分かち合う四人であった、

『ねツ？ 私たちも……そうだったのかな？』

『えツ？』

「「「えツ？」」」

だが、最悪なラストが最悪な展開で実現されてしまう。

聞き捨てならないセリフを聞いて動きを止める四人が画面を注視すると。

『また会おうね!! ……………サーバル』

「おい」

と銀時が呟く。

「…………やめろ。やめろ。やめろ！」

『うん。約束だよ。かばん“ちゃん”』

そして流れるOP。

ズガン!! テレビの脳天に木刀が叩きつけられ、テレビが上からグシャリと凹む。

そして、画面が止まり今まで最後の希望を願っていた四人は壊れたテレビを見下ろしながらついに、

桂が怒りを爆発させ、

「こんな悪意ある作品みたことねエエエエエエエエエエエエエエエエエ!!」

新八が涙し、

「もういやだアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

近藤が嘆き苦しむ。

銀時が顔面中に青筋を浮かべまくりながらダムが決壊したように語りだす。

「そうかそうかそうかそうかアアアアア!!　そこまで1期を好きになった連中に喧嘩を売りたいのか2は!!　よほど俺らの怒りを買いたいらしいなおい!!　なら受けてやろうじゃねエかコノヤロオオオオオ!!」

「もう擁護なんて絶対してやらねエエエ!!」

と新八は全身の毛が逆立つかと思えるほどの怒りを露にする。

「上等だよ!!　よほど僕らに罵詈雑言浴びせられたいらしいなおい!!　批判をもらいたいらしいな!!　嬉しいかコノヤロオオオオオ!!」

続けて桂も感情を爆発させる。

「2と名のついた本家本元が!!　1期の内容を否定するだけに飽き足らずここまで無情な描写を描けるとは悪意ここに極まれり!!　アニメと言うジャンルでここまで失望させられ怒りを感じたのは生まれて始めてだ!!　まさか救いであつた1期すらまともに

正視できんほどに汚物に塗れさせられるとは思わなかったぞ!!」

近藤は頭を抱えて涙を流しながら天に向かつて嘆きを発する。

「なぜだアアアアア!! なぜ素人ではなくプロの作家の手によつて生まれた作品がここまで視聴者を傷つけられる!! いやプロだからか!? そもそもそこまで2は憎いのか!! そこまで1期もそのファンも2は憎いと言うのかアアアアアアアアアアアアアアア!!」

四者共に怒りと悲しみを織り交ぜた言葉を爆発させ、呪詛の念を発し始める。

「そつちがその気ならやつてやるツ!! 2が俺らにそこまで喧嘩売りたいなら買ってやらア!! おら批判開始じやアアアアアアアア!!」

銀時の宣言を皮切りに批判と言う罵詈雑言が始まる。

まず先陣を切るのは志村新八。

「チクシヨオオオオ!! さつきは見逃したけど言つてやるぞオラアアア!! キュルルのあのセリフはなんだ!!」

『ここにいるみんな、それに僕も仲間ですよ』

「——つてどの面下げて言つてんだコラアアアアア!! お前はイエイヌちゃんにした仕打ちを忘れたのかおい!! そもそもリヨコウバトさんはほとんどフレンズと初対面なのに仲間もクソもないんじやボケエエエエエ!! そしてリヨコウバトさんは仲

間に拘る描写ほとんどなかっただろうが唐突過ぎんだよ!! そんなでキュルル!! おめエなんて仲間じゃねエエエエエ!!」

次に怒りを吐き出すのは近藤だ。

「そもそもなんだあの設定は!! 『セルリアンの強さは人の思い入れの強さで変化する』ってどこの情報なんだ!! まったくそんな研究してなかったぞ!! そもそもセルリアンはコピーしたフレンズと同等の力持つ設定はどこいった!! なんだこのアニメは!! 一体何を信用すればいいんだ!!」

「全部ワンパンだからわかるわきゃねエんだよんなもん!!」

とここで銀時が割り込む。

「そして一番納得できんのがキュルルのフレンズたちに対する思い入れのなさってことだけだ!! だってセルリアン全部雑魚じゃねエか!! サーカーセルリアンも結局ワンパンされる雑魚だったしな!!」

「その通りだ銀時イイイ!!」

桂がここぞとばかりに吠える。

「キュルルはフレンズのことなどまツツツツたく大好きでもなんでもなかったのだアアアアア!! 奴の心の奥底には友達なんぞ一人もいなかったことが証明されたぞ!! なにせ思いの強さがまったくないんだからな!! せいぜい友達が居たといして

もサーバルとカラカルくらいなもんだ!! それすら雑魚であったがな!!」

「サーカラの戦闘力も変動し過ぎなんだよ!!」と銀時。「ざけんな!! 最初から本気出して戦いやがれ!! どんだけ舐めプすりや気が済むんだテメエら!!」

「そして一番許せないのがビーストの扱いですよ!!」

とやりきれない思いを震わせるように握った拳を震わせる。

「アレほんとなんなんですか!! 和解したかと思つたら無差別に襲つてくるし!! かつ言つてキュルルは襲わねえし!!」

「そして一番の問題は最後の扱いだ!!」

銀時はこれでもかと怒りをぶちまける。

「俺的には1期を雑に扱い思い出をぶち壊した以上にアムールの扱いが許せねえエエ!! セルリアン掃討のMAP兵器に利用した挙句の果てには瓦礫の下敷きにしゃがんでエエエ!! そんなんであいづらなんも気にしねえんだ!! せめて声くらい掛けるや!! ヘラヘラすんなフレンズ共!! 瓦礫の上でライブすんな!! フレンズをサイコパスにすんじやねえエエエ!! そんな『分かり合いたい』とかほざいてたキュルルが一番最悪な扱いしてんじやねえか!! キュルルお前が一番そこを悲しめよ!! あいつマジでアムールトラをただの特攻兵器扱いしやがった!! そんな用がなくなつたらさよならポイか!! けものフレンズがしちやならねえことまたやりやがった!! 主

人公はマジで外道じゃねエか!!」

「待つのだ万事屋!!」

とここで近藤が待ったをかける。

「1期OPが流れた時まではまだ時間があつた!! もしかしたら、もしかしたら!! キュルルがアムールちゃんのことを悲しむシーンがあつたかもしれない!!」

「お前はアレの続き見るつもりかアアアア!! 『のけものいない』っていう1期のテーマの一つに全力で反逆し、俺たちが好きだったOPまで汚されたアレの続きをマジで見るともりなのかテメエエエ!!」

「俺だつてツライさんなのだ!! もう辛くて辛くてしょうがないのだ!!」

と近藤は涙を流しながら説得をする。

「だが最後の最後まで見ずして批判するのは俺たちの信念に反するのだ!! そこだけは曲げてはいかんのだ!!」

「アライさん口調止めて!! 違和感半端ないから!!」と新八。

「うっしやおらアアアア!!」

銀時はヤケクソムーブする。

「新八イイイイ!! テレビの用意するぞオオオオ!!」

「はイイイイ!! もううちのテレビ何台目的だみたいなツツコミなど置き去り、新し

いの用意しましょう!!」

そんなこんなで銀時と新八が持って来た新たなテレビを使ってエンディングの続きを見始める。

しかし、最後の最後までアムールトラに対する言及などなく『俺たちの旅はこれからだエンド』のままスタッフロールが流れ出す。

「あいつアムールのこと忘れやがったアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

銀時は天に向かって吠え、

「あの悪魔がアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
!!」

桂は畳を力の限り殴り付け、

「もういやだこの主人公オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

近藤は髪をかき乱しながら天に向かって泣き叫ぶ。

最後の最後まで胸糞要素満載の内容にスタッフロールを流しながら怒りの爆発を続ける銀時。

「カーツペツ!!」

と唾をテレビ画面に吐き出す銀時はそのまま吠え散らかす。

「あんのやろオオオオオオオオオオオ!! あいつの中には友達を思いやる感情も大好

きと思う感情もありやしねエエエエ!! あるのはただただ悪意だけじゃねエか!!
イエイヌとアムールのけものにして仲間だの大好きだの分かり合いたいだのよく
まあ薄っぺらいセリフ堂々と言えるもんだな!! 吐き気がする!!」

「ここまでクソツタレで邪悪な主人公と物語を俺ははまだかつて見た事がない!!」
と桂が言つた事に対して銀時はビシツと指を指す。

「それだアアアア!! これ間違ひなく悪意込められてやがる!! けものフレンズ2は
悪意を念入りに込めた呪詛だったんだ!! そんなんじやなきやこんな汚物結晶体がで
きるはずがねエエエ!!」

「やはりそうかアアアア!! どうりでおかしいと思つた!! そもそも前提が間違つて
いたのだ!! これは悪意が形になった物だったのだな!!」

「待つのだ二人共オオオ!! そのような邪推はいかん!! 一旦冷静になるんだ!!」

ヒートアップする二人とは対照的に近藤が慌てて待つたをかける。

だが銀時の怒りはまったく収まらない。

「おめエは2の全話を見てまだ優しい心を保てんのか!! 凄いなおい!! でも俺は無理
だツ!! 今までの話を考えてみたら怒りしか湧かねえ!! 1期を評価していた俺に
2は何をしたか考えたらむかつ腹で気が変になる!! そもそも1期最終回の続きじゃ
ねエつてだけなら期待した味と違つた程度で許せたんだよ!!」

「だがな!!」

と怒りの止まらない桂も怒涛の愚痴を爆発させる。

「6話で1期好きの我々の思い出に泥を塗ったのだぞ!! 例えるならそう!! 好きな店で好きだった牛丼の味を思い出したらいきなりその店の料理人が牛丼の思い出を泥味にしたような物だ!!」

「ツラの例えは回りくどいがその通りだ!!」

「ツラじゃない桂だ!!」

「そんで9話は何した!!」

と銀時はより強く言葉を吐き出す。

「ハンバーグ食ってたらいきなりゲロぶっかけられたんだぞ!!」

「11話に至ってはハンバーグが出るかと思っただけで待って見たらまさかの水が出てきよった!! だが12話を見た今ならこれでも許せたほどだ!!」

「そして12話に至ってはもうこの表現ですら足りねエが、ウ○コだ!! ウン○出された挙句にゲロをトッピングしてきやがったんだ!! んなもん口にすら入れられるどころか直視する事すら困難になる領域だぞ!! そしてとどめと言わんばかり昔の美味かったハンバーグまでウ○コ塗れにしやがった!!」

「近藤オオオ!! こゝまでされてもまだ貴様には優しい心が残っているのだとしたら、

お前は関わるんじゃない!! 怒りが伝染する前に避難するんだ!! 俺はとてもアレを見て怒らずに口を閉ざす事が出来ん!! 俺の怒りはとうに天元突破だ!! お前を気遣うほどの余裕すらなくなってきた!! このままではお前の言葉にまで反論しか述べられなくなる!! だがお前まで付き合う必要はない!! 怒りに支配される前に逃げろだ!!」

「だ、だがしかしだ!!」

と近藤はなおも食い下がる。

「二次創作ならこれよりもつと悪意ある作品はある……はずかもしれない!! そう思えばいくらか気持ちも——!!」

「無理に決まってるんだろ!! これ公式だぞ!!」と銀時。

「近藤、考えてみろ!!」

とここで桂が熱く説明を始める。

「二次創作を別の料理店と考え、公式は我々が一度通っていた好きな料理店であると!!」

別の料理店が好き勝手に何をしよう和我々は気にも留めはせん!!」

「だけどな!!」

と銀時が続く。

「食いに来た店が好き勝手やった拳句に提供されたモンがウ○コとゲロだったらお前ど

う思う!! 味が違う程度なら許せても排泄物提供されて許せると思ってるのか!! 店潰そうとしてるか悪意あるようにしか思えねエよ!! 1期好きになった俺はこの感覚だぞ!!」

「同じくだ!! ファンである俺なんかはもう悲しくて涙しかでん!!」

桂は血涙を流しながら熱く拳を握りしめている。

近藤は言い淀んでしまっていたが、すぐさま言葉を震わせながらも言い放つ。

「も、もしかしたら2はう、ウン〇とゲロを料理と思つて提供したのかもしれない!!」

「いやそれもどうなんだ!」と銀時はツツコム。

「近藤さん……」

するとここで感情がまったく籠つてない声を出し、近藤の名を呼ぶのは新八。

新八は今まで話に入つて来ず、ずっとスタッフロールが流れるエンディングを注視していた。

テレビから後ろに振り返る新八は色素の消えた瞳で告げる。

「コレ……たぶん最悪の悪意盛り込まれてる可能性ありますよ……」

*

四人がテレビに嘯り付くようにくっ付きながら映像は巻き戻り、スタッフロールの終わりから始まる。

イエイヌが画面へと移り込む。

暗い部屋で手紙の束を眺めるイエイヌの姿が銀時の目に映り込む。

「ツツツ!!」

イエイヌの孤独のシーンを見てあまりの胸糞にか銀時と桂が思わず画面を殴り付けようとするのを近藤が慌てて二人の腕を抑えて止めに入る。

すると新八がチラリと銀時へと視線を向ける。

「銀さん桂さん我慢してください。問題のシーンがもうすぐありますから」

そして場面は移り変わり、イエイヌが折りたたまれた用紙を広げればある一枚の絵が映り込む。

『素敵な絵……』

そして最後に映るのは笑顔のサーバル、カラカル、キュルル。

「ぬおおおおおおおとおおとおおツ!!」

もう我慢の限界とばかりに近藤の抑えを振り払って銀時と桂が拳を振りかぶるが、

「待ってください!!お二人共!! 問題はこの絵なんですよ!!」

声を強くして新八が銀時の拳を止め、すぐさま映像が少し巻き戻り、キュルルが書いたであろうスケッチの絵を一時停止で見せる。

拳を握りしめキレル銀時と桂。

「なんだその落書きはア!!」

「あのクソ主人公が書いたその意図が意味不明な絵がなんだと言うんだア!!」

二人の質問に新八は感情の籠らない声で説明する。

「コレ、映ってるのは右端の女性つてたぶんミライさんです」

「ああん!? だから!？」と銀時。

「思い出してください1期を!!」

桂が血涙を流しながら怒りを露にする。

「1期の思い出滅茶苦茶にされたのに思い出せと言うのか!! お主まで外道になったか

!!」

新八に必死に説明する。

「違います!! この人つてジャパリパークが崩壊する前のパークの職員してた人らしい

設定が1期にはあつたじゃないですか!!」

「ああいたな!! 確か!!」と銀時は同意を示す。

「そしてかばんちゃんは崩壊したパークに現れたヒトのフレンズです。でもこの絵だと

一緒に笑い合うサーバルにカラカルはパーク崩壊前からキュルルと一緒にだった。これ

見て何か思いませんか?」

「そんなアレだろ!! サーバルはかばんと会う前からキュルルとともだ……ち……」

ようやくあることに気付いた銀時はだんだんと声の張りと言葉尻が弱くなって顔を青くさせ始める。

桂も気づいてか顔を蒼白にさせる。

「ば、バカな……!!? これが続編のすることだと言うのか……!!」

近藤は察せず状況が分からないのか、困惑の声を漏らす。

「えッ? なに? ど、どういうこと?」

銀時は頬を引くつかせながら震える声で話し出す。

「ゴリラ……思い出してみる……。サーバルが2期で受けた仕打ちを……」

銀時の言葉を受け、近藤は顎に指を当てながら答え始める。

「思い出したくもないが……まずはかばんちゃん記憶を消され、いつの間にか別れさせられた後だったな……。まさに最初の悲しみ要素だったと言えよう……。そしてアレだな、IQが上下したりキャラがおかしかったりとか——」

「IQが上下したりとかキャラがおかしいなんて事はどうでもいいんだよ。問題はかばんとサーバルの関係性だ」

と銀時が近藤の言葉を遮るので、ゴリラ顔の男はまた不思議そうに首を傾げる。

「お前らは一体何に気付いたんだ?」

怪訝そうに眉間に皺を寄せる近藤の言葉を聞いて銀時は震える声のまま話し続ける。

「いいか？ コレマジで気付いたらむかつ腹立つとか胸糞とかそんなレベルじゃねえから覚悟しとけよ？」

と言つて銀時は一息入れてから説明を始める。

「まずよ、2期でサーバルの記憶が消えた様子があんだよ。んで、パーク崩壊前の事とかたぶん忘れてるはずだ。するとだ。絵で分かる通りお友達だったキュルル様の事も忘れてんだよ」

「ふむふむ」

と近藤は頷き続くように桂が血涙を流しながら説明する。

「そして……あの絵の通りの解釈なら……かばんちゃんはキュルルより“後”にサーバルと友達になったのであり……キュルルからサーバルを奪ったキャラと言う扱いになるのだ……」

「……………はッ？」

説明を聞いて近藤はポカーンとした顔になるが、銀時はそのまま解説する。

「そして2期はなににしたと思う？ 1期のサーバルからかばんの記憶を奪つてキュルルのお供にした挙句、思い出したか思い出さなかったわかんねエ演出入れた上でキュルルの奴を選ぶつう最低最悪のシーンを見せてくれたんだよ。つまりな、最後の絵の通りなら昔の友達たるキュルルをサーバルは選びましたってことなんだよ。そっちの方

が絆が上ってことにしたんだよ。友達に優劣付けさせたんだぞ」

「そんな内容をけものフレンズで……だぞ……!!」

桂は頭を垂れて唇を噛み締め、血涙を流し続ける。

「サーバルちゃんの涙を見せたシーンはマジで吐き気催しレベルで邪悪な演出なんですよアレ」

と割と冷静な新八が補足し、銀時が更に説明する。

「思い出したか思い出さなかった。それはどっちにしても最悪だ。思い出していたらサーバルは思い出しても尚キュルルを選び、思い出してなかったら心の奥底でサーバル泣かせながらキュルル選ばせたんだからな」

「つまりサーバルちゃんとキュルルの友情にはかばんちゃんは勝てないって意味になるんですよアレ。フレンズが友達を選んで片方は捨てるっていう最低最悪な解釈になるんですよアレ」

近藤もようやく意味を理解したのか目を陰で覆い尽くす。

銀時は近藤の様子に気付きながらも説明を続ける。

「そして最悪な事にな、どこもかしこも雑でまったく描写不足でぶん投げの癖して、キュルルがサーバルをかばんから取り戻すって描写は12話かけてちゃんと描写してやがんだよこのアニメ。しかも知ってから知らずか1期の要素をことごとくぶち壊すおま

け付だ」

「つまり2期はですね、12話かけてかばんちゃんとサーバルちゃんの仲を引き裂いて2期の主人公たるキュルルとサーバルの仲を完全復活させ、挙句は1期をこれでもかと完全否定して蔑ろにした悪意にまみれた最低最悪の作品って事なんですよ」

「挙句の果てにはサーバル、カラカル、キュルルのトリオが王道であり正史つてことで……」

「僕らが待ち望んだかばんちゃんとサーバルちゃんとボスの三人による旅は邪道であり外伝……つまりこの先は一生見られないって突き付けられたんです……」

「よくもまあご丁寧に1期勢にとつちや最低最悪なモンを続編で見せてくれたもんだよ……。最後の絵がなきや、なんもかんも描写が雑で済んだんだけどなア……」

銀時は目を右手で覆いながらククククと不気味に笑う。

「けものフレンズ2はよつぽど1期が嫌いらしいなあ……。嫌いで嫌いでたまらないらしいなあ……」

近藤と桂も目を陰で覆い、腕をぶらりとさせながら幽鬼のように立ち上がる。

新八は立ち上がり、俯き、銀時たちに背中を向けながら声を掛けてくる。

「銀さん……これは個人的解釈なんで制作側に悪意があるかどうかは断定できません。そもそもしちやダメです。でも、僕は2を全体的に見て解釈したらもう悪意があるへい

ト創作にしか見えなくなりました……。製作陣が意図してあるうがなかるうが、もうこの作品は僕の中では1期全否定作品になっちゃってます……。製作の意図しない方向で暴走した作品って結論にします……」

「ああ……逆に頭が冷えた」

と言つて銀時は軽く首を縦に何度も振る。

「俺も悪意あるとは言ったが、さすがにそこまで邪推して決めつけるのは止めだ。だが……2の存在だけは意図せずだろうがなかるうが1期全否定の内容になっているって事だけは譲るつもりはねエ……」

「なら……どうします?」

「けものフレンズ2にどんな思いが込められているかは知らねエが、俺たちが内容を見て1期が嫌いでも憎くて消し去りたいって受け取っちゃったんだ。なによりそんなモンにしか見えないモンに散々怒らせられ、傷つけられたしな」

銀時は右手で目を覆う。

「なら、俺たちもこの怒りを作品に“のみ”にぶつける。製作だとか公式だとかもうどうでもいい。悪意断定とかメンドーな事はネットの連中に任せる。だがこの作品だけは許しておけねエ。俺はこのスタンスで行く。この気持ちに決着を……付ける為にもな……」

指の隙間から見える銀時の眼光はまさに——鬼だった。

『おまけ（アプリ版について）』

銀時はある行動をするべくここ数日は色々と行動に移していた。

そんな時、銀時は新八に呼び出され志村邸に向かい、新八の部屋へと赴いていた。

「おい、新八。なんか用か？ またのけものがなんかやらかしたのか？」

「いえ、新しい胸糞はなかったんですけど……ちよつとネットである意見を目にしました」

「ある意見？」

銀時が肩眉を上げ新八は「はい」と頷く。

「けものフレンズアプリ版でご存知ですか？」

「アプリ版？　なんだそりゃ？」

「もう配信が終わったソーシャルゲームなんですけど、ネットのコメントで1期はアプリの世界を破壊したから1期も悪いって意見があったんです」

「へー、そうなのか？　つまりアプリ好きな連中は1期当時の今の俺たちと同じ気持ちってことか？」

と銀時が首を軽く縦に振る。

「いや、それがそういうワケでもなくて……」

「えッ?」

「なんでも調べてみたらアプリ版とアニメって基本的には地続きじゃなくて別世界線って感じらしいです。そもそもアニメがパークが閉園した世界をベースにアプリと並行して作られた内容なんですって」

「へ〜……なるほどな」

と銀時は顎を撫で、新八は説明を続ける。

「つで、アプリはアニメが始まる前に終わっちゃったみたいです。終わった後に放映されたアニメが荒廃された世界だったんで、アプリの続きがアニメでありパークぶつ潰したて解釈が生まれちゃったんじゃないかと……」

「じゃあ、俺たちと同じ気持ちってワケにはいかねえな。1期好きは過去も未来も使って否定されたワケだしな。そもそもものけものは1期の正当な続編だしな」

「つで、僕も内容がちよっと気になったんで、ストーリー解説の動画あったから見てみたんです」

「へ〜……んで?」

「いかりがこみあげました」

「へッ?」

銀時は呆けた声を出し、新八が歯を食いしばりながら拳をわなわなと震わせる。

銀時は尋常ねエな……、と思つてから冷静に新八へと問いかける。

「ちなみに怒りの原因はアプリか？」

新八は首を横に振り、銀時は一番最悪な予想を問いかける。

「じゃあ、2か？」

新八は大きくブン!! と頭を縦に振る。

「やっぱりか……」

銀時はため息を吐き、新八は話す。

「でもだからって動画は見なくていいです。余計に怒りが爆発するんで」

すると銀時はため息を吐き、新八の肩をぽんぽんと叩きながら少し優しい気に話しかける。

「我慢して溜め込むな。俺もその動画見てやるから。そんで怒る要素あつたなら俺も一緒に怒つてやる。うちに溜め込むな」

「止めてください！ 銀さんこれ以上怒つたらホントに体に悪いですよ！」

「もうその段階はとうに超えた。他の奴はともかく、知つた俺だけでもせめておめエの怒りを分かつてやるから。なッ？ お前だつてうちに溜め込めきれなくて俺に教えにきたんだろ？」

「いや、1期好きの僕らの怒りは正当なモノだって主張したかっただけなんですけど……」

「とにかく！ 気になったから見せる！ もう何が来ても別に構わねエから！」
「わ、分かりました……！」

銀時の庄に押されて新八はパソコンを弄り、件の動画を見せる。

銀時は座布団に座りながら動画を眺め、感心する。

「へ〜……1期って結構アプリ版をリスペクトしてんじゃねエか。2期とはえらい違いだな」

「えエ……だから余計に1期が凄くなって思っちゃったワケで……」

「とは言え、結構良い物語だし、アプリ勢が1期の話を見たら怒んのも分からなくはねエな……」

「そこはアプリ版とアニメは別物って事だからちゃんと配慮はされていると思うんですよ。ただ、アプリ終了をパーク荒廃で表現したってコメントを見た時はなるほど、と思いましたね」

「そういう解釈する奴いるのか。中々斬新だな、それ」

新八の説明を聞いて銀時が感心していると動画に映ったある存在に目が向く。

「セーバル……ねエ……」

銀時がセーバル——つまりサーバルそっくりのフレンズ型のセルリアンの話を見始める。

「ああ……なるほど……。コイツがぱっつあんが怒っていた理由だな？ 2にもいたしな、同じよう奴」

「はい……」

新八が力なく頷き、銀時はついにセーバルがフレンズとなつてセルリアンの女王を倒す話まで見終える。

「セーバルとの友情……いいじゃん。女王すら消滅させず見逃してんじゃん。良いじゃん。優しい世界じゃん」

そして銀時はゆっくりと振り向き、パソコンに背を向けて新八へと顔を向ける。

「なるほど……セーバル……なるほど……」

銀時と新八はお互いに頷き、

「あのアニメマジでふざけんなアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」
畳に向かって思いっきり鉄拳を振りかざす。

銀時と新八はガンガン!!と畳を殴り続ける。

「チクシヨーチクシヨーチクシヨーチクシヨーチクシヨーチクシヨオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」
2はアプリ版サーバルとセーバルの友情にまで泥塗つてんじゃねエか!!」

「2は一体どこにリスペクトがあるんだアアアアアアアアアアアア!!」

「マジでふざけんなよ!! マジでふざけんなツ!! 端折った説明と話でもセーバルとサーバルの友情で感動しちまったのに2のフレンズ型セルリアンをワンパン無双してるとこ思い出しちまったせいで感動から怒りに変動しちまったじゃねエか!! あのアニメどんだけ他の要素ぶち壊しにきてんだよ!!」

「別世界線と分かった上でも怒り感じるってホントになんなのあのアニメ!! アプリ版の内容知って良かったと思う気持ちすら踏み弄られた!! 良かった要素を知りたくなかったって思わせるアニメなんていまだかつて見た事ねエよ!!」

銀時と新八は怒りを吐露しながら勢いよく立ち上がる。

「新八イイイイ!! これは誰にも教えんな!! これ以上の被害者を増やすのはマジイ!!」

「はイイイ!! 僕らの心の中にしまっておきましょう!!」

「行くぞおらアアアアア!! あののけものと最後の決着を付けにいくぞオオオオオ!!」

「覚悟しろよけものフレンズ2ウウウウウウウウ!!」

銀時と新八は気合も新たに行動を開始するのだった。

最終回：怒りの先 前編

1か月が過ぎた。

場所は代わり、万事屋のリビング。

「ツライさんなのだ……アル」

ソファに体を力なくダラリと預け、天井を虚ろな目で見る神楽。

テーブルの向かいのソファでは新八と銀時が並んで虚ろな神楽を見ている。

神楽は力ない声で呟くように独白する。

「のけものブレンド2……全話見たネ……。やっぱり記憶から消せなかつたから……。気になつたから……」

神楽は色のない瞳を銀時と新八へと向ける。

「アレ見て何が一番許せないと思うアルか……？」

「かばんちゃんとサーバルちゃんの扱い？」

「全部だろ」

と銀時と新八が答えると神楽は虚ろな瞳をテーブルへと向ける。

「それもあるけど、一番許せないのはイエイヌの扱いネ……」

「神楽ちゃん……定春のこと考えたんだね……。そりゃ、許せないよね……」

と新八が言うのと、神楽は「うん……」と力なく返事をする。

ちなみにけものフレンズ2を見た後の神楽は1週間近く定春に付きっ切りで傍にくっ付いていたらしく、逆に定春に嫌がられるレベルだったそうなの。

神楽はボーっと天井を眺める。

「定春が居る身として、マジであのアニメには吐き気がした……」

「まあ、吐いたしな……」と銀時。

「犬と家族どころか友達になれないどころか献身に鞭打つアニメにフレンズを名乗られたくないアル……。マジで改名しろヨ……」

「そ、そうだね……。アレはあんまりにもあんまりだよ……」

新八はあまりの負のオーラに怖がって冷や汗を流しながら心から同意する。

神楽はどす黒いオーラを放ち続ける。

「ただただ不快ネ……。3話も使ってフォロワーもせずイエイヌの孤独描写して……。なにがしたかったアルか……。あのアニメ？　ただ単に設定を視聴者に見せる装置アルか？

マジで犬の飼い主に喧嘩売ってんナ……」

「ネット視聴者に『脚本なにも考えてない』と散々言わせるだけあるよな」と銀時。

「そもそもアレ見て私らにどうしろと？　飼い犬大事にしろと？　アニメは大事にして

ないのにな？ 何もできない視聴者に問題だけ見せてイエイヌ放置ってなにがしたいアルかこのアニメ。まずはお前らがイエイヌ救済してお手本みせろヨ」

神楽の言葉を聞いて新八は虚しそうに頭を垂れる。

「ホントにそれ……。アレホントに救いようがない……。伏線回収しても話の核心に触れないのも謎が一つも解けないのもホントに救いようがない……。」

「家族が傷ついたら心配するし、怒るし、泣くのが普通ネ……。飼い主の責任すら描けないアニメにイエイヌを描く資格はないネ……」

「キュルル飼い主じゃねエだろ」

と銀時はバツサリ切り捨てる。

「イエイヌを再び孤独に突き落としたただの外道だろ」

「キュルルなんてクソはどうでもいいネ。問題はイエイヌの元の飼い主アル。そいつはイエイヌ放置と言うけものフレンズと言うアニメにあるまじき行為したネ」

「ホントそれホントそれな」と銀時は頷く。「飼い主の生死がどうだろうとイエイヌに対するあのアニメの扱いはマジで最低最悪の部類に入る。ましてやけものフレンズって題名のアニメでやつちゃダメなこと連発し過ぎなんだよホント」

「ただ単に念入りに犬の飼い主を怒らせただけですよね、アレ……」

と新八は呆れた声で呟く。

神楽はぐるりと体を半回転させて銀時と新八に背中を向ける。

「私にとつてアレはただの虐待アニメネ。マジで胸糞悪いアル」

神楽はそのまま何も喋る事はなかった。

*

場面は代わり真選組屯所の居間の一つ。

そこでは近藤が座椅子に背中を預けながらポーつと縁側から見える庭を見ていた。

その様子を廊下側の障子の隙間から見ていたのは武装警察真選組鬼の副長と名高い

——土方十四郎。

彼はとりあえず、ここ最近の近藤の様子を眺めていたのだが、とにかく心ここにあら
ずが続いていて口数も少ない。

もうとにかくどっかおかしいのは見て明らかなので、ため息を吐きながら決心を固め
る。襖を空け、近藤へと対面するようにテーブルを挟んで座布団に胡坐をかく土方。

土方はタバコの煙を口から吐いてから、咳払いをしてから近藤へと恐る恐る声を掛
ける。

「あ、ああ……ここ、近藤さん。ど、どうしたんだ？　そ、その……まるで魂が抜けちまっ
たみたいによ……。す、少しくらいは愚痴……聞かせ？」

「……2だ」

「いや止めんなよ!! 話進まねエだろ!!」

「俺はお前まで傷ついて怒りの化身になってほしくないんだアアアアアア!!」

「わかった!! わかった!! 2だけ見る!! 2だけ見るから!!」

「もしくは1だけ見るんだ!! 2には触れるな!! 一切触れるな!! そうすればたのしー! 気持ちで過ごしていける!!」

「だからそれじゃ意味ねエだろうが!! 話が進まねエし!! とにかく2だけ見て戻って来るから!!」

そんなこんなで時間は経過する……。

「近藤さん……」

と土方が居間へと戻って来る。すると抜け殻状態だった近藤はすぐさま我を取り戻し、土方へと駆け寄る。

「と、トシ!! 見たのか!! 2だけ見たのか!?!」

「ああ、見た。2だけな」

そう言つて土方は懐から手帳を取り出して開き、そして口からタバコを離して言う。

「それで感想なんだが……ありやなんだ? マジで意味不明なんだが?」

「そ、そうなの!?!」

「いや、最初こそはまあまあどんな話かは分かつてきたんだ。んで、6話ではなんか良く

わかんないかばんて研究者がサーバルと知り合いくらいしか分かんなかった。9話はまあ、気付いたが、ありや胸糞だな。描写不足でああなるなら一種の奇跡だ」

「そ、それで最終話まで感想は？」

「面白くねエと雑過ぎるの一言に尽きる。いや、1話の亀裂のシーンがマジで苦痛なんだが、他のシーンも面白いんだか面白くないんだか良く分からん。これは俺の感性の問題だから放って置くにしても10話〜12話に掛けての雑さは目に余る。最終回辺りのキュルルのセリフにはマジで呆れたが……、とにかくこのアニメは何をしたいんだか何を伝えたいんだかよくわからんのがマジで問題だ」

そこまで言って土方は一回タバコを吸ってから吐き、言葉を続ける。

「一応は少し見直して回収されてないだろう謎や伏線や気になった点を書き連ねてみたんだが……」

土方が近藤に開いた手帳を見せる。

ざっと土方が謎に思った部分は……。

1. そもそもフレンズってなに？
2. そもそもセルリアンってなに？
3. ジャパリパークってなに？
4. かばんとサーバルの関係は？

5. なんてキュルルが気付いた海底火山にかばんは気付かない？
6. キュルルはなんでかばんにヒトのことも家のことも何も聞かないの？
7. 7話はリレーの終盤の時、キュルルたちがワープしてんだけど？ アレなに？
超能力かなんか？

8. マーゲイのサーバルを見た時の意味深な反応ってなに？

9. なんでファンがアイドルに暴力振るってんの？

10. アルマジロの使った檻はなんで壊れた？

11. キュルルのイエイヌの冷遇の理由のなに？ ロボなの？ 外道なの？ イエ
イヌ嫌い？

12. アライさんとフェネックとカバンの関係って？ 命の恩人でなに？

13. なんでリヨコウバトが自画像要求したらキュルルは集合絵を渡してんの？

頭悪いの？

14. 6話と11話の変な夢の正体ってなに？ キュルルになんか特殊能力あんの

？

15. そもそもなんであの高さから海に落ちたのになんで無傷？ なんでスケッチ

ブックどころかどこも濡れてないの？

16. なんでイルカとアシカはご褒美要求しない？

17. フウチョウの目的ってなに？

18. キュルルとフレنزズたちって助けに集まるほど絆を深めた描写あったっけ？

19. イエイヌは？ なんで集合してないの？

20. なんであのスピードでフルルが落ちるの？

21. なんで強いコピーセルリアンがワンパンなの？ 強さが同等設定どこいった

？ フレンズ一人で無双できてるぞ？ アルマジロにも負けてんぞ。フェネットクの
チョップで消滅してんぞ。

22. そもそも無双できるのに弱いフレنزズを連れてくる意味は？

23. そもそもコピーセルリアンのほとんど棒立ちで囲ってるだけなの？ 仲良く
なりたいの？

24. リヨコウバトが仲間拘る描写そんなにあつた？

25. リヨコウバトは他のフレنزズと初対面なのに仲間とは？

26. コピーセルリアンの強さって結局何なの？ 思いの強さなの？ コピーした
フレنزズと同等なの？ どっちなの？

27. キュルル今まで誰か積極的に友達になろうとした？ 分かり合おうとした？

遊びを提示しただけでは？

28. そもそもコピーセルリアンの強さが思いの強さなら、キュルルは他のフレنزズ

たちをどうでもいいとしか思っていないの？

29. 大好き？ イエイヌに冷遇しといて？ 本当にロボかなんか？

30. だからフウチョウの目的ってなに？ なにがしたい？

31. ビーストはなんでキュルルを襲わない？

32. なんでサーバルとカラカルは最初から本気出さない？

33. ビーストの上になんで瓦礫が落ちてくるの？ 屋上なのに？

34. ビースト生き埋めなのになんでキュルルも他のフレンズも気にしない？

キュルル好きとか分かりあいとか言ったのはうそ？ やっぱロボなの？ 外道なの？

？

35. だからサーバルとかぼんの関係は？

36. 火山はどうした？

37. 船のセルリアンは？

38. ビーストが生き埋めの上でライブってなに？ 正気？ 俺警察だけ取り締

まるよ？

39. そもそもキュルルってなんなの？

40. のけもの約二人くらいいたけどそこそこどうなの？

41. 9話のサーバルの目が光った意味は？ なんでビースト追い払えた？

42. 最後の絵の意味は？

「多い多い多い多い多い多い多い多い多い多い多い!!」

と近藤は上げられる謎の数々に顔を青ざめる。

近藤の様子を眺めながら土方は問いかける。

「俺の私見も入っているが、気になったシーンに回収されない伏線に説明されない描写に謎はこれだけあった」

「俺でも忘れてる伏線と謎と気付かない描写不足があるぞ!! お前よく気付いたな!」

「いやぶっちゃけつまんねエから謎とか描写不足とか露骨な伏線がとにかく目に付いてな。そもそもこれ、1期を見ると全部分かったりするのかな……?」

「……………」

土方の問いを聞いて近藤は口を閉ざし、顔を背けながら答える。

「せいぜい分かるのはかばんちゃんとかサーバルの関係とフレンズとジャパリパークの全体像とセルリアンぐらいだろう……」

「えッ? 後は?」

「なにもわからん」

「はッ?」

「ちなみに1期を知ったら2期の謎が増えるぞ」

「はアアアアッ!？」

口をあんどぐり開けて驚く土方。だがすぐさま土方は真顔となり。

「なあ……これって……マジでプロが作ったの?」

「……………うん」

「自主製作アニメじゃなくて?」

「……………うん」

「そもそもこんだけ回収しきれてない伏線や謎があつて続編発表すらないって一つの作品としてヤバくないか?」

「……………うん」

「こんな雑なモンに金払う?」

「……………ううん」

「アニメ業界やベエな……」

と土方が呟き、顎に指を当ててからため息を吐き、首を何回か縦に振る。

「まあ……そのオ……なんだ。でも良かったんじゃねエ……の? かわいいフレんズはいっぱい出て来たんだし。物語として破綻しまくりでも。そう言うかわいい女子キャラで楽しむアニメなんていっぱい——」

「トシ。無理してフォロワーしないでいい……」

と近藤は首を横に振りながら真剣に告げる。

「トツシーと言うアニメオタクの怨霊を理解したお前になら分かるはずだ。可愛い女の子が出てくるアニメを俺が求めているならば、今期やっていたかぐや様だってわたてんだって五等分だって、それこそ大人気だったごちうさだってなんならプリキュアだって……アニメじゃなくても良いならギャルゲーだって良い筈だ」

「詳しいなおい……」

「フツ……2が過酷過ぎて癒しを求めにしまった結果さ……」

悟ったような表情でアニメいっぱい見ました宣言をする近藤に土方はなんとも言えない表情を浮かべながら上司の話に耳を傾け続ける。

「だがなんでも良いわけじゃないだろう？　どんなに可愛い女の子を主力としたアニメだってギャルゲーだって必ず各々なにか別の魅力が宿っているはずだ。量産型と揶揄されようが、それぞれにはそれぞれの良さがあると俺は思っている」

「まあ、似たような菓子がどつちが良いかで論争が起こるようなもんだな……。どつちもどつちなんてのは何も知らない傍から見た奴の無責任な言葉って場合もあるからな」
「それはそれとしてだ。今言ったようにけものフレンズもまた、個別の魅力があると俺は言いたいんだ。けものフレンズにはけものフレンズにしかない魅力があったからこそ俺は絶賛し評価し好きになった。だからこそ、続編にもそれを少なからず求めたん

「離せ!! 話進まねエから!! そもそもそれ聞いたら余計に見たくなんだろうが!! 1
期と2期の出来の違いを確認しに行く!! 諦めろ!!」

土方はそのまま近藤の手を振り切って居間をダッシュで出て行く。

「トシイイイイイイイイイイイイイイイイイ!!」

近藤も慌てて追いかけるのだが、土方はある一室に鍵をかけて籠ってしまふ。

「だから見ちやダメなんだってエエエエエエエエエエエエ!! 修羅になっちゃうからアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

近藤がドンドンドンドン!! と扉のドアを叩くが土方に応答はない。たぶんイヤホンか何かをしているのだろう。

「そもそもこんな部屋真選組屯所にあつたっけ!？」

そしてまた時間は経つ……。

「……………」

またしても取返しをつかない事態になる予感を覚えながら近藤は土方が出てくるのを居間で天井を見上げながらポーつと待っていた。

すると、

「待たせたな。近藤さん」

土方が戻ってきた。

近藤は気づき、バツと上半身起き上がらせて恐る恐る土方に問いかける。

「だ……だ、大丈夫かト——！」

「2期マジで史上最悪な出来じゃねエかアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

かんぱつ入れずに叫び、天に向かって叫ぶ。

「1期の最終回まで見たら2期思い出して胸糞になったぞおイイイイイイイイイイイ

!!」

「だから言ったんじやアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

と涙を流しながら叫ぶ近藤であった。

「腹立たしいことこの上ないぞ!! つうか2期はマジなんなん——!!」

*土方くんの怒涛の愚痴が終わるまで少しお待ちください。

最終回：怒りの先 中編

凄まじい勢いで愚痴を吐き出した土方が一旦落ち着きを見せたので近藤は恐る恐る。

「……………落ち着いた……………？」

「まあ……………」

ようやく冷静さを取り戻した土方はタバコを吸いながら精神を整えている。

そして、土方は取り戻した冷静な感情のまま近藤へと語り掛ける。

「……………それで、近藤さん。1期を見た上での俺の忌憚のないけものフレンズ2の評価を言っついていいか？」

「……………うん」

土方はタバコの煙を吐いてから、言葉を発する。

「気持ち悪い。とにかく1期を見てから余計に嫌悪感が増幅する。最終回は特に。それに尽きる」

「まあ、俺もそれは感じてた……………」

「それで、どうして気持ち悪いのかを考えたんだが、俺は数式を持ちいて説明しようと思っう」

「えッ?」

と近藤はポカーンした表情を浮かべ、土方は手帳をテーブルの上に開いて説明を始める。

「まずしもフレ2期は説明されていない部分を数式——まあ、足し算で表現してみるか……」

と言つて土方は、

$$X + Y \parallel 2$$

数式を書いて隣にいる近藤に見せる。

「まあ、こんな感じで表現してみるとしよう」

「トシ……」

「なんだ?」

「これは……どういう意味だ? ヒエラティックテキストか?」

土方はイラついて顔に青筋を浮かべた後、

$$\bigcirc + \square \parallel 2$$

に書き直す。

「これでどうだ?」

「おお! 足し算の穴開け問題か!!」

と勉強がお足りない上司に土方はため息をつきながら話を進める。

「んでだ、まずは2期の前に俺が考えたこの当てはめをけもフレ1期の考察や伏線回収に使ってみる。それでだ、俺が思うに考察するのは与えられた情報をこの穴あけ問題の一つ一つ数字を入れ込んで解を導くもんだと思ってる」

「ふむふむ……それで？」

と近藤は納得しているんだかしていないんだか分からないような反応を見せ、土方はタバコを口に咥えて話しながらメモ帳に数字を記していく。

「まずは……そうだな……。1期の重要部分であるかばんの正体についてだな……」

「まさに目から鱗の感覚だった……」

「まあ、そういう感想とかはいいから。んで、かばんの正体は12話全部見ると後から全部わかる事がちやんと頭にすつと入ってくる」

「そうそう！ アレ凄いいよな！ ただの演出と思ってたサンドスターが——!!」

「……………」

土方はまたブチつと頬に青筋浮かべて睨むので近藤は「つ、続きをお願いします……」と勧める。

「……それでだ。まずかばんの正体がヒトのフレンズだと分かった事を数字の1として穴あけ問題に当てはめる」

1 + □ =

「そしてもう一つの数字としてアライさんの説明を入れる」

1 + 1 =

「そして最後に1話冒頭のサンドスターと言う解が残っている」

1 + 1 = 2

「まさに気持ちいいくらいの伏線回収要素だ。ちゃんと用意された数字と言うパズルのピースが当てはまり視聴者をアツと言わせる。更にはアライさんが帽子を追いかけた理由もかばんが助かった理由も今までにちゃんと察せる説明が入れられてる為に違和感がなく本当に気持ちがいい」

「そうだ！ そうなんだ！ バカな俺でも楽しく見れるアニメでもあるー！」

「ちなみに一話に出て来た普通の動物の謎もちゃんと読者に解が導き出せるように設定が用意されている……」

と言つて土方はまた数式を出す。

「1話の動物……まあなんの動物が知らんがそいつの近くにセルリアンがいた」

1 + ○ + □ =

「そしてセルリアンはフレンズを捕食してサンドスターを奪い、元の姿に戻してしまう情報が開示される」

1 + 1 + □ =

「そして1話の謎の悲鳴……」

1 + 1 + 1 = 3

「開示された情報からあの動物の元はフレンズでありセルリアンに捕食されたという解が導き出せる」

「おお!! そうだったのか!! 知らなかった!! まさに小出しした設定と伏線を12話を使ってふんだんに使っている!!」

近藤驚き、感嘆の声を漏らす。

「まあ、とにかく分かりやすくそして想像しやすいレベルで伏線や設定や情報が張られ考察もしやすく、まさにたのしい現象を起こしているのだと俺は思った。あの内容なら小さいフレンズなら伏線や情報を考えずとも優しいフレンズたちの雰囲気、和やかな雰囲気に分かりやすい問題の解決、更に冒険のお陰でストレスなく見ることが出来る。それに伏線回収にも驚かされるだろうな。それに大きなフレンズなら考察しながら楽しむという要素も与えられているのもまた凄いなと思う点だ」

「トシー！ お前そこまでけもフレを分析したのか!!」

近藤は感嘆の声を漏らし、土方は顎に指を当てる。

「とは言えこれは俺の私見だ。なによりこれが評価や考察として正解とは断言できんが

俺が考えるうる限りでけものフレンズ「1期」に人気があると思った理由だ。ほとんどの描写に世界観としての違和感がなく、俺もたまに頭をカラッポにしながらかえ、そして感情移入できた作品と思った」

「そうだろそうだろ!! そうなんだ!! たのしー! そして好き! と言う思いをこーやって語れるのは本当に俺としても嬉しい!!」

「だが な」

とここで土方の目元に影が差し、近藤が動きを止める。

「けもフレ2はこの12話かけて用意された伏線に情報に描写がマジで酷い」

と土方は嫌悪感を露わにする。そして近藤の表情はどんどん暗くなっていく。

土方は思いを吐露するかの如く激しく喋り始める。

「正当な続編だから1期に与えられた情報を踏まえた上でツツコミとかは我慢して色々情報を当てはめていただけに本当にワケわかんなくなっちゃった!! もう気持ち悪いのレベルなんだよ!! おかげで1期まで純粋に作品が楽しめなくなるレベルだ!! 良いか!?! 行くぞ!!」

土方は手帳に数式を書き殴っていく。

「まずかばんと同じキュルルの正体なんだが、1話で与えられた情報を1とする」

1 + □ =

「んで12話まで使って与えられた情報を踏まえた上であいつの正体を数字として当てはめる」

1+□=

「これでなにを分かってんだッ!!」

土方は机をバンッ!! と叩く。

「1話の冒頭の装置の正体もあいつがフレンズかどうかもわかんねエのに考察ができるかアーツ!!」

「ま、待て! 落ち着くのだトシ! キュルルは自分でヒトと言っていたではないか!」
「あんな人でなしをヒト代表にされたくないんだけど!! そもそも俺にはあいつがフレンズにヒトって言われたからヒトって名乗ってるようにしか見えなかった!! つうかあいつは自分の事がなんにも分かってねエのになんであの世界観で自分がヒトって認識できてんだ!? もうワケわかんねエよ!! 気持ち悪い!!」

「い、言われてみれば……」

近藤は土方の言葉に否応なく納得してしまい、そのまま土方の独自の解説が続く。

「そして一番の問題点であり俺を激怒させた一つである1期のかぼんとサーバルの謎だ
が……二人がバットエンドを迎えた情報を解の100とする」

「えッ? なんで100?」

「そしてフレンズが再フレンズ化したら記憶失くす情報を10とする。そして二人の謎の過去にあったことを踏まえた数式にすると……」

$$10 + 0 + \square + \times + \triangle + \nabla + ? + \$ + \% \parallel 100$$

「いやなにこれエーッ?」

と近藤は謎の数式を見てビククリして顔を青ざめさせる。

「そもそも情報が少な過ぎんだよ!! あのと二人の終着点の過程がどうなったのか全然分かんねエもんだからすっげエもやもやしてイライラして気持ち悪いんだよ!! そもそも解き明かされすらしい要素をわざわざ持つてくんじゃねエよ!!」

「い、いや!! きつとかばんちゃんとサーバルちゃんのアレは考察の楽しみとして考えられなくも——!!」

「つうかそもそもバットエンド考察とかマジで鬱になる要素をけものフレンズで持つてくんじゃねエーよッ!! 荒唐したパークの妄想による殺伐とした考察ならまだしもあの優しいな雰囲気のまま好きになったキャラの不幸をわざわざ考える要素なんてけものフレンズで欲しくねエんだよ!! ドSの総悟くらいだぞこんな喜ぶの!!」

なにも反論できる要素が無いのか近藤は口を閉ざし、土方がどんどん書き殴つていく。

「そしてコピーセルリアンの情報がマジで気持ち悪いの一言だ!! とりあえず、コピー

セルリアンはフレレンズと同等の力を持っているから多くのフレレンズたちを連れて行く
と言う納得の解を用意してくれた!!」

1 + 1 = 2

「う、うん……」

と近藤が頷き、「だがしかし!」と土方は説明を続ける。

「これに強キャラ設定のフレレンズのワンパン無双を加える!」

1 + 1 + 1 = 2

「んんん?」と近藤は困惑。

「破綻した!! なんだアレ!? フレレンズ大集合が思いっきり腑に落ちなくなっちゃった
じゃねエか!! 気持ち悪いことこの上ねエよ!! せめてフレレンズVS偽フレレンズの1
対1で勝っていく描写が有ったら納得でできたのにな!!」

土方は不快を露わにし、両手の指をわなわなと動かす。

「そもそも最終回に至っては色んな要素を散りばめたまま全部投げだされてるもんだか
ら嫌悪感が倍増して余計に脳が混乱して気持ち悪くなる!! なんだコレ!? なにかの
耐久テストか!」

「まあ、さすがに俺も新しい要素を生み出し続けたまま全部投げだすとは思わなんだ

……」

「だがなによりこのアニメで最大最悪の納得考察要素がマイナス部分と言うのもマジでひっでェんだよ!!」

「いや、俺にはほとんどの要素がけものフレন্ズとして破綻しているようにしか見えなかったんだが……」

と近藤が力なく言うのと土方がビシツと指を差して答える。

「まずはキュルルがサイコパスもしくはただの外道つて解だよ!!」

「えッ?」

近藤の解を聞き、少し声を冷静なモノへと戻した土方が数式を書いていく。

「一つ目はキュルルがイエイヌにした冷遇。それにビーストを特攻させた挙句に見捨てておきながらなんの憂いも悲しみも見せないで笑顔を浮かべる姿……」

1+1=1 サイコパスOR外道

「もうこの解しか導き出せん」

「いやいやいやいや!! キュルルがみんな大好きとか分かり合いとか言つてたじゃん!!」

「あれもイエイヌの冷遇とビーストの特攻させて見捨てて悲しまない要素を加えたらもうマジでただのサイコだぞ? アレした上でみんなと分かり合いたいか仲間だとかのたまつて挙句には大好きとかほざいたんだぞ? しかもコピーセルリアンの強さが

思いの強さなら、ワンパン雑魚の他セルリアンから考えてあいつの大好きは真つ赤な嘘なんだぞ？ それ見てサイコか外道以外のなんだと思えと？」

「……………ごめん……………無理……………」

近藤は呆れたと言う感情を表すように頭をガツクリと落とす。

土方はタバコを一息吸ってから灰皿を使って火を消し、すぐに新しいタバコを一本出して火を付け吸い、煙を吐く。

「そしてこれがそもそも一番の胸糞な解なんだが……………このくそフレ2つてのは要は1期を否定する為に作られたと推理できるような作りになっちまつてる」

「そう……………思う……………？」

「最後の絵がマジで意味不明だな。だがよくよく思い出してミライの事を考えたら腑に落ちた。ミライはパークが崩壊する前に働いていた職員だろう？ そしてパークを崩壊する前はキュルルとサーバルとカラカルの三人が仲良しで描かれている」

「うツ……………」

近藤は苦虫を噛み潰したような顔となり、土方はタバコの煙を深く吸ってからペンを動かす。

「つまりだ。サーバルがかばんの記憶を失くし……………」

「挙句は思い出したのかどうかもわからずにお別れしてキュルルの元に戻る……」

1＋1＋1

「そしてあの絵からキュルルとサーバルとカラカルが三人は昔から仲良しのお友達だったと言う情報……」

1＋1＋1＝

「そしてキュルルは見事サーバルとの仲を取り戻したと言う情報……」

1＋1＋1＋1＝

「これだけ揃った情報から2期に隠されたテーマはもう……わかるよな」

土方は近藤へとペンを渡す。

「サーバルとかばんちゃんとボスの旅を主軸とした1期の完全否定……」

1＋1＋1＋1＝死

「……………」

提示された情報で導き出した回答に二人は黙りこくり、

「うう……………!!」

近藤はもう我慢の限界だったのか両腕で顔を覆いながら机に突っ伏す。

腕で顔を覆いながら嗚咽を漏らす近藤に顔も目も向けずに土方は煙を吐く。

「なるほど……あんたが傷ついた理由はよく分かった。こりゃ、1期が好きな奴にマ

ジで最低最悪の嫌がらせになっちまってるな。故意かどうかはともかくしてもだ。二次創作じゃなくて公式自らこんな考察を持つてくるとはな」

「なぜだ公式イイイイ!! なぜ2期を使つてここまで1期を否定するウウウウウ!! 故意でないとしてもこの内容に誰か異議を唱えなかったのかアアアアア!!」

近藤は悔しくて悲しいのかわんわんと鳴きながら吠え、土方は遠い目を向ける。

「そもそも1期の世界観を色々つぶち壊してるだけでもファンが憤慨ものなのに公式自ら1期を否定しに来るような描写を持つて来たら怒るどころかもう泣き寝入りもんだ。かばんとサーバルとボスの旅の謎を解かず強引に終わらせた時点で色々察せるが……こうも念入りに死体蹴りかましてくるとはな……」

「なぜ伏線の回収も整合性を合わせるのもキャラの統一性も疎かにしてこういう部分だけはやんと作つてるんだアアアア!!」

「悪意か、それともよっぽどけもフレが自分たちの物だと主張したかったか、はたまた本当にウケると思つたのかどうかは知らんが、俺としてはこの未成品を完成品として放映しただけでも鳥肌もんだ……。作画の崩壊、杜撰な描写、辻褄の合わない話、そんな作品は世にごまんとある。だがそんな出来ないモンでも許容できちまうのが創作の世界でありアニメなんだろう。だが、ここまで伏線も考察も展開も本筋も説明も情報も辻褄も整合性も色々つぶん投げて考えるのを放棄させた挙句は悪意の存在を匂わせる作

品をととてもじやねエが俺は許容できるとは思わねエな……」

土方はタバコの煙を吐いてから、天井を見上げる。

「もしもだ。この作品が悪意も敵意もなく作り上げられたのだったら、作り手はかなり危ない架け橋を渡る事になる。キャラクターに悪意があるんじゃないやなく作品そのものに何らかの悪意が盛り込まれてるとちよつとでも判断されるモンをネットじゃなく公共の電波で流した時点で公式としてはOUTだろうな。案の定、ネットじゃもつぱら悪意ある説、もしくは悪意がないとしたらこの作品の骨組みを作った奴はクリエイター失格か無能って言う話題で方向は決まっちゃまってるらしい」

土方の言葉を聞いて近藤は頭を上げて真顔で告げる。

「トシ……知らないのか？ 今出揃っている情報じゃネットで2の悪意は……」

「近藤さん……」

土方は近藤の肩をポンと叩く。

「言わない方が良い事もある」

土方は首を横に振って優しく気に声を掛け、近藤は深く首を縦に振る。

そして土方は手を離し、説明を続ける。

「まあ、そこんとこの精査は2を見た奴ら全員に任せるとするが。なんにせよ、このアニメは誰も救われず、なんにも得られなかったってことだな」

やがて土方は近藤へと顔を向ける。

「なあ、近藤さん。2を先に見た俺でさハイエイヌとピーストの時点でキュルルはもう許容できるのだが……あんたはよく1期を見てあまつさへ2の最終回見てからでもキュルルを擁護しようとしてたな……。辛くないのか？」

近藤は身振り手振りを使って自身の気持ちを表現しようとする。

「俺だつてなあ、キュルルは受け入れたかつたんだ。新主人公どんとこいの精神だ！前作の主人公とは違うキャラと物語を楽しめるのだから！」

「だが主人公が酷過ぎんだかストーリーが酷過ぎんだか分かんねえがとにかくアレを受け入れるのが困難な要素がてんこ盛りになった」

「そうだ！ ジュースは飲めても下水を飲めるわけがない！」

と近藤は胸を叩きながら嘆き、更に心の思いを吐き出す。

「二次創作のオリキャラだつてどんとこいだ！ 原作に見られなかった物語を見られるのだからな！ それこそ歴史改変によつて生まれたIFによる原作キャラたちとオリキャラの新しい関係図を見る事ができるのなんて二次創作以外にはない！ 設定改変だろうが歴史改変だろうがどんとこいだ!! でも気に入らなかつたら拒否はします!!」

「まあ、根幹には別物と言う安心感が生まれ、スナック感覚で楽しむことができる世界なんだろうしな」

「そうだッ！」

と近藤は強く返事を返し、指をわなわなと動かす。

「でも『公式続編』の2は無理だ!! 何度否定しようとしても現実は覆らなかつた!! アレはもうIFでもなんでもなく正当な続編であり正史扱いだから! 例えるならそう! 楽しみにしていたギャルゲの続編でお目当てのヒロインと結ばれてイチャラブ見せられるかと思つたら、いきなり冒頭で新しいゲス男が現れてヒロインの記憶は消され、あまつさへその二人のイチャラブを見せられた挙句、ヒロインにさよなら宣言されたようなそんな気分になつた!!」

近藤の説明を聞いて土方はうんうんと顔を立てに動かす。

「まあ、概ねマジでそんな感じだからな……」

「更にエンディング迎えてその新しいゲス男が主人公より昔からヒロインと恋仲といつとんでも事実が飛び出すんだ!! まるで公式が主人公を排斥しあまつさゲス男を認めろ認めろと訴えかけてきて恐怖と気持ち悪さを感じてしまふんだ!!」

「本当にそう解釈できるのが尚のこと笑えねエな……」

土方はふうとタバコを吐き、「まあ、だがしかしだ」と言つて言葉を続ける。

「そもそも長編作品だつたり続編だつたりで新主人公だろうが新キャラだろうが受け入れさせるのは往々にして難しいだろうからな。認めさせられるかは作り手の腕次第っ

てとこだろう。結果は積み重ねの不足に描写不足に余計な描写が化学反応を起こしてドエライことになっただけだった」

近藤は力なく頭を垂れる。

「そこはもう仕方ないと納得するしかない……。だが、俺がなによりショックだったのは……けもフレ2と言う作品が、決して、肯定できない要素をいくつも作った事だ……」

「……………」

土方はただ近藤の吐露を聞いている。

「けもフレ2は確かにキャラデザは良い！ OPも良かった！ 次回予告も良かった！！ ペパプライブも良かった！ フレンズがかわいと思う描写も確かにあった！

イエイヌちゃんやロードランナーちゃんを生み出した功績も認めよう！ 1話〜7話まで好意的に見て今後に期待だとしていた！！ これからなんとかなるって！！ 1期ファンがちよっと騒ぎ過ぎだろうって！！ だがしかし！！ それらすべてを払拭して見えなくするほどアレは俺に不快感と嫌悪感をもたらしたんだ！！ 8話やイエイヌちゃん回ですら認められない要素満載なのに最終回の隠されたテーマまで解釈してしまうと2自体を肯定する事は決してできない！！ いや認める事すら^{はばか}憚れる！！」

そこまで聞いて土方は呆れた表情を浮かべながら同意する。

「そりゃ、2を1期全否定って解釈しちまったら1期ファンは肯定なんざできねエだろ

……。そもそも暴力に次いでイエイ又回になった時点で無理か……」

「そうなんだ！ 1期好きと2期好きをわざわざ対立させたいのか？は!? 愛犬家すら怒らせただけでも危険だと言うのに!!」

「まあ、憶測でしか語れんからなんとも言えんが一つの作品を通して1期を認めない&けもフレ俺の物と言う鉄の意志は感じられちまったな。否定する部分だけしつかり描いて後は雑になったと捉えられるのがある意味凄いが」

「続編が作られ前期のテーマ、更には前期主人公の存在を過去も未来も使って否定したなんて作品を俺は未だかつて見たことない!! ゲームだと前作の悪い部分を取り除いて作品を向上させたのなら良く聞くんだが、その斜め下をされるとは予想もしていなかった!! アレは視聴者を楽しませる為に作られたアニメとは程遠いナニカだ!!」

「いやホント……その言葉に尽きるな……。マジで楽しませる為に作られたとは思えねエよアレ……」

土方はタバコを吸っては吐き、近藤は俯きながら語気を弱めながら語る。

「ネットじゃ2の視聴を本気で止めさせる有様。視聴済みの者たちからは呪詛と怒り悲しみが撒き散らされ、1期1話の動画じゃ助けを乞うありさまなんだ……」

「まあ、クソゲーみたいにネットじゃネタ的な意味で人気になった例もあるが……」

「ある動画サイトを見たか!? かばんさん黒幕説! キュルルロシアのスパイ説! け

ものフレンズ2地獄説！ すっごーいいっぱいある批判動画と作品の粗を考察する動画の数々！ あとは皮肉った動画がちらほら！ ネタですら褒めてる物なんてほとんど見かけなかったぞ!! けもフレ2関係で目に付く人気動画はそう言うものばかりだ!! ……まあ、批判動画もなんとか褒める点を出してくれる所もあるにはあるし、ネタで頑張つてくれてはいるが……もうそう言うことなんだぞ……あのアニメは……」

「……マジでけもフレ界隈地獄だな……」

「各所は荒れに荒れ、昔のようなたのしー雰囲気はどこにもなく……けもフレ2の周りにはただただ阿鼻叫喚の地獄と相成ってしまった……」

「……………」

土方がただただ悲しい現実にも何も語れず、近藤は俯きながら頭を左右に振る。

「実はな、トシ。お前に相談する前に俺を心配して山崎と総悟が声を掛けてくれたんだ」

山崎退。真選組密偵であり、地味がトレンドマークの男だ。

「俺としては巻き込みたくはなかったが、声を掛けてくれたザキと総悟の厚意に甘えて思い切つてけもフレ2に苦心していると相談したんだ。するとな——」

『ああ……2ですか。やっぱ酷かったんですね』

山崎退。真選組密偵であり、地味がトレンドマークの男だ。普段は不幸な目に地味に遭遇する男ではあるのだが。

『俺、色々騒動とかも考えて、3話辺りで嫌な予感したんで切っちゃいましたが、やっぱりひでエ出来だったんですね……。ネットも炎上中みたいですし……。ご愁傷様です……。局長。ちなみに1期は見ましたよ、話題になってたんで。面白かったです』

「つと、ザキは下調べを怠らず危険察知能力をフルに生かして最悪の事態を回避したらっしょ」

「なるほど。そりゃ、賢明な判断かもな……」

「そして総悟に至っては……」

『2ですかイ？ そりゃ、あんな面白いモン早々ありませんぜエ。だって……』

沖田総悟。真選組一番隊長であり、

『——あそこまで『大炎上《ぼんがいへん》』が愉快的作品なんて早々ありませんからねエ』

サディストとして有名な青年だ。

『あの界限は最近結構な面白炎上してるんで、俺は楽しんでますぜエ。あッ、気になってつい1期は見ましたけど、パンチは弱いですが、良いんじゃないやありませんかねエ？ 裏設定は中々殺伐としてしてますしねエ。まあ、2期は1話で『クソ』と確信したんで1話切りしました。俺ア今、1・2、1話を楽しんでるで、近藤さんも切り替えて後日談楽しむ方向にシフトした方が良いですぜエ』

沖田の言葉を思い出した近藤は薄っすら笑みを浮かべる。

「なんだかんだ2と好意的に向き合ってるようだ……」

「いや、ただの野次馬根性だぞそれ……。あいつ楽しみ方まで歪んでな……」

土方は呆れた表情を浮かべ、近藤は満足げな表情で告げる。

「だが、俺としてはザキと総悟まで2の犠牲にならずに済んで安心していい」

と言つて近藤はゆつくりと顔を上げて遠く見つめるような憂いを帯びた眼差しで天井を見つめる。

「けもフレが輝かしかつたあの頃が遠い昔のようだ……。1年くらい前は、空前絶後の大ヒットで盛り上がったと言う情報に当時けもフレを評価していた俺はとても興奮したものだ……。これからどれだけけもフレが盛り上がるのだろうか……。一体どれほど伝説の打ち立てるのだろうか……。期待に胸を膨らませていたのにな……。今は見る影のないまったく真逆になってしまったが……」

近藤は右手で胸をバン!! と叩いて胸倉を力いっぱい握りしめながら首を垂れる。

「だが何より俺が一番悲しいのは……。1期を純粹に楽しめなくなった事だ……!!」

絞り出すように近藤は言葉を吐き出し、悲しみのあまり嗚咽と共に涙を流す。そして土方へと顔を向け強く言い放つ。

「トシッ! 俺は1期が好きだ!! サーバルちゃんとかばんちゃんとボスの旅が大好き

だった!! あの優しいフレンズたちが好きだった!! 大好きだったんだ!!」

悲しみと言う気持ちに宿した言葉を土方はただ黙って聞き、近藤は吐露を続ける。

「だがそうやって好きだと思っただけに……2期で待つかばんちゃんと言わんとサーバルちゃんとボスの結末を思うとただただ苦しい……!! ギスギスするフレンズたちを見て辛い……!! 2期は1期の世界をことごとくぶち壊してくる……!! あんなの……我慢できない……!!」

「……………」

「昔のようだと言わんばかりにキュルルの元に戻っていくサーバルを思うと……やるせなくて仕方なくなる……!! かばんさんの涙を見て苦しくなる!! サーバルの本当の親友がキュルルだったなんて後付け……あまりにもあんまりじゃないか……!!」

「まあ、好感度がゼロどころかマントルに到達するくらいマイナスな主人公の元に戻っていく人気ヒロインなんて公式で見たくねエわな……」

近藤は頭を垂れ、横に振りながらパン! パン! と拳で膝を叩く。

「キャラではなく公式から邪魔者扱いされるかばんちゃんが……あまりにも不憫過ぎる……!! イエイヌちゃんの孤独な姿は不憫を通り越して悲惨過ぎる……!! 2はただただ……新しいキャラも既存のキャラも不幸にしていただけ!! 愛も何も感じられないんだ!!」

そのまま近藤の独白を終え、しばしの間ただ頭を下げ、口を閉ざしていた。すると、土方はため息を吐いた後、言葉を紡ぐ。

「まあ、簡単に情報を統合するのだ。あのアニメ界の邪神とも呼ぶべき存在が完成するには——」

土方は右手を顎より少し下の左の位置に置きながら語りだす。

「どんどんつまらなくなる、伏線はほとんど回収しない、辻褄も描写もキャラもどんどん整合性が取れなくなる、胸糞要素あり、ファンだともっと胸糞、前作キャラは雑に扱う、虚無、主人公は最悪、大人気だった前作のファンが良かったと思う部分をこれでもかと壊した上で否定、そしてプロが作った公式作品……」

土方自身が悪いと思った部分を列挙する度に右手を左から右へと動かし、言い終わると手を下へと降ろす。

「この全ての力が合わさり、初めてあの邪神が完成するのか……。すげえなやつば、まるで儀式みてエだ……」

土方がある意味感心してうんうんと頷き、呟く。

「これでワザとじゃなかったら、ある意味神業だな……」
すると、

「トシ……」

近藤は土方の名を呼び、鋭い声で語り掛ける。

「俺はこれから万事屋と共にこの憤りと決着を付ける為に最後の戦いに向かう……お前は どうする……?」

「ふう……」

土方はただタバコの煙を吐くのだった。

「そりゃ、決まってるだろ」

*

場面は移り変わり、場所はビルの屋上。

日は沈み、外の景色は完全に夜へと変わった。

ビルの屋上の上——鉄柵の傍には桂小太郎、そして彼に 対面するように十数歩離れて立つのは銀時に新八。

「お、おいツラ、止めろ」

少しどもりながら銀時が右手を出して声を掛けると、遠い景色を眺めていた桂は勢いよく振り返る。

「ツラじゃない桂だ!! 止めるな銀時!! 俺は最早この世界に愛想が尽きた!!」

桂は両手にはボール型の爆弾が握られ、額にはハチマキが巻かれ両側の側頭部には火

が付いた蠟燭がくくり付けられ、和服の至るところにはボール型の爆弾がくくり付けられている。

桂は涙を流しながら吠える。

「最早俺の好きだったけものフレンズは帰ってこない!! 公式の名の元に好きと言う気持ちも思い出もただだ蹂躪されたのだ!! こんなドロドロした感情のまま国を憂い、戦う事だつてできはしない!! けものフレンズ2が記憶に残っている限り俺の怒りの炎は消えることはないんだ!! まるで発作のように問題ある部分を思い出してしまう俺の気持ちがお前にだつて分かるはずだ!!」

呪詛の化身となった桂は身振り手振りを大仰に振って自身の気持ちを表現する。

「12話と9話、更には公式集合絵を思い出すだけでも胸が締め付けられて反吐が出る!! だがなにより一番許せんのは最終回だ!! 俺もせめて最終回は伏線を少しは回収して少しはまとまって終わるだろうと思っただ!! 少しは皆が掌を返すような最終回になるだろうと言う期待もあったんだ!! なのに向き合ってみたらあの出来だ!! あそこまで斜め下の最終回を見たのは初めてだ!! 嫌悪感で何度吐き出した事か分からん!! アニメでここまでダメージ受けたのは始めてだ!! 俺にとって6話以降は地獄と言つても差し支えない!!」

「いや……まあ……すんごく分かりますけど……」

新八が微妙な表情でうんうんと頷き、桂は強く言い放つ。

「もうこうなれば強硬手段だ!! 悪意あるこの作品をこの世から一片の残らず消し去ってくれるわ!! 俺のこの怒りが悪意であると言うならば、悪意を持って悪意に鉄槌を下すまで!!」

「よしわかった! 俺も手伝う! 2を根絶やしすんぞッ!!」

と銀時が思いつきり賛同するのですぐさま新八が。

「ちよッ!? 銀さん! 違うでしょ!!」

「じゃ——なかった……。お、おめエが怒る気持ちも分かる。だけどテロ行為はマジで止めろ」

銀時は少しどもりながらも右手を出して桂を落ち着かせようとし、新八も右手を出して少しどもりながら声をかける。

「そ、そうですよ桂さん! んなしようなないテロしたらキュルル以下ですよ!」

「あのクソガキと一緒にするな!!」

と桂は怒りながら右腕を横にぶんと振る。

「そもそも貴様らネットの反応を知っているか!?! 2期は1期と違って子供に見せられないアニメどころか情操教育にすら悪いアニメと揶揄されるまでに成り下がってしまったんだぞ!! あれだけ子供にも見せられるアニメともてはやされていたのに、今

じゃ子供は主人公を嫌う、拳句はフレンズであるサーバルやカラカルまで嫌われる始末だ!!　そして極めつけはねつとちほーの大炎上だ!!　ヤバイ情報どんどん飛び出しけもフレ界限は地獄業火もかくやつと言った有様だぞ!!　どうなっているいんだだけのフレンズ!!　どうなっているんだアニメ業界!!　もう嫌だツ!!　もうたくさんだツ!!　こんなテロアニメが世に蔓延ると言うのであれば、俺自ら鉄槌を下してくれるわ!!」

「いやだからって店舗に並ぶDVD爆破と止めて下さい!!　マジでしょうもない!!」

と新八がツッコミ入れる。

「そもそもそれだと被害被るのがお店だけなんですが!？」

「そもそもDVDに攻撃しても2が倒せるワケねエだろ」と銀時。

「ならばこのまま泣き寝入りしろう申すか!!」

桂が怒りのままに声を張り上げ、銀時は右の拳で胸をトントンと叩く。

「俺たちは散々あの作品に怒らされ踊らされ、最後の最後まで傷つけられてきた。でも

このまま泣き寝入りしたって気が収まるワケじゃねエ。だったら——」

と銀時は低い声を漏らす。

「俺たちが最大限出来る俺たちなりの方法で決着を付ける他ねエだろ」

最終回：怒りの先 後編

桂のテロ行為阻止から場面は移り変わる。

外は明るく、時刻は昼だ。

場所は代わり、江戸一のとんでも発明家であるつなぎに作業用のゴーグルを掛けた白いひげを蓄えた老人である平賀源外の工場。

源外は工場の中で大きな円柱型の装置の操作盤を弄っていた。

カタカタと言う靴音に気付いてか、源外は後ろを振り向き工場の入口へと顔を向ける。

「おオ、来たか銀の時」

シャツターが空いた工場の入り口をくぐった先に立っているのは三人の男たち。

さきほど源外が呼んだ銀時。その隣には新八。そして後ろに立つのは桂である。

銀時が一步前に出ると、源外は声を掛ける。

「お前さんの注文通りのモンが出来上がったぜ」

源外が下にコードやパイプが繋がった大きな機械の土台の上にこれまた大きな円柱型の鉄の箱が付いた装置。その前に左右に開くであろう鉄の扉が付いている。

源外は装置を親指で指す。

「コイツがありや、お前さんの言う通り『姿形がねエ存在に実態を与える』事が可能だ」
「サンキュー爺さん」と銀時は軽く右手を上げる。「ならこっちは準備できたぜ」

「そうか。こつちもけものフレンズ2のデータは12話分ちやんと入れたぜ。そんじやま、装置を動かすからちよつと待つてな」

源外は操作盤に弄り始める。

「ところでよ銀の時」

源外は操作盤弄りながら視線を動かさずに銀時へと声を掛けてくる。

「俺もけもフレの1期と2期を見ちまった。だからお前さんがこれからどうするかはあらかた予想が付く」

「おい爺さん」と銀時は眉を顰める。「俺は見るのやめとけてちやんと忠告したんだぜ？ ぜってエ精神に悪いからせめて見るとしても1期だけにしとけてな」

「ああ。だが、俺の発明が一体どんなことに使われるか把握しときたかつたからな。だからこそ、俺も見ただよ」

やがて円柱型の機械の細い溝が光始め、駆動音が鳴り始める。

源外は操作盤を弄り続けながら語る。

「それで、見て色々理解しちまったもんだから、心臓病起きたのかと思うくらい胸が苦

しくなった」

「だから止めとけって言っただろ」

「まあ、そこは俺の好奇心による落ち度だ。言い訳しねエよ」

「つうかその歳でアニメに感情移入すんのかよ……」

「歳で体は鈍くなっても心はそう簡単に鈍くなったりしねエもんよ。いくつになろうが苦しい時は苦しいし、悲しい時は悲しいし、憤る時は憤るもんだ」

「そうか……」

「だからお前さんらがこれからする事に口出ししねエよ。もし俺の予想通りの奴がこの発明から出てきて、予想通りの展開に何なら、俺の溜飲も少しは下がるかもしれねエしな」

「どうだかねエ。あんたの期待通りになるとは限られねエぞ。2みてエにな」

「ガハハハ!! ちげエねエ!」

と源外は笑い声を上げ、すぐさま真顔へと戻る。

「まあ、ともかくにもアレを見ちまうと余計に俺もコイツの開発に躍起になっちまっ
たよ」

「そうかい……ご苦労だったな……」

「よせやい。劳いの言葉なんてお前さんらしくもない」

よつぽど精神的に堪えてるようだな、と源外は呟くと同時に稼働していた装置が止まり、やがて……。

ガンツ!! ガンツ!! ガンツ!! 円柱型の鉄の箱の扉を中からナニカが打ち破ろうとする音が聞こえてくる。

扉は内側から押し出され、軋み、ひしゃげる。

その異常事態とともに取れるような状態を見て源外は後ろ足で装置から離れようとしながら声を掛けてくる。

「いいか、銀の時。分かつちやいると思うが、『コイツ』をどうこうしたって何かが変わるワケじゃねエ。そいつは分かつてんだろうな?」

「あア」

銀時の短い返事に源外は「そうか」と頷いて安全そうな場所まで離れた時だった。

ガシャンツ!! と扉が内側から破られ、隙間から鋭く長い爪の生えた真つ黒な両手が出てくる。真つ黒な手は鉄の扉が両側に手を掛け強引に外側へと開けられる。

扉が強引に外側へとひしゃげ姿を現すのは、黒い異形だった。

全身は真つ黒で毛は一本もなく大柄で筋肉質。顔には一本の毛もなく口は口元まで裂けギザギザの歯が生え揃い、目元には目が無くまさに能面。頭のとっぺんには毛の生えていないケモミミが二本は生えている。

そしてなんとと言っても目立つのは黒い筋肉質な胸板にカラフルな文字が張り付けられている——『けものフレンズ2』と。

なんとも形容し難い存在が円柱型の装置の中からゆっくりと歩いて姿を現す。

銀時はゆっくりと自分の前へとやって来る異形に目を向けながら安全圏へと離れた源外へと声を張って話しかける。

「おい爺さん。コイツがけものフレンズ2の概念的なアレでいいんだな」

「おう！ 思った以上にとんでもねエバケモンが出て来たが間違いないエ！ 胸のタイトルの通りそいつがけものフレンズ2のアレなアレだ！」

「いや表現ふわふわアーツ!!」

とここでやっと新八が声を出してツツコミ入れる。

「『けものフレンズ2の概念が形になったモノ』ですよ!! 忘れないでください!!」

「もうメンドーだからこのまま続行するぞ」と銀時。

「おいコラ!!」

新八が文句を入れる中、ドシドシと思い足音を立てながら『けものフレンズ2』もとい黒い異形が銀時の三步前で止まる。

黒い異形は鋭い歯が生えた口から荒い息を出し、銀時は自身の前で立ち止まる頭一つ分デカい異形を見ながら源外へと話しかける。

「爺さん。コイツって会話出来たりすんのか？」

「さあな。さすがにここまで人間とかけ離れた奴となるとなんとも言えん」

と源外が答えた時だった。

「なんだ……貴様は？」

「うッ、うわッ!? いや、喋った!? 会話できるの!？」

まさか異形が喋ると思つてなかつたであろう新八はどもりながら驚き、銀時は眉一つ動かさずにポケットに手入れるとカチツと音が鳴る。

「我に何か用なのか？」

と異形が問いかけてくるので銀時は気だるげな声を出す。

「おい二次創作」

「誰が二次創作だ!!」

と異形は露骨に怒りを露わにしながら右手を横にぶんと振る。鋭い爪が当たりそうになるで銀時は真顔のまま背中を逸らして爪を避け、少し後ろに下がる。

異形は息を荒くしながら吠える。

「我はけものフレンズの本来本元であるけものフレンズ2であるぞツ!! 二次創作呼ばわりとは聞き捨てならんツ!!」

「そうかい。なら本家本元様の2。俺はお前に用があんだよ」

「……なんだ？」

「意外に素直ですね……」

新八の軽めのツツコミを聞きながら銀時は問いかける。

「2つてさあ、パラレルだよね？」

「バカを言え。2は正当な1の続編だ」

と異形は一蹴する。

「なんで続編なの？　なんでパラレルにしないの？」

「決まっているだろう？　1を否定する為だ。2をパラレル設定にしたのではファンに棲み分けさせるだけで意味がない。1ではなく2のキュルル、サーバル、カラカルの人々の旅こそが王道であり正史。それを2を見た者たちに印象付けなければならぬのだ。1の優しい世界もかばんも全ては邪道であり外伝。『本当』のけものフレンズは2。それ以上でもそれ以下でもない」

「そういう悪意もりもりのヘイト創作は二次創作でやってくんない？　棲み分けできるし、別物って前提で無視できるし。それを公式でやれるのホントしんどいんだけど。つか公式が前期否定設定とか持ち出されると1期を純粋に楽しめなくてツライさんなんだけど、俺」

「貴様ら1期ファンの気持ちなど知った事ではない!!　文句など知らん!!　楽しむなら

2期を楽しめ!! そうすれば気が楽になるぞ!! サーバルとかばんの旅は終わったのだからな!! これから始まるのはキュルルとサーバルとカラカルの旅だ!!」

「あくそく。そうなんだく。そういうこと言っちゃうんだく」

銀時は感情の籠らない声で告げ、横の新八が拳を握りしめ腕を震わせ今に殴りそうになつてゐるが銀時がガシツと掴んで止める。

銀時は新八の腕を抑えつけながら告げる。

「なるほど。つまりけもフレ2と1期のファンの俺らはマジで相容れないって事だな。じゃあ、言いたいこと言えたいし聞きたいこと聞けたから爺さんの装置入ってさっさと概念に戻ってくんない?」

「折角体を手に入れたのだから。1期ファンを残らず駆逐させてもらおう」

異形の言葉を聞いて銀時はゆっくり言葉を告げる。

「おうちにおかえり」

「おツ? イエイヌの回か? アレは良回であつただろう? 感動したであろう?」

「とつととおうちに おかえり」

「誰が帰るか!! 貴様ら1期ファンを消し去つてからだアツ!!」

異形は指先に長い爪が生えた拳を銀時に向かつて振りかぶる。

その拳が銀時の顔面に直撃し、ズドンツ! と言う鈍い音が工場内に響く。

銀時が攻撃されながらも横にいた新八、後ろにいた桂はとくに表情は変化させず、ただ成り行きを黙って見つめている。

「じゃあよ、最後に聞かせてくれや」

拳を額で受け、少しだけ額から血を流す銀時は異形の黒い腕をガシツと掴みながら鋭い視線を向け、問いかける。

「キュルルの正体は？」

「知らん。続編を待て」

「サーバルとかばんに何があった？」

「知らん。続編を待て」

「フウチヨウコンビって結局なんなの？」

「知らん。続編を待て」

「最終回の船セルリアンは？」

「知らん。続編を待て」

「海底火山は？」

「知らん。続編を待て」

「そもそもなんでカラカルもキュルルを覚えてねエの？」

「知らん。続編を——」

「そればつかじやねエかアアアアアアアア!!」

銀時が叫び、異形のどてつ腹にボディーパーカーを炸裂させる。

「ぐぼオツ!!」

あまりの衝撃だったのか口から唾液を噴き出す異形は両手で腹を抑えながら両膝を付く。

銀時は両膝を付いて見下ろす形となつた異形に鋭い視線を向けながら声を掛ける。

「なら次の質問だ。瓦礫の下敷きになつたアムールトラはどうなつた?」

「し、知らん! ぞ、続編を待て!」

と顔を上げながら必死に答える異形に銀時は「あつそ」と返す。

すると新八が一步前に出て。

「なんでペパプはアムールちゃんが埋まつた瓦礫の上でライブを?」

「それは伏線回収だ。だってオオミミギツネが願つたことを——」

「ただ猟奇作品になつてるだけじゃねエかアアアアアア!!」

と新八が異形の顎にアッパーカットを炸裂させる。

「ゴバアツ!!」

後ろに吹つ飛びながら仰向けに倒れる異形。だがすぐさま起き上がり、

「おのれこの危険なアンチ共がアアア!! 少しは2を認めんかアアアア!!」

怒りの声を震わせる。

すると、

「では、貴様が最終回で流した1期OPのファンサービスに対してお応えしよう……」

いつの間に異形の後ろに間り込んでいた桂が、

「アレのどこがフレレンズだアアアアアアアアア!!」

異形の背中にドロップキックを叩きつける。

吹っ飛ぶ異形を銀時と新八はそれぞれ横に下がって避け、異形はそのまま大通りへと吹き飛ばされる。

そのまま地面に倒れ込む異形を見た銀時はポケットからトランシーバーを取り出して、告げる。

「“お前ら”、聞いた通りだ。準備OKだぜ」

「おのれエエエエエエエ!!」

異形は怒り、顔を上げてゆっくりと立ち上がろうとする。

すると今度は少し遠く方から異形に向かって土煙を上げて走って来る黒い車が一台。後部座席には大量の黒いバズーカが乗せられていた。

そして黒い車の運転席に乗る土方と助手席に乗る近藤は息を吸い込み、

「二のけものばつかじゃねエかアアアアアアアアアアアツ!!」

異形は思いつきり車のフロントにぶち当たり、そのままきりもみ回転しながら空中に投げ飛ばされる。そして異形をぶっ飛ばした車は止まり、土方と近藤は扉を開けて出る。

すると停まった車を横を駆け抜け空中をきりもみ回転する異形に向かって走り出す人影が二人——それは神楽と志村妙だった。

妙と神楽は怒りの表情を浮かべながら、

「うオオオオオオオオオオオオオオオオ!! けもフレ2ウウウウウウウウウウウウ!!」

「全話見てやったぞオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

空中に浮かぶ異形の真下まで走り込み、異形に向かってジャンプする。

「すつちやかめつちやかなのはお前じゃアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

二人の鉄拳が腹に炸裂し、凄まじい衝撃によって天高く吹っ飛ぶ異形。

そして銀時、新八、桂、近藤、神楽、妙はそれぞれ黒いバズーカを肩に乗せて天に吹っ飛ぶ異形——けものレンズ2にそれぞれ向け始める。

「フレレンズを散々傷つけ蔑ろにし……」

と新八が思い出すのは不遇な扱いとなったイエイヌにアムールトラにボスにかばん

さん、

「いつもギスギスしてばかり……」

と近藤が思い出すのはお約束と言わんばかりに口喧嘩を始めるフレンズたち、

「けもの要素は間違いだらけな上に終盤は消え去り……」

と桂が思い出すのは雑な間違いに終盤ではほとんど描写されなくなったけもの要素、

「伏線も謎も回収もしない展開も本筋もぶん投げる……」

と土方が思い出すのは今までなんだったと言わんばかりの伏線に謎に展開に本筋、

「優しい世界を消し去り……」

と妙が思い出すのは1期の優しいフレンズたち、

「1期の好きだった要素をこれでもかと投げ捨て……」

と神楽が思い出すのは1期で好きになったあらゆる部分、

「なにより1期を否定する……」

と銀時が言葉を呟いた時だった。

空中で異形が張り裂けんばかりに声を張り上げる。

「バカか貴様等アアアアアアアアアアアア!! 我を否定すれば2期のフレンズたちも否定することになるのだぞオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

銀時が空中へと吹き飛び続ける異形を毛だえる気な瞳で見つめながら呟く。

「おめエが居ようが居まいが、あいつらが笑って生きれる世界はとづくに出来てんだよ……。どんなに否定しようとな」

そして銀時の言葉を皮切りに全員が一斉に心の思いを叫ぶ。

「「「「お前を公式けものフレンズとは認めねエエエエエエエエエエ!!」「」」」」

ほぼ同時に全員のバズーカから弾頭が発射させられる。

そして空中に吹き飛ぶ異形は眩く。

「忘れるな。……けものフレンズ2は永遠にふめ——」

ドガアアアアアン!! と凄まじい爆発と衝撃が空中で起こる。

「……………」

銀時を始め、空中の爆発を眺めていた七人はバズーカを下ろすのだった。

プツン!

とそこで『映像』は途切れ、真っ黒な画面へと変わる。

黒い画面に映った眼鏡の青年——新八はDVDデッキを動かし、ディスクトレイから一枚のディスクを取り出す。

「やっとな……完成した……」

新八は手に持ったディスクを眺め、やがて後ろを振り向き、『けものフレンズ2——怒りの先——』の上映を志村邸の居間で一緒に眺めていた者たちへと視線を向ける。

銀時、妙、近藤、桂、土方、源外はぐったりした様子で机に突っ伏し、神楽に至っては畳の上に大の字で寝ている始末である。

そう、あの異形——つまりはけものフレンズ2を倒した話は全部銀時たちが作った自主制作物なのだ。

怒りを吐き出すと言う目的の元、けものフレンズ2をぶっ倒すと言うテーマに乗っ取って作ったのがこの自主製作映像。仕事しながら合間を縫っては作ったものだ。決してなんの報酬も得られない。あるのはただ憂さを晴らせるかもしれないと言う思いだけ。

ちなみに土方だけは近藤が魂の抜けた屍みたいだったので、とにかく彼の気持ちに理解を示す為にもけもフレ視聴を決意した上で今回の映像制作に参加した口である。沖田と山崎にもちよつと協力してもらったりしている。

怒りと憎しみを糧とした1か月ぶつ通しの制作はかなりの気力も体力も精神力も全てを疲弊させていた。

「お前ら……なんべん俺の機械からくりをぶっ壊せば気が済むんだ……」

と源外は机に突っ伏しながら声を出す。

ちなみにあの異形は源外が作った機械人形からくりであり、セリフも銀時たちがけものフレンズ2を見て感じ取った事からキャラクターを設定してセリフを当てはめたのである。

「NGでも構わず毎度毎度粉微塵にぶつ壊されて一から作り直す俺が一番しんどかったけどな……」

ちなみに銀時たちあんまりにも怒りが根深いのかとにかくぶつ倒すシーンになると徹底的に破壊行動に移る事が多数あった。

毎度毎度台本にお構いなしに各々がもうめちやくちやにボコボコにするもんだから、NGは出まくるは作り直すはで製作時間がどんどん伸びてしまったのは言うまでもない。

銀時は新八にジト目を向ける。

「特に問題だったのは、俺のセリフのシーンでばつつあんが必ず機械からくりのセリフ遮って鉄拳おみまいするから、強引に止めるしかなかったんだよな……」

「いやいくら考察した要素で作ったセリフでもやっぱり腹立つもんは腹立ちますから。我慢できないんですよ」

新八が正直な気持ちで説明し、銀時へとジト目を向ける。

「そう言う銀さんや源外さんだって『概念がアレ』とかちやんとセリフ覚えて下さい。何度NGしたことか……」

「しょうがねエだろ、俺はあの時点でまで行くとかにかくぶつ飛ばす事が頭に先行してセリフがあやふやになんだよ。最後の決着シーンは見せ場だから何回カリテイクした

ろ？ でも段々後から気持ちが悪くなるから良い感じのシーンがアレしかなかったんだよ」

「俺歳だし……」

銀時に続いて言い訳をする源外の言葉を聞いて新八はため息を吐いてから告げる。

「桂さんの説得のシーンだつてモロに2に對する怨念が出て間違えてるし……」

「俺だつて色々と妥協してはいてもな、抑えきれなかつたんだよ」

と銀時が言い訳をし、新八はため息を吐く。

「……しかも銀さん、桂さんのシーンだけは撮り直し嫌がるからNG込みのアレを採用する羽目になつちやうし……」

「ツラの独白シーンなんか貴重な時間なんか使いたくねエからな。NGぶつこんでOKくらいでいいんだよ。拘る必要なしだ」

「ツラじゃない桂だ!! つうか銀時酷くない!? それはちよつとないんじゃない!?」

桂が文句言う中、新八はそのままディスクケースの蓋を開ける。

「まあ、創作による怒りは創作で對抗つて発想は良かったと思ふんですけど……」

新八はディスクを半透明な四角いディスクケースにしまいながら深くため息を吐く。

「ぶつちやけ……このメンツで思い描いた映像を考えた通りに作ろうつて言うのが高難易度でしたね……」

そこまで言つて新八は神楽と姉の妙にジト目を向ける。

「神楽ちゃんと姉上の暴走度合いが凄かったですよね……」

ちなみに一番機械人形を好き勝手にぶつ壊した比率が高いのは神楽とお妙である。

妙はニコニコした笑顔で。

「つい熱が入つてしまったの。ほら？　言うじゃない。真の名優の演技には魂が籠るつて」

「私と姉御の名演に恐れ入ったアルか？」

神楽は寝転んだまま腕を組んでふんぞり返り、新八はそんな女子二人を見てため息を吐く。

「ようは魂を込めるほど怒りが籠つてんでしょ？」

「とにもかくにもなんとか完成した……」と近藤は拳を握り満足げな表情で告げる。「俺たちの思いの丈を込めた物を……」

銀時は『けものフレンズ2―怒りの先―』をしまったケースを新八から受け取り、眺めながら声を出す。

「コイツがこうやって形になる事でいくらか留飲が下がったかもな……」

「にしても……」

と大の字になって仰向けに寝ていた神楽が上半身を起こして近藤へとジト目を向け

る。

「なんで私のシーンよりマヨラーの考察とゴリラの独白シーンの方が長いアルか？ 定春の家族としての悲しみよりもゴリラの悲しみとIQ足りない考察の方が上と申すアルか？」

「おめエは語るだけ語って後は喋らなくなったんだからしょうがねエだろ。つうかIQ足りないとはなんだ」

と土方はキレ気味にツッコミ入れ、説明する。

「アドリブ&ドキュメンタリー方式を取っちゃまったんだから我慢しろ。冷静な俺の考えと近藤さんの悲しみの独白が思ったより長くなっただけだ。深読みすんな。ちなみに犬の飼い主代表のおめエの悲しみも怒りも十二分に伝わったから大丈夫だ」

と土方がタバコを吸いながら煙を吐き、それを聞いた新八はボソリ。

「ぶっちゃけあんだだけ長い愚痴をまき散らしたら土方さんが冷静な考察をしているってのも説得力ありませんよね？ 一応愚痴はカットはしましたけど」

「それはそれ。これはこれだ。アレ見て感情を抑える事の方が難しいんだよ。口で吐き出さんと頭が怒りで冷静に働かなかったんだ」

タバコを吸いながら言い訳する土方。

土方の言葉を聞いて妙が頬に手を当てながら疲れたように言う。

「まあ、怒っている時のように感情が揺らぐ時が人間の本心が一番出る瞬間らしいけど、同時に思考が鈍る瞬間でもあるものね。怒りを抑えながら考えるのって難しいものかわ」

すると新八が少し不満そうに愚痴を零す。

「まあ、土方さんや姉上の言い分は分かるっちゃ分かるんですが……ぶっちゃけ僕も独白シーンは欲しかったなあ……。思いの丈を訴えたかったし……」

「俺だっけそうだ！ もっと俺の背負った悲しみと怒りを表現したかった！ だからもう一回ちゃんと撮り直そう!!」

と桂も胸を両の拳でバンバン叩きながら訴える。

土方は青筋浮かべて、

「全員の感想入れたらキリがねえんだよ、我慢しろ。あと桂のシーンは俺的にはどうでもいいから撮り直しは却下だ」

とツツコミと辛辣な言葉を入れてから話し続ける。

「怒りは後半にとっておくとして、近藤さんには悲しみをチャイナには犬の飼い主としての悲しみと憤りを出し切ってもらうことには成功したと言っただけだ。桂には憤りを持つ者は暴走せず溜め込まず、何に對して怒りを向けるべきかを表現できたはずだ。2に關係する一番の問題だった部分でもあるしな」

「しかし、まさか近藤さんどころか神楽ちゃんまでがNGなしの一発撮りを成功させるとは思いませんでした」

と新八が関心したように告げると近藤は腕を組みながら真顔で答える。

「そりゃ、ただ心の内に思ったことを体で表現しながら吐き出したただだからな」
「うんうん」と神楽も。

「……………」

そもそもこの二人は演技なんぞ欠片もしてないのは丸分かりである。

ちなみに近藤と土方のシーンは完全にアドリブであり台本など用意されていない。

なにせ土方が、

『必要ない。近藤さんに思いを吐き出させ、俺がそれに答える場面と考え語る場面を撮れ。あッ、俺がけもフレ2期を見てから1期を見るの前提で話しは進めていくからな？ さすがに逆から見れば冷静な感情で話せるだろ。あと、チャイナの愚痴もアドリブでやらせろ。近藤さん同様にありのままの方がリアリティがある』

で済ませたからである。どうやら土方は近藤と神楽には自由に喋らせた方が良くと思っただのだろう。そもそも万事屋も真選組二人のシーンも完全にただの記録映像——つまりドキュメンタリーに近い。ちなみに土方の考察シーンさへも。ちなみに沖田と山崎のセリフは編集によるものだ。

銀時は右肩を揉みながら気だるげな声で答える。

「つうかほとんどの奴のセリフが暴走したり噛んだ以外はほぼNGなんて一つもねエのは当然言えば当然か。アレほとんど俺らの思った事と作品に対する印象を尺に合わせ全部載せたもんだしな。演技の練習なんてそもそもする必要ねエくらい気持ちに乗ってるんだからよ」

とどのつまり、半分はただの怒りを爆発させた者たちを撮ったドキュメンタリー創作なのである。後は作品に対する印象を形にして表現しただけ。

「それで映像が完成したワケですけど……みなさん……。気持ち……。少しは楽になりました……？」

銀時は両手を後ろに倒して天井を見上げながら呟く。

「すげエ……。虚脱感……。まあ……。少しはスッキリした……」

銀時の言葉を皮切りに神楽、妙、近藤、桂、土方、源外は呟く。

「疲れた……」

「心は少し軽くなったかもな……」

「だが、同時に虚しさも感じている……」

「怒りを出し切るだけ出し切った後ってのは、こんなに疲れるモンなんだな……」

「なかなかできん体験だった……」

各々の感想を聞いてから、新八は銀時へと顔を向ける。

「……銀さん。それ、どうしますか？」

新八が半透明な四角いディスクケースに目を向けると銀時は手に持つディスクケースを見ながら呟く。

「どうすつかなあ……コレ……」

作つたは良いが怒りを発散させる為に作つたのでこれからどう利用するかは決めていなかったのだ。

「折角作つたんだ。ネットの動画投稿サイトにでも流してみるか？ 色々貴重な意見が聞けるかも知れんぞ？」

と土方は腕を組みながら言つて、言葉が続ける。

「まあ、桂と手エ組んで製作したのバレたくねエから桂だけは顔面モザイク&名前はピー音にするが」

「いやなんで俺だけ猥褻物扱いなんだ!! お前と近藤がモザイク&ピー音になれ!!」

「近藤さんとはもかくなんで俺まで猥褻部扱いにされなきやならねエんだよ!」

「え、ツ!! トシツ!!」と近藤。

「えどちほーの平安を護る警察である俺と、えどちほーを脅かすテロリストのテメエじゃどつちがモザイク処理受けるかなんて自明の理だろうが!!」

と土方が桂にビシツと指を突き付けると桂はすぐさま怒りを見せながら反論する。

「貴様こそいい歳した大人の公務員がアニメへの批判創作なんぞして恥ずかしくないのか!! 恥を知れ!!」

「それ思いつきりおめエにブーメラン刺さってんだろうが!! 俺ら全員穴の貉なんだよ!! そもそもこんなモンに正当性もクソもあるか!! 殴られたら殴り返す!! ただそれだけの話だろうが!!」

「それが社会人の言うセリフですか!? ちょっとは堪える努力をして下さい!!」

と新八がツツコミ入れると、土方がグツと拳を握る。

「やられたらやり返す!! 倍返しだ!!」

「おめエは半沢直樹か!!」

とツツコミ入れてから新八はあ……、とため息を吐く。

「つうかそもそも、僕らまでギスギスいが見合ってどうするんですか? 折角けもフレ2の批判しても僕らがこんなんじや説得力薄くありませんか?」

新八の言葉を聞いて冷静な態度へと戻っていく土方はタバコの煙を吐いてから応える。

「……冷静に考えてみる? こんな事に説得力も正しい答えもクソもあると思うか?

ようは俺たちの行動って批判しながら作品と殴り合ってるだけなんだぞ?」

「いや、それだと批判している人全員が殴り合ってる理論になっちゃうんですか？」

「それはそれ。これはこれ。うちはうちだ」

「あんた全然冷静じゃないじゃん!! 言ってる事滅茶苦茶じゃねエか!! もうちよつと落ち着いて物事を考えて発言しましょう!!」

「そもそも俺らはただ行き場のない怒りを形にして決着付けたただけだ。まあ、勝ちも負けもねエがな」

と言つて土方は遠くを見つめるように天井へと顔を向ける。

「俺は今回の作品かどうかも分かんねエモンを作つてようやく分かったが、作品つうのは多かれ少なかれ自分の中にある思いだったり考えだったり好き嫌いだったりアイデアだったりとかく色んなモンを詰め込んだ結晶体だと思つた。だからこそ2に悪意があると俺たちは受け取つたのかも知れねエが……。まあ、そこは置いといてだ。作つて発表したモンに正しいもクソもねエ。結局、なんもかんも見た奴任せになつちまんだよ。そしてそれは2つて言う作品が大いに証明した」

土方はタバコの煙を吸い、そしてまた吐いてから新八へと顔を向ける。

「俺たちも今回作つた作品を公開しちまえば評価も何もかも俺たちの手には負えなくなる。その恐怖を覚悟した上で公開するかどうか選ばなきやならねエんだ……」

「……………」

なにを思っただか新八は口を閉ざし、土方は顔を銀時へと向ける。

「おい万事屋。お前は どうする？ 今回の件はお前が発案者だ。だから公開決定権はお前に任せる。ネットの感想が賛否両論になろうが俺はお前を恨まん」

土方の言葉を皮切りに全員の視線が銀髪の男へと向けられるが銀時はただケースを見つめて黙ったまま。すると源外が言葉を漏らす。

「まあ、投稿するとしても俺ら別に役者つてワケでもねエしなー。冷静に考えたら顔そのまんまにするのつてはちよいマズイかもな。やっぱ編集して全員違う顔にするつて方が無難かもしれん。とりあえずまゝ、まずはゴリラ顔の近藤そいつをゴリラに変更するとして」

「ええええええええッ!」と近藤はまた驚く。

「それじゃ編集した意味ないネ」

と神楽が言うので源外は頭をポンと叩く。

「ああッ! それもそうだな! ならモザイクでいつか!!」

「んな殺生な!! つうかなんでモザイクかゴリラの二択しかいないのオ!」

「それで映像の出だしはちよつと物足りねエから、編集して色々つけ足すか。冒頭には『けものフレンズ2によって傷ついた者たちが居た』みたな文字とか入れてよ」

「それ良いアルな!」と神楽。

「ちよつと待つてエツ!! 話進めないでツ!!」

と近藤が必死に声を掛ける。

「俺ゴリラかモザイク確定なの!? エツ!? そんな無慈悲な編集されちゃうの俺?」

困惑する近藤を無視して神楽は人差し指を立てて言う。

「次にばつつあんは眼鏡かモザイクで私はぼつきゅぼんのナイスバディーでよろしくアル」

「わかった」と源外。

「おいコラアアアア!! 聞き捨てならねエぞおい!!」

と新八がすぐさま苦言を呈する。

「なんで僕は無機物かモザイクの二択なんだよ!! そしてサラツと自分は美化しようとするし!! ズルいぞおい!!」

今度は編集談義で盛り上がりそうな雰囲気になった時、妙が銀時へと声を掛ける。

「どうします銀さん? このままですと、男性はモザイクで女性は月下美人……まあ、私ともととですけど。とりあえず今言ったような感じで投稿ってことになりませぬ」

「ちよツ!? 姉上エエエエ!? それはない!! それはない!! さらつととんでもない方向に話進めないで!! 女性ファーストにもほどがある!!」

と新八がツツコムと桂が手を上げて抗議する。

「そうだそうだ!! 真選組の阿呆共はモザイクでも構わんが、俺はライダー俳優みたくカッコよく編集してくれ!!」

「桂テメエ!! いけしやあしやあと勝手な願望を!!」

土方が桂にガンを飛ばすと近藤は涙を流しながら手を上げる。

「せめてエ!! せめてモザイクは止めてくれ!! 100歩譲つてもゴリラは許すから!!」

「ならウ○コで」と神楽。

「ツツツ!!」

近藤がシヨックを受け、神楽がポンと掌に拳を叩く。

「なら全員ライダーに編集するってのはどうアルか? 2と言う名の悪をやつつけると言う点ではピツタリの配役ネ」

「いや、それはどうなの!?! 絵面的にも主旨的にも!!」

と新八がツツコミ入れると近藤が語気を強めに。

「いやだがそれも良いかもしれん!! 俺は動画サイトで他作品のキャラクターさんたちが2を批判しているところを見て勇氣と元氣と笑顔と多くの考えを貰ったぞ!」

「いや僕らが2をぶっ飛ばしたいと言う思いから撮った映像でしょうが!! 編集して顔を変えるどころか全部ライダーさんになったら怒った僕らの立つ瀬ないじゃん!!」

テーマどこいった!？」

すると次に土方が話し出す。

「そもそも話だが作り手の思いが詰まったのが作品でありキャラだろ？ だったらライダーでも一応は問題ねエンじやねエか？ 普通に俺らが作り手となりライダーに思いが込められて、形になったのが作品つてなるワケだしな。結局のところ俺らの間では2は作品ではあつても、けもフレとして認めねエつてだけの話に落ち着いてあの映像作品が生まれたのが今回の顛末だしな。つまりアンチ創作も俺らの思いが込められた作品ではあるはずなんだよ。アレ？ 俺ら今、何の話してんだっけ？」

「そもそも動画サイトで他作品のキャラが感想言うなんてモノは昔からではないか！」

と桂が強く言えば土方が言葉を返す。

「いやだから問題点はそこじゃねエだろ。そういう是非は考えても言い合つてもキリがねエから。そもそも作者の代弁みたいな作品なんて昔からあるらしいぞ。1期でもなんとなく作り手の思いや伝えたい事は感じ取れたぞ？ そもそも作品やキャラを思いの代弁者にするのが問題じゃなくてだな、2が公式ヘイトな上に同じ作品を同じ作品でヘイトして1期監督もヘイトしているように見えた上で思い出ぶち壊した上にクソつまらないから批判いっばいなんであつて……あれ？ そもそも俺らつてなにを問題にしてたんだっけ？」

次に近藤が腕を組みながら強く言う。

「なるほど!! つまり2は公式ヘイト創作になってしまったから批判だらけになっただけの話なのだな! そして俺たちみんな2と同じアンチになっただけの話だったんだな!! そして俺らはなんの話をしてるんだっけ!」

「近藤さん違う違う違う!! 正当な評価をしている人たちもアンチで一括りになっちゃうからそれ!! アンチどうこうはそもそも線引き分からんから無暗に決めん方が良い!! つうか問題はそこじゃなくてだな!!」

次に土方が右手をブンブン振りながら強く言う。

「元々2のヘイトと2次創作のアンチは別物だと俺は思うぞ!! アレは完全に嫌がらせにしか見えないアンチと言うかヘイトだぞ!! そして2次創作系のアンチは原作つうか作品の何が悪いとか気に入らないとか間違ってるか吟味して意見を表現して載せてるだけだ!! ちゃんと良い部分と悪い部分を精査してるところだっけ!! じゃあいいんだよ!! ようは畑違いっただけだ!! まあ、2は良い部分がほとんどねエもんだから否定一色になってんだだけ!! そして俺は何を言ってるんだ!! だんだん話がズレてワケわかんなくなってきたぞ!! なんでアンチヘイト談義してるんだ!?!」

すると次に新八が言葉を掛ける。

「そもそもアンチヘイトになってるどうこうが問題じゃないと思いますよ。ようは公式

作品が1期ファンと言うかけもフレ好きが楽しめそうだと思えるように宣伝した上にパツと見はけもフレで、実は最終回まで見たらただのヘイト創作だったと思える物を公共の電波で流しちやっただのが問題であって中身がそもそもアレなモンだから批判殺到なワケでして……あれ？ 公式作品だから悪いんだっけ？ そもそも作品自体が酷いからダメだったんだっけ？ 1期ファンとしてダメだと思ったから怒ったんだっけ？」首を捻らせる新八に続いて桂が力強く告げる。

「そもそも貴様ら悪意悪意言うが作品作りにとつて悪意もまった立派な起爆剤になることを知らんなのか!! かの有名なマンガの神様もありあまる嫉妬をバネに最高の作品を作った逸話が残っているのだぞ!!」

「言われてみれば確かに!!」と近藤。「作者のマイナスな感情が作品に投影されているパターンだって良くあるではないか!! 決して悪意が作品を悪くするとは限らん!!」

「でも2は絶対そのパターンには当て嵌まりませんよ!!」

と新八が強く言う。

「ネガティブな感情を利用して作品を昇華させようとした形跡が見当たりません!! 見て取れるのは吐き気を催す邪悪でした!!」

次に妙が力強く告げる。

「作品批判の筋がまとまらないと言うなら発想を変えるのよ!! 作品批判ではなくキャ

ラ批判なら良いんじゃないかしら！ キュルルは真性の外道かサイコパスなのだし！
批判したってアンチしたって問題ない筈よ!!」

「いやキュルルも作品に踊らされた一人であると考えたら責める対象にするのは違くありません!? 元々2の作り出した世界観をぶっ壊そうと作った創作ですよ!? そもそももけもフレ好きな僕らが一人のキャラを受け入れないと言うのも……」

と新八が弱々しく言うのと土方が強く言葉を掛ける。

「そもそも公式がアレを完成品で言うならキュルルの行動は立派な責める対象だろうが！ 世紀末ヒヤツハー共を責めんなって言うてるようなもんだぞ！ 俺はキュルルぶっ飛ばす二次創作は許す!」

「そもそもアレは完成品なのか!? 未完成品にしか見えなかったぞ!」と近藤は眉間に皺を寄せながら言う。「そもそも作り手によつてキャラが変わる子なのだぞ! マンガ版ちゃんの良い子らしいしな! ならキュルルを責めるのはお門違いなのでは!」

「マンガとアニメは別物ネ!」

と神楽が強く主張する。

「アニメのキュルルはマジモンのクソ野郎アル! 私はそこは断固として譲らないネ! イエイヌへの仕打ちは忘れないアル!」

次々から次に言葉が飛び出し、議論がどんどんエスカレートする。

「そもそもあんなしつちやかめつちやかな物語を一つのストーリーとして成立させてよいか!? 最後は全部投げっぱなしエンドだぞ!」

「そう言うのは打ち切りマンガじゃお馴染みですよ! でもああ言うのも一つの作品です!」

「私はアレを商業作品として扱うこと自体が許せないわ!! 人を楽しませる要素が限りなくゼロの物は商品としての価値ゼロじゃない!!」

「いや姉上! どんなに醜い結晶体でも作品は作品なんじゃないんですか!? 確かに僕もアレはアニメと言う商業作品としてはどうなのとは思ってたけども!!」

「なるほど!! お妙さんの言う通りだ!! 商業作品と言う観点から見ればクソゲーやクソ映画がいかにも多くの被害者を生んできたか推して知るべし!! 俺だって給料をどれだけでもフレに貰いだことか——!!」

「俺だってそうだツ!! お昼代や攘夷資金を節約して貰いだんだぞ!! お布教だってした!! 俺の細やかな金が全てアレに変わったと思うと涙しか出ん!!」

「いやあんな攘夷しろよ!! 寧ろ部下たち涙目じゃねエか!!」

「おい話が二転三転し過ぎだ!! キリねエんだよ!! 今までの一致団結どうした! なんで最後の最後までこんなグダグダ悩まなくちゃならねエんだよ!! もっと単純な話だったろうが!!」

「そもそも答えがない問答をしたって不毛なだけだ!!」

「そもそもこの問答を不毛なんて言ったら僕ら今までの苦悩はなんだったんですか!!」

「グダグダ女々しい奴らネ!! だからこそ今回の創作に踏み切ったことを忘れたアルか!!」

「リーダーの言う通りだ!! だからこそ単純明快に次は皆で一致団結してえどちほーを変えようではないか!! 俺たちの戦いはこれからだ!!」

「桂アア!! どさくさに紛れて俺らをテロリストの仲間に入れんじやねエーツ!!」

「お妙さんと俺のハネムーンはこれからだ!!」

「黙れゴリラアア!! おめエをアンチすんぞコラア!!」

「クツソツ!! なんて不毛なやり取りなんだ!! 答えが見えてこねエ!!」

銀時と源外以外のメンバーが答えが見つからないどころかあつちこつちに話題が飛び始め、問答を繰り返しわちやわちや騒いでいると天然パーマの男は気だるげな声で告げる。

「なんかもういいや。考えんの疲れた」

銀時の言葉を皮切りに全員の論争が一旦停止し、銀髪天然パーマはテーブルの上にディスプレイセットを置く。

「俺は別に二次創作してる作家でもプロのクリエイターでもねエから、関係ねエし。体

使つてとにかく怒りを発散できちゃったみてエだから」

「……じゃあ、投稿はしないんですか？」

と新八が聞くと銀時は肩を揉みながら気だるげに言う。

「ぶつちやけ留飲が下がった今じゃ、投稿して評価とか感想とか気にすんのもメンドーだしな。どうでもいいわ、俺。二次創作作家じゃなくて俺は侍で万事屋で銀さんだし。つうか、あーだこーだ言つて結局のところ1期が良作で2は最低最悪のけものフレンズでもないナニカつて俺たちの考えは揺るがねエしな」

銀髪天然パーマの言葉にその場にいる面々は顔を見合わせ、銀時は立ち上がりながら肩を揉む。

「今後同じような事がないことを願いながら、好きな事——まあ、ジャンプ見んのに力使うわ、俺」

続くように新八、神楽、桂、妙、近藤、土方も立ち上がり始める。

「僕も撮り溜めしたわたてん見ようと思えます」

「私はツラが進めたケムリクサ見るネ」

「ツラじゃない桂だ。俺はドロ口とケムリクサにけものフレンズRにしよう。今から楽しみだ」

「私はかぐや様。ラブコメって結構好きなのよね」

「お妙さん。なら折角ですし俺とラブコメしません?」

「あら? 私はラブ米派ですけど、ストーリーカーは好きじゃありませんよ?」

「なんの捻りもなく拒否られた!?!」

「俺はとりあえず、マガジン派として五等分をチャックしとくか」

と言つて最後に土方が立ち上がる。

「……………」

座つたままであつた源外は立ち上がる彼らを見てから、土方へと顔を向ける。

「なんだかんだ勢いで忘れてたけどよ、お前さん良いのか? 一応俺は指名手配されてんだけど?」

源外は昔江戸で騒ぎを起こしたことがあり、その時から指名手配されているのである。源外の言葉を聞いて土方はチラリと彼に視線を向けてから再び歩き出す。

「あんたは今回の映像制作の一番の功労者だ。今日までは俺も近藤さんも見逃す」

そして土方は小さく、ありがとよ、と言葉を漏らして歩いて行くのだった。

「そうかい……………」

よつこらしよと言つて源外もまた歩き出すのだった。

ため息を吐き、銀時は歩いてくが途中で足を止めてディスクケースを片そうとする新八をチラリと見てから背を向けたまま声を掛ける。

「なあ、新八……」

「はい？　なんですか？」

新八は手を止め、銀時は振り向かないまま言葉を告げる。

「もし、2のことなんか気にせずによ……もう一度けものフレンズを楽しめる日が来たら……今度は何が好きか……語り合おうぜ……」

銀時はそのまま、歩き出す。

そして新八は、

「……………はい」

小さい声でしつかりと頷き、そのままケースを棚へと仕舞う。

そして歩いて行く銀時たちの後を追いかける。

各々は好きな物、楽しみにしている物、軽く穏やかな会話をしながら歩いて行くのだった……。

*

ちよこつと後日談

ある時、けもフレ炎上を眺めていた沖田は土方に『ある情報』を教える。

「土方さくん。実はおもしろいエ事にけものフレンズ2って実は1期から2000年前後って設定が——」

「やめろ」

土方は低い声で告げ、沖田は言葉を止める。

「それ以上なにも言うな」

と言つてから、

「あたまがおかしくなる」

土方凄まじくドスの効いた声を出し、沖田の元を去つて行くのだった。

その日を境に土方の前で『けもフレの話はしない』と言う暗黙の了解が真選組の隊士たちの間で決まったそうなの。

延焼編

延焼編：物事簡単に決着が付いたら苦労はない

今から3カ月前。あらゆる怒りと悲しみと苦しみをけもフレ好きに振りまいたけものフレンズ2。

万事屋、真選組、志村家、攘夷志士とその被害はあらゆる各所に及び、それでも彼らは2へと立ち向かい一応の決着を付け、一段落付いた。

そしてなんやかんやで怒涛の数か月を過ぎた万事屋もひと段落が付いたのであったが……。

「銀さん銀さん。ちょっといいですか？」

と万事屋のリビングでは手に二枚の用紙を持った新八がソファで寝そべりながらジャンプを読んでいる万事屋のオーナーたる銀時へと話しかける。

銀時は二枚の用紙を持つ新八へと目を向けることもなく問いかける。

「どうした新八。楽に金を稼げる方法でも思いついたのか？」

「いや、そうじゃなくてですね。けもフレ2で新しい情報が——」

「それは……作品内か外か？」

言葉を遮つての銀時の問いかけに新八は言葉を止め、一瞬下唇噛んでから口を開く。「内です」

新八がそう言った瞬間、いつの間にか彼の眼前に立った銀時は人を殺しそうなほどの眼光を突き付けながら眼鏡の青年の胸倉を右手で掴み上げる。

静かだが凄まじい剣幕に新八は黙りこくり、銀時は言葉を続ける。

「どうせまたなんか俺たちの怒りが再点火されるようなモンだったんだろ？」

「え、えエ……まあ……」

新八は汗を流しながら頷き、銀時は鋭い眼光のまま言葉を続ける。

「俺だつてな、□には腹こそ立った。だがな、決着は付けたつもりなんだよ」

「私だつてできるだけ不満を押し殺して万事屋頑張つてんだヨ。あとからぐちぐちぐちぐち女々しい奴ネ」

とここで声を出すのは、実は銀時と対をなすようにソファへと寝転んでいた神楽。赤毛のチャイナ服の少女は寝転びながら告げる。

すると新八は戸惑いながら言う。

「えッ？ い、いや……そう言う二人こそ、ここ最近不機嫌だしおかしくありません？
なんか銀さんはどっかによく出かけますし。神楽ちゃんだつてよくどこかに電話して
るし。なにしてんですか一体」

新八の言葉を聞いて銀時と神楽は告げる。

「ネットで愚痴零してるだけ」

「お問い合わせしてるだけ」

「いや全然決着付いてないじゃん!! あんたらの内心まだまだ決着付いてないじゃん!!」

「〃作品に対する決着〃はな!!」

と銀時が怒鳴り声を上げ、説明する。

「でもな、外側の不祥事多過ぎだろ!! これじゃとてもじゃねエが見て見ぬ振りできねエよ!! もうアニメ関係じゃなくて普通にニュース関係してる気分だわ!! どうなんってんだ一体!! 俺らは一体なんの話題に首突っ込んで!! マジで警察案件じゃねエか!!」

「私だってそうアル!!」と神楽。「だから警察の阿呆共に電話してるネ!! ゴリラとはすっかり電友ネ!!」

「いや真選組に問い合わせしてどうすんの!! つうか近藤さん暇人!! 電友ってなに!? 電話代勿体ないにもほどがあんだろ!!」

と新八はツッコ入れ、銀時は疑惑の目を向ける。

「つうか新八よ。お前こそお問い合わせしてんの? 銀さんたち任せにしてない?」

「いや、あんたでしょ他人任せにしてんの!! どうせめんどくさがつてネットで愚痴しか零してないんでしょ!! でも僕は違います!! うちのパソコン使つて何度もお問い合わせメールやら御上にもメールだつて送つてるんですよ!!」

とここで新八もまた語気を強めながら自身の気持ちをぶちまけ、銀時は新八の胸倉を離してビシツと指を突き付けながら熱く語る。

「そうだ!! 俺らの決着は全然ついちゃいない!! でもお問い合わせ文は考えんのもめんどくさ過ぎて諦めた!! だからお問い合わせが得意なフレンズたちに任せます!!」

「だから俺はフレンズたちを応援した!! 今までの不祥事に関して罵詈雑言ぶちまけながらな!! お陰で過激派&愉快犯&業者扱いだ!!」

「じゃあネット止めろや!! たぶん今のおんたネットに向いてねエよ!!」

「とにかくだ!! 不祥事関係は作品“外”の問題だ!! 作品うんうぬかんぬんはもういい!! もうたたくさんだ!! 語り尽くした!! 向き合い尽くした!! 悪い点言い尽くした!! 動物描写間違ひ多過ぎだろ、とか!! 新しい悪い点も見つかるが、とにかく2ヵ月前の撮影で終止符は打つた!! あとは成るように成れだ!! ゾンビコンテンツなんぞもう知つたこつちやねエよ!!」

「あの……銀さん? そもそも万事屋にパソコンないのに……どうやってネットにコメ

ントを？　ここ最近、僕んちのパソコンとか使ってないですよね？」

「今どきはフリーでパソコンが使える場所なんていくらでもあんだろうが」

新八は「ああ……」とうんうんと小さく頷きながら「だから最近、外出多いのか」と納得した様子。そう呟いてから、新八は銀時へと言葉を掛ける。

「いや、まあ……外のことはもうみんなで情報共有しながら頑張ろう……くらしか僕も意見はありませんが……」

「もう胸糞過ぎて色々嫌気さすが、ライダーたちも閣下たちもランボーたちもペニーワイズたちもレオンもベイダー卿たちもジョーカーさんたちもエミネムさんたちもゴジラもデビルマンたちもワイトたちデュエリストたちもスタンド使いたちも頑張ってくれてる!!　俺たちも頑張るしかない!!　向き合うしかない!!　鬱陶しいノイズが相手でもなんとか頑張るしかない!!　俺たち自身の為にも!!」

「なんかもう魑魅魍魎というか百鬼夜行というか、ドエライことになりましたよね……：つうかあんたは頑張らなくていいです。場を乱すだけなんで」

「それで新八、その新情報ってなにアルか？」

と神楽は言って再び問いかける。

「私、その新情報っての気になるアル」

神楽の言葉に銀時は少女へと顔を向けながら眉を顰める。

「おい神楽。お前、あのヘイト創作もどき見といてまだ懲りねエのか？ あの□を作り不祥事起こしまくりの公式が提示するもんだぞ？ どうせロクでもねエもんに決まってるだろうが。そんな罠に惑わされず、お問い合わせアタックするんだ。銀さん応援してるから」

「いや、あんたもしろよお問い合わせ。子供の神楽ちゃんにさせてないで。いや神楽ちゃんもまともなお問い合わせしてないけど。って言うかお問い合わせもいいですけど、時折情報を集めていくうちにこれまたドエライ新設定が飛び出してきたんですよ。僕は正直、今になるともう怒りを通り越して呆れとため息しかでないですけどとにかくヤバかったです」

新八の言葉を聞いて銀時は目を細め、視線と顔を斜め下にしながら少しの間考えてから、ため息を吐きつつ告げる。

「……そんで、なに？」

そんなこんなで、新八の持つて来た新情報に付いて話し合う事になった万事屋三人組。

左側のソファに銀時と神楽が隣り合って座り、右側に新八が座っている。

神妙な面持ちで新八は手に持った用紙の一枚を銀時へと手渡しから告げる。

「それが僕がコピーした最近話題になったマジモンの蛇足とも言うべき裏――」

「チーーーーーーン!!」

銀時は渡された用紙で思いつきり鼻をかむ。

「……………」

新八が口を閉ざし、銀時は鼻をかんで鼻水でぐしゃぐしゃになった用紙をくしゃくしゃに丸め込みながらゴミ箱にポイッと投げ捨てる。

新八は投げ捨てられた2の新設定の用紙を見てから銀時へと顔を向ける。

銀時は目頭を親指と人差し指で揉みながら声を出す。

「わりイ、新八。俺、ネットのし過ぎで疲れてるみたいだわ……。なんかけもフレで『自殺』とか『消滅』とか『なりそこない』とんでもねエ単語見えた気がするんだが……。幻覚だよな?　なんか色々々と矛盾してるし、日本語がなんかおかしいし……」

ぶつぶつ愚痴を呟く銀時に新八は少しの間口を閉ざし、すると神楽が声を出す。

「おいばつつあん。もう一つの紙はなにアルか?」

「……………えツ?　あ、ああ……コレね?　コレには2のラッキーさんについての説明が――」

「――」

「マジでか!?!　私、ボス好きアル。ちよつと見せるネ」

「いや、神楽ちゃんは見ない方が……」

新八の制止も聞かずに神楽は彼が持っていた用紙をぶんどって見る。

「チーーーーー！！」

神楽は手にした用紙で鼻をかみ、ダストシユート！

「私、最近問い合わせのし過ぎて疲れてみたい……。ボスが無残に壊れてる幻覚見ちゃった……」

右手で目元を抑える見つめる神楽を見ながら新八はまた口を閉ざし、やがて目頭を抑えたままの銀時へと顔を向けて口を開く。

「あの銀さん……ぼくもう……。けもフレにどう向き合ったらいいのか……。このままだとともに二次創作も作れそうに……」

「性質の悪いアンチの設定も作品も忘れろ。頑張つて二次創作をつくったーしてここのすきを探求するんだ。前は多少は冗談だったが、ほぼ確信した。もうコンテンツはマジで終わりだ……」

銀時の言葉に新八はしつかりと頷く。

銀時はゆっくりと手を顔から離して、疲れたような表情で告げる。

「……あのな、新八よ。これは俺の個人的な意見なんだが、裏設定って……。本編あつてこそだよな？」

「えエ……。まあ……」

と新八は何度か軽く頷きながら相槌を打つ。

「確かによ、『面白そうな』裏設定とか設定って世の中にたくさんあるよな？ でもな、それが本当の意味で評価されんのって……本編あつてこそだよな？」

「まあ、本編にちゃんと反映されなきゃ……そもそもあつても意味ないですよね……」

「でだ……本編を度外視して設定だけ出してどうなんだ？ ストーリーで魅せなきゃ、ただキャラ苛めしてるだけじゃねエか……。感心じゃなくて胸糞と嫌悪感しか出ねエよ……。マジでアンチが嫌がらせにしかなつてねエじゃねエか……。いや、さすがにある内容だと反映されても……結局胸糞かもしれねエが……」

「なんていうか、本編に提示したちぐはぐな設定を無理やりくっ付けた上で1期に嫌がらせを上乗せしてる感じなんですよね……」

「その上、この設定はマジでワクワクしねエんだよ!!」

銀時は興奮気味に胸をパンパンと叩く。

「驚きもしない！ けもフレとしての魅力がまるでない!! ただつままない本編につまらない設定くっ付けただけだ!! クソでクソを捻りだしただけのクソなんだよ!! なんだコレ!! 本当にけもフレ好きに嫌がらせしかしてねエじゃねエか!!」

最初に情報を提示した新八も話すのが疲れたのか辛いのか、視線を斜め下へと下げ

「ボスとかばんちゃんとアムールちゃんの手りは……もう……擁護できんというかなんというか……」

「つうか、これ……ただの後付けじゃね？ 終わってツツコミだらけの本編にわざわざ強引に設定くっ付けだけじゃね……？ 前々からこんなに設定を考えてたなら、普通に本編に生かすよな？ でもなに一つ生かされてなくね？」

「本当になにも考えてなかったのかもしれないね……。やってることが行き当たりばったり過ぎますもん……」

「まさか2カ月近く経ってこんな黒歴史ノート以下のもんを設定として出してくるとはな……」

銀時は精神的にどつと疲れたように頭を垂れる。

すると新八は「でも」と言っと思いついたかのように語る。

「長期連載作品は後付け上等で魅力も——」

「新八……」

銀時は優しい気な声を出し、顔を上げて言う。

「けもフレは、長期連載作品じゃないだろ？ ライダーみたく長期間放送作品でもねエだろ？ そもそもアレの後付けに魅力もクソもないだろ？ 本編に魅力もねエんだから。論点ズラした強引な擁護はバカを見るだけだから止めとけ」

「ですよね……」

新八は諦めたように頷くのだった。

「まあ、そうだな……。結論を言うのだ……」

銀時は億劫そうに立ち上がり、頭を掻きながら気だるげな視線を新八に向けながら告げる。

「あんなクソ設定より、ジャンプの作者コメント見てる方が遥かに価値あるよな」